

茨城県教育財団文化財調査報告第341集

# 堀町西古墳

一般県道真端水戸線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23年3月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第341集

ほり まち にし  
**堀町西古墳**

一般県道真端水戸線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 23 年 3 月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人茨城県教育財団

# 序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また県土の均衡ある発展を支える基盤として、県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

その一環として整備される一般県道真端水戸線の道路改良工事は、市街地の混雑緩和と周辺環境の向上を図る上で極めて重要な役割を果たすものです。しかしながら、その事業予定地内には堀町西古墳が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成20年1月と平成21年4月から5月までの3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、堀町西古墳の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成23年3月

財団法人茨城県教育財団  
理事長 稲葉節生

# 例　　言

1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 19・21 年度に発掘調査を実施した茨城県水戸市堀町的場 639 番地の 2 ほかに所在する堀町西古墳の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成 20 年 1 月 1 日～1 月 31 日

平成 21 年 4 月 1 日～5 月 31 日

整理 平成 22 年 4 月 1 日～7 月 31 日

3 発掘調査は、平成 19 年度は調査課長瓦吹堅、平成 21 年度は調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

平成 19 年度

首席調査員兼班長 藤田哲也

主任調査員 寺内久永

主任調査員 須賀川正一

平成 21 年度

首席調査員兼班長 成島一也

主任調査員 斎藤貴史

主任調査員 斎藤和浩 平成 21 年 5 月 1 日～5 月 31 日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長樋村宣行のもと、主任調査員斎藤和浩が担当した。

5 本書の作成にあたり、古墳の築造年代及び埋葬施設について、茨城大学田中裕氏にご指導いただいた。

## 凡　　例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 44,840 m, Y = + 51,840 mの交点を基準点（A 2 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…, 西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j, 西から東へ1, 2, 3, …0 とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SF - 道路跡 SI - 壺穴住居跡 SK - 土坑 TM - 古墳 PG - ピット群

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 TP - 拓本記録土器 Q - 石器・石製品

土層 K - 搅乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 600 分の 1, 各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土・赤彩・施釉 炉・火床面

竈部材・粘土範囲・黒色処理

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。計測値の単位はcm, gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壺穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 壺穴住居跡	11
(2) 土坑	14
2 古墳時代の遺構と遺物	16
(1) 古墳	16
(2) 壺穴住居跡	24
(3) 土坑	30
3 奈良時代の遺構と遺物	30
壺穴住居跡	30
4 平安時代の遺構と遺物	40
土坑	40
5 その他の遺構と遺物	41
(1) 円形周溝状遺構	41
(2) 道路跡	42
(3) 土坑	43
(4) ピット群	47
(5) 遺構外出土遺物	52
第4節 まとめ	56
写真図版	PL 1～PL12
抄 錄	

# ほりまちにしこふん 堀町西古墳の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

堀町西古墳は、水戸市堀町の西部、双葉台団地の北東約1kmに位置し、沢渡川が形成した沖積低地をのぞむ標高約39mの上市台地の北縁部に立地しています。今回の調査は、一般県道真端水戸線の改良事業に先だって行いました。道路予定地内には当遺跡があることから、遺跡の内容を図や写真に記録するために、茨城県教育財団が発掘調査を実施しました。



## 調査の内容

調査面積は2,161m<sup>2</sup>で、平成19年度と21年度の二回にわけて調査を行った結果、縄文時代中期（約5,000年前）の竪穴住居跡や貯蔵穴、古墳時代中期から後期（約1,600～1,400年前）の円墳や方墳、竪穴住居跡、奈良時代（約1,300年前）の竪穴住居跡、平安時代（約1,000年前）の土坑などを確認し、長期間わたって土地利用がされていたことが明らかになりました。主な出土遺物として、縄文土器（深鉢・鉢）、土師器（壺・椀・埴・壺・鉢・甕・甌・手捏）、須恵器（壺・高台付壺・蓋・長頸瓶・甕）、金属製品（刀子・鉄斧）などがあります。



北側上空から見た堀町西古墳



### 第1号墳完掘状況

古墳時代中期の円墳です。後世の搅乱により、埋葬施設や墳丘の構築状況は確認できません。周溝から完形の土師器の壺や甕の破片、刀子などが出土しました。



### 第2号墳完掘状況

古墳時代中期の築造と推測される方墳です。第1号墳、第3号墳と約3mの等間隔で隣接しており、計画的に築造されたものと考えられます。



### 第5号住居跡遺物出土状況

床面から焼土塊や炭化材が確認でき、焼失住居と考えられる古墳時代後期の住居跡です。住居の北東部を中心に完形の壺や甕、甌が出土しました。

### 平成19年度調査区完掘状況

奈良時代の住居跡4軒を確認しました。扇状に配置されており、出土遺物には、マツリに使用されたと考えられる手捏土器があります。

## 調査の成果

当遺跡は、これまで小円墳1基と考えられていましたが、今回の調査によって、新たに円墳と方墳が1基ずつ確認でき、古墳群が形成されていたことが判明しました。また、縄文時代中期から平安時代にわたる複合遺跡であることも分かりました。3基の古墳はほぼ等間隔で、計画的に築造されたことがわかります。規模からみて、中小豪族の墳墓群であると推測されます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、水戸市において一般県道真端水戸線の道路整備を進めている。

平成18年5月9日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道真端水戸線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成18年6月7日に現地踏査を、平成18年7月11日、平成20年4月30日に試掘調査を実施し、堀町西古墳の所在を確認した。

平成18年7月31日、平成20年5月15日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に堀町西古墳が所在すること、及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成19年11月19日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成19年11月20日、茨城県教育委員会教育長は現況保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年11月21日、平成21年2月5日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して一般県道真端水戸線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成19年11月22日、平成21年2月23日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、堀町西古墳について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財團を紹介した。

財団法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成20年1月1日から1月31日、平成21年4月1日から5月31日まで発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

堀町西古墳の調査経過については、その概要を表で記載する。

期間 工程	平成20年			平成21年		
	1月		4月		5月	
調査準備 表土除去 遺構確認						
遺構調査						
遺物洗浄 注記 写真整理						
補足調査 撤収						

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

堀町西古墳は、茨城県水戸市堀町的場 639 番地の 2 ほかに所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置している。市域の地形は、西部が八溝山地中央部の鶏足山塊に属する標高 60 ~ 200 m の丘陵地、中央部が茨城台地の北東部にあたる標高 20 ~ 30 m の水戸台地、北部の一部が標高 30 ~ 40 m の那珂台地、東部が北から東へ流れる那珂川が形成した標高 10 m 以下の沖積低地からなり、このうち台地部が最も広い地域を占めている。また、水戸台地は那珂川の支流である沢渡川、桜川、逆川によって上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地に分けられる。

台地の地質は、古世代の鶏足層を基盤とし、下層から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘礫層の上市層、灰白色粘土の常緑粘土層、関東ローム層の順に堆積している。また、沖積低地部は河川堆積物である砂礫層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる。

当遺跡は、水戸市堀町の西部、双葉台団地の北東に位置し、沢渡川が形成した沖積低地をのぞむ標高約 39 m の舌状台地である上市台地の北縁部に立地している。調査前の現況は畠地である。

### 第2節 歴史的環境

ここでは、水戸台地のうち、当遺跡の所在する上市台地にしづつて主な遺跡を記述する。台地上には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く確認されている<sup>1)</sup>。

縄文時代には、<sup>あたこちよう</sup> 愛宕町遺跡、アラヤ遺跡〈11〉、<sup>ちょうじややま</sup> 長者山遺跡〈12〉、<sup>わたりちょう</sup> 渡里町遺跡などが台地の縁辺部に立地し<sup>2)</sup>、早い時期から集落が形成されていたことがうかがえる。愛宕町遺跡では、定角磨製石斧をはじめ、中期阿玉台式期に繁栄した角押文に文様が代表される文様構成をもつ土偶が発見されている<sup>3)</sup>。また、アラヤ遺跡では、晩期の高床住居跡と思われる柱穴が確認されており<sup>4)</sup>、古くから人々の生活に適した場所であったことがうかがえる。

弥生時代に入ると那珂川流域の台地縁辺部を中心に遺跡が確認されており、上市台地上には、十王台式土器が出土している堀遺跡〈15〉、西原遺跡〈9〉、文京二丁目遺跡などがあげられる。

古墳時代になると集落は台地の中央部ばかりでなく、やや奥まった部分にも認められるようになる。また、古墳も時代と共に台地縁辺部から中央部に広がり、群をなすようになる。遺跡としては、<sup>あたこやま</sup> 愛宕山古墳群、<sup>にしら</sup> 西原古墳群〈10〉、<sup>だいわたり</sup> 台渡里遺跡〈13〉、<sup>むかいばら</sup> 向井原遺跡〈26〉、<sup>なかね</sup> 仲根遺跡〈3〉があげられる。特に愛宕山古墳群には、国指定史跡である愛宕山古墳が存在している。愛宕山古墳は、石岡市の舟塚山古墳、常陸太田市の梵天山古墳に次ぐ県内 3 番目の規模で、全長 136.5m の大形前方後円墳であり、那珂国造の墓と目されている。また、台渡里遺跡では一辺 75m と推定される方形の堀がめぐる豪族居館跡が発見されており<sup>5)</sup>、那珂川の堆積土による肥沃な土地での水田経営を行っていたものと思われる。さらに、当遺跡の北西約 2 km に 7 世紀第 3 ~ 4 四半期の登り窯が 2 基確認された<sup>やまだ</sup> 山田窯跡群〈41〉がある。須恵器のほかに瓦も出土しており、台渡里廃寺の創建を考える上で重要な遺跡である<sup>6)</sup>。

奈良・平安時代、本跡の当地域は那賀郡全隈郷に属している。周辺の主な遺跡としては、国指定史跡の<sup>だいわたり</sup> 台渡

りはいじ 里廃寺 〈14〉 があげられる。長者山地区が那賀郡衙の正倉院に比定されており、觀音堂山地区では7世紀後半、南方地区では9世紀後半の時期の寺院跡が確認されている。また、周辺にはアラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡、台渡里遺跡、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などが確認されており、那珂郡衙及びその関連遺跡として捉えられている<sup>7)</sup>。

平安時代から中世にかけては、この地域は常陸大掾氏や那珂氏、佐竹氏の抗争の舞台となった。そのため、各氏の一族や臣下の城館が各所に造られた。当遺跡の北約2kmにある大部平太郎屋敷跡 〈46〉 は、真佛寺の開祖で水戸城主佐竹季賢に仕えていた北条平太郎維芳の館跡といわれており<sup>8)</sup>、二重堀や土塁が確認されている。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。なお、本章は、財団報告第329集を基にし、若干加筆したものである。

#### 註

- 1) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- 3) 郡司良一『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（昭和58年度版）』水戸市教育委員会 1984年3月
- 4) 註4) 文献に同じ
- 5) 茨城大学人文学部考古学研究室『水戸市台渡里遺跡（茨大運動場地点）発掘調査現地発表会資料』2008年9月
- 6) 井上義安『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版）』水戸市教育委員会 1999年3月
- 7) 佐々木藤雄他「台渡里廃寺－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）－」『水戸市埋蔵文化財報告書』第4集 水戸市教育委員会 2006年3月
- 8) 市制100年記念飯富実行委員会『市制百年記念 飯富郷土誌』 1989年3月

#### 参考文献

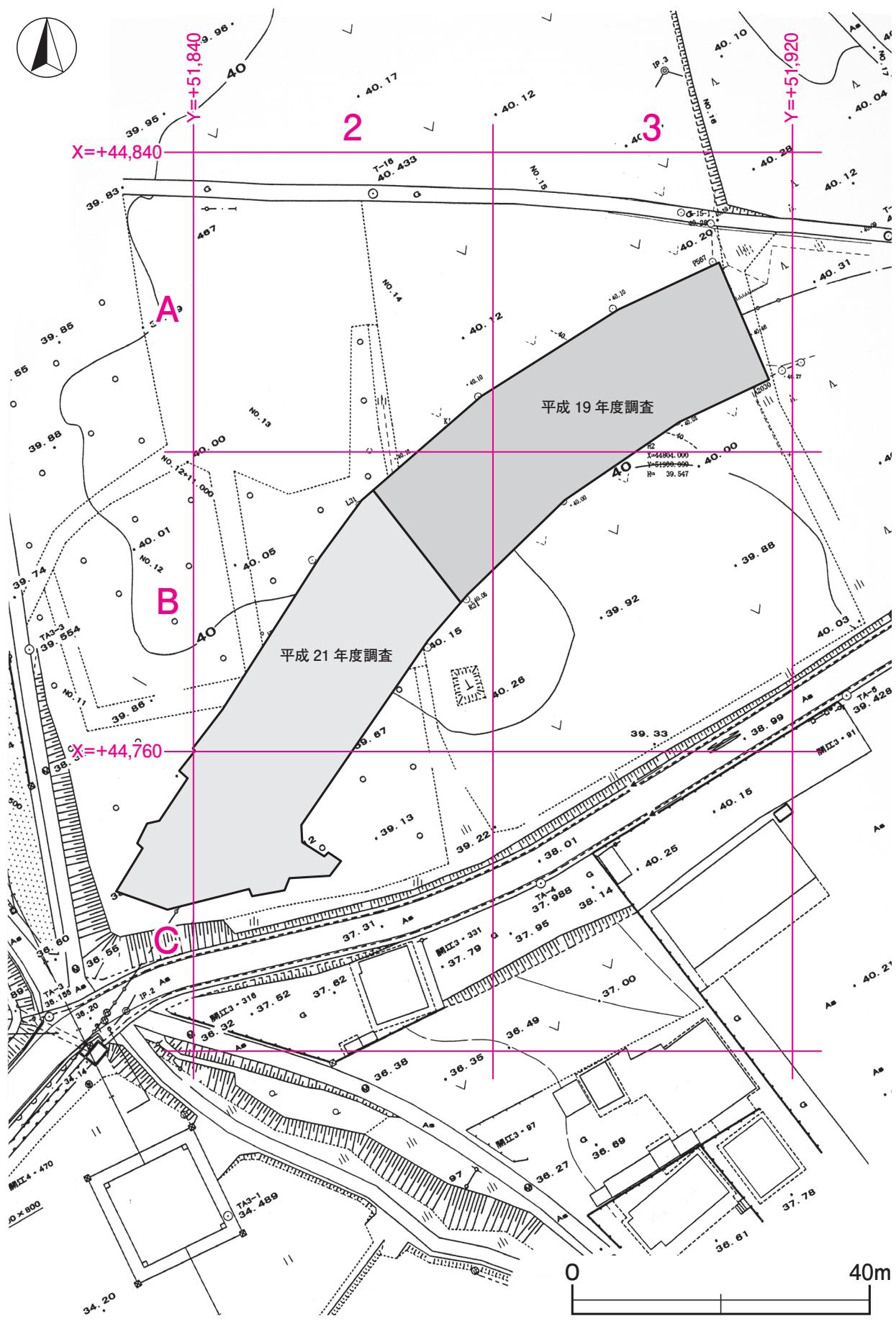
- 清水哲「水戸城跡 一般県道市毛水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第329集 2010年3月  
井上琢哉「加倉井忠光館跡 主要地方道水戸茂木線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第294集 2008年3月



第1図 堀町西古墳周辺遺跡分布図(国土地理院25,000分の1「水戸」「石塚」)

表1 堀町西古墳周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	堀町西古墳		○		○	○		25	下荒句古墳群				○		
2	山田A古墳群				○			26	向井原遺跡	○	○	○	○		
3	仲根遺跡		○	○	○	○		27	毛勝谷原遺跡			○	○		
4	古志巻遺跡		○					28	寺山遺跡		○		○		
5	大井古墳群				○			29	峯山古墳				○		
6	馬場尻遺跡	○	○	○	○			30	金剛寺跡		○		○		
7	安戸星古墳群			○	○			31	開江宿遺跡				○		
8	安戸星遺跡			○	○			32	一本松遺跡		○		○		
9	西原遺跡			○		○		33	大久保遺跡				○		
10	西原古墳群				○			34	大久保古墳群				○		
11	アラヤ遺跡		○		○			35	全隈権現台遺跡		○				
12	長者山遺跡		○	○	○	○		36	山田遺跡		○	○	○		
13	台渡里遺跡		○		○	○	○	37	椎農遺跡		○	○	○		
14	台渡里廃寺				○			38	三ツ児塚古墳群				○		
15	堀遺跡			○	○	○		39	後山田遺跡		○		○		
16	宮西遺跡		○		○			40	山田古墳群				○		
17	巡見遺跡		○		○			41	山田窯跡群				○		
18	北原遺跡		○		○	○		42	高根遺跡				○		
19	池上遺跡				○			43	田野台遺跡		○	○	○		
20	釜久保遺跡			○	○	○		44	前山田遺跡		○		○		
21	清水遺跡	○	○	○	○			45	田野仲根遺跡		○	○	○		
22	北原古墳群				○			46	大部平太郎屋敷跡						○
23	稻荷塚古墳群				○			47	小田倉遺跡		○		○		
24	下荒句遺跡		○		○			48	飯富火葬墓跡				○		



第2図 堀町西古墳調査区設定図（遺跡測量図から作成）

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

堀町西古墳は、沢渡川が形成した谷津に面した標高約39mの台地縁辺部に立地している。調査面積は2,161m<sup>2</sup>で、調査前の現況は畠地である。

平成19年度・21年度の二回にわけて調査を実施した結果、縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることが確認できた。

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑1基、古墳時代の古墳3基、竪穴住居跡2軒、土坑1基、奈良時代の竪穴住居跡4軒、平安時代の土坑1基、その他、時期不明の円形周溝状遺構1基、道路跡1条、土坑29基、ピット群3か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に10箱出土している。主な出土遺物として、縄文土器(深鉢・鉢)、土師器(壺・椀・高台付壺・塚・鉢・壺・甕・甌・手捏)、須恵器(壺・高台付壺・蓋・長頸瓶・甕)、陶磁器(碗)、土製品(土玉・土器円盤・土器片錐)、石器(石鏃・敲石・磨製石斧・砥石・剥片)、金属製品(刀子・鉄斧・鐵鏃・錢貨)などである。

## 第2節 基本層序

調査区の中央部(B2b8区)にテストピットを設定し、地表面から深さ3mまで掘り下げて基本層序の確認を行った(第3図)。土層は12層に分層でき、観察結果は以下のとおりである。

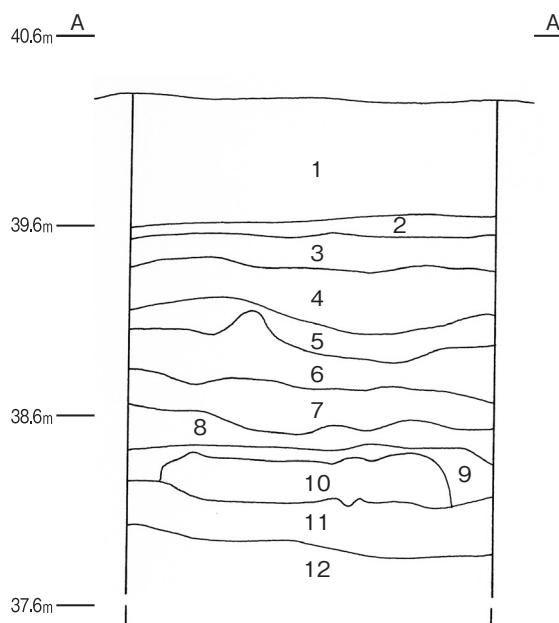
第1層は、黒褐色を呈する現耕作土である。ローム粒子・白色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに普通である。層厚は60~70cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層である。ローム粒子・黄白色粒子・赤色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに普通である。層厚は6~10cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層で、今市・七本桜軽石層の上部に相当すると考えられる。ロームブロックを中量、黄白色粒子・赤色粒子を微量に含み、粘性は強く、締まりは普通である。層厚は10~20cmである。

第4層は、褐色を呈するソフトローム層で、今市・七本桜軽石層の下部に相当すると考えられる。ロームブロックを中量、黄白色粒子を少量、赤色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は18~34cmである。

第5層は、褐色を呈するソフトローム層である。



第3図 基本土層図

ローム粒子を多量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は4～20cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。第Ⅱ黒色帯の上部に相当すると考えられる。ロームブロックを中量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は10～36cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。第Ⅱ黒色帯の下部に相当すると考えられる。ロームブロックを多量、黄白色ブロックを微量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は12～28cmである。

第8層は、褐色を呈するハードローム層である。ロームブロックを多量、黄白色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は6～23cmである。

第9層は、黄褐色を呈する鹿沼パミス層への漸移層である。ローム粒子・黄白色粒子を多量に含み、粘性は強く、締まりは普通である。層厚は2～32cmである。

第10層は、明黄褐色を呈する鹿沼パミス層である。黄白色粒子を多量、ローム粒子を微量に含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は10～28cmである。

第11層は、褐色を呈するハードローム層である。ロームブロックを多量、黄白色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は6～23cmである。

第12層は、褐色を呈するハードローム層である。ロームブロックを多量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は44cmまで確認したが、下層は未掘のため不明である。

なお、遺構は、第3層の上面で確認できた。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒と土坑1基である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

###### 第7号住居跡（第4～6図）

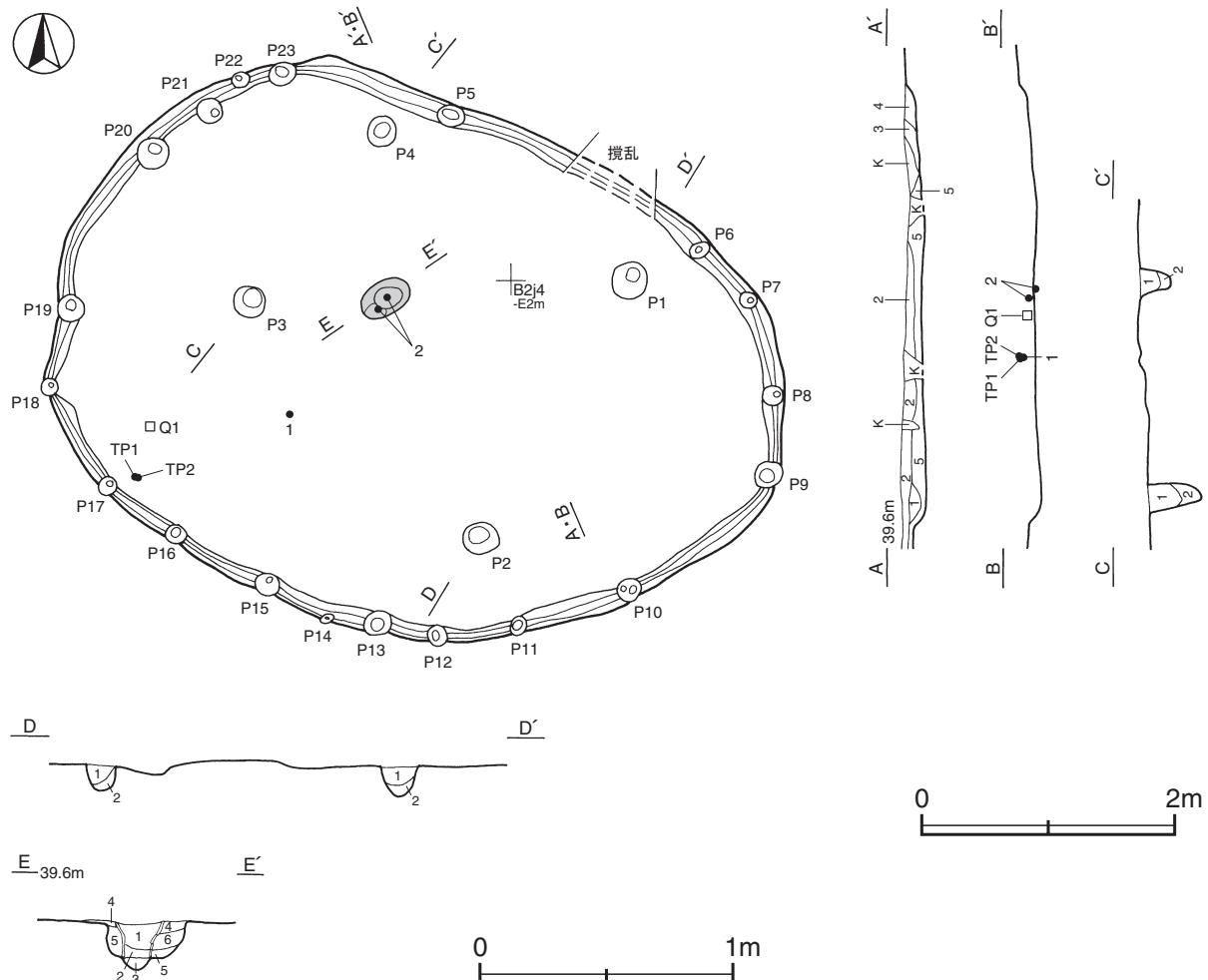
**位置** 調査区南東部のB2j4区、標高39.5mの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第1号墳に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径6.06m、短径4.26mの橢円形で、主軸方向はN-71°-Wである。壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、明確な硬化面は確認できない。壁下には壁溝が巡っている。

**炉** 中央部の北寄りに付設されている。径40cm、深さ17cmの椀状の掘方に、口縁の大半と胴部の下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。掘方及び埋設土器内の覆土には焼土ブロックが含まれているが、顯



第4図 第7号住居跡実測図

著な赤変硬化は認められない。埋設土器の南西部に焼土粒子の広がりを確認した。第4～6層は掘方への埋土である。

#### 炉土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	4 黒 褐 色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量	5 暗 褐 色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 褐 色 ローム粒子多量	6 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**ピット** 23か所。P1・P2・P4は深さ22～25cm、P3は深さ42cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5～P23は深さ23～62cmで、規模や配置から壁柱穴と考えられる。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒 褐 色 ロームブロック少量	2 褐 色 ロームブロック中量
-------------------	-----------------

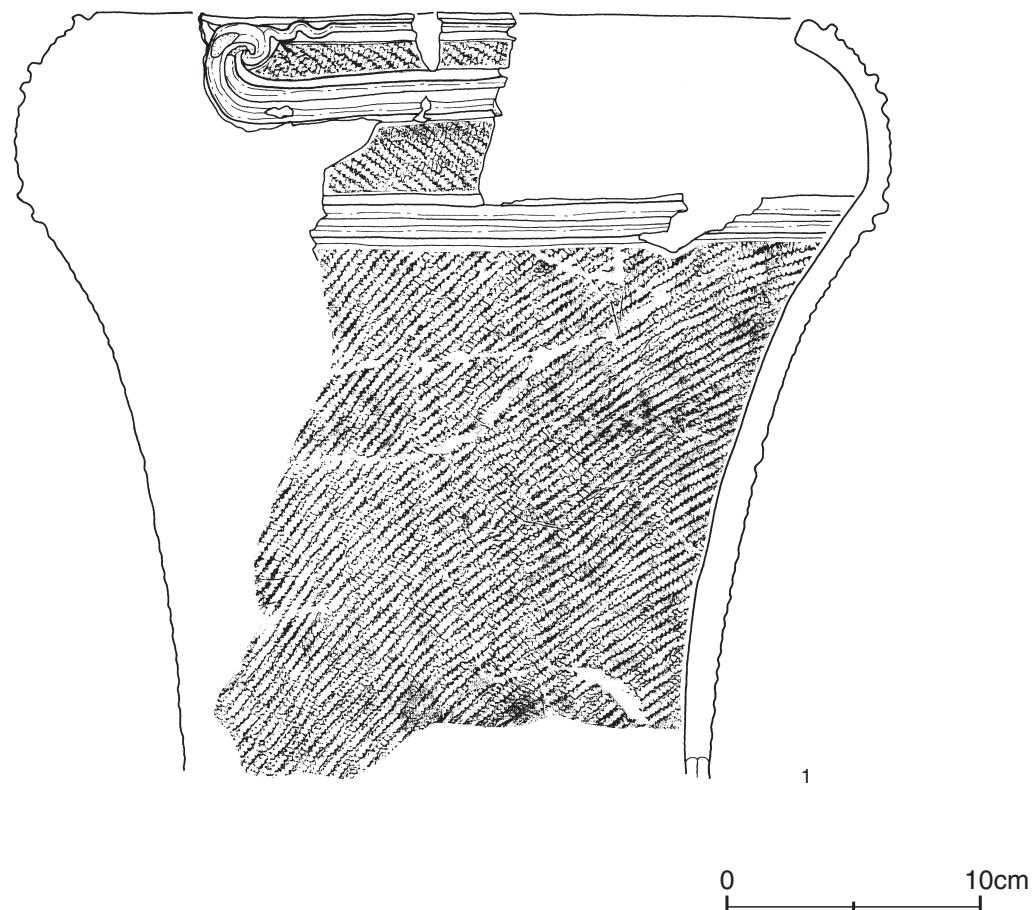
**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

#### 土層解説

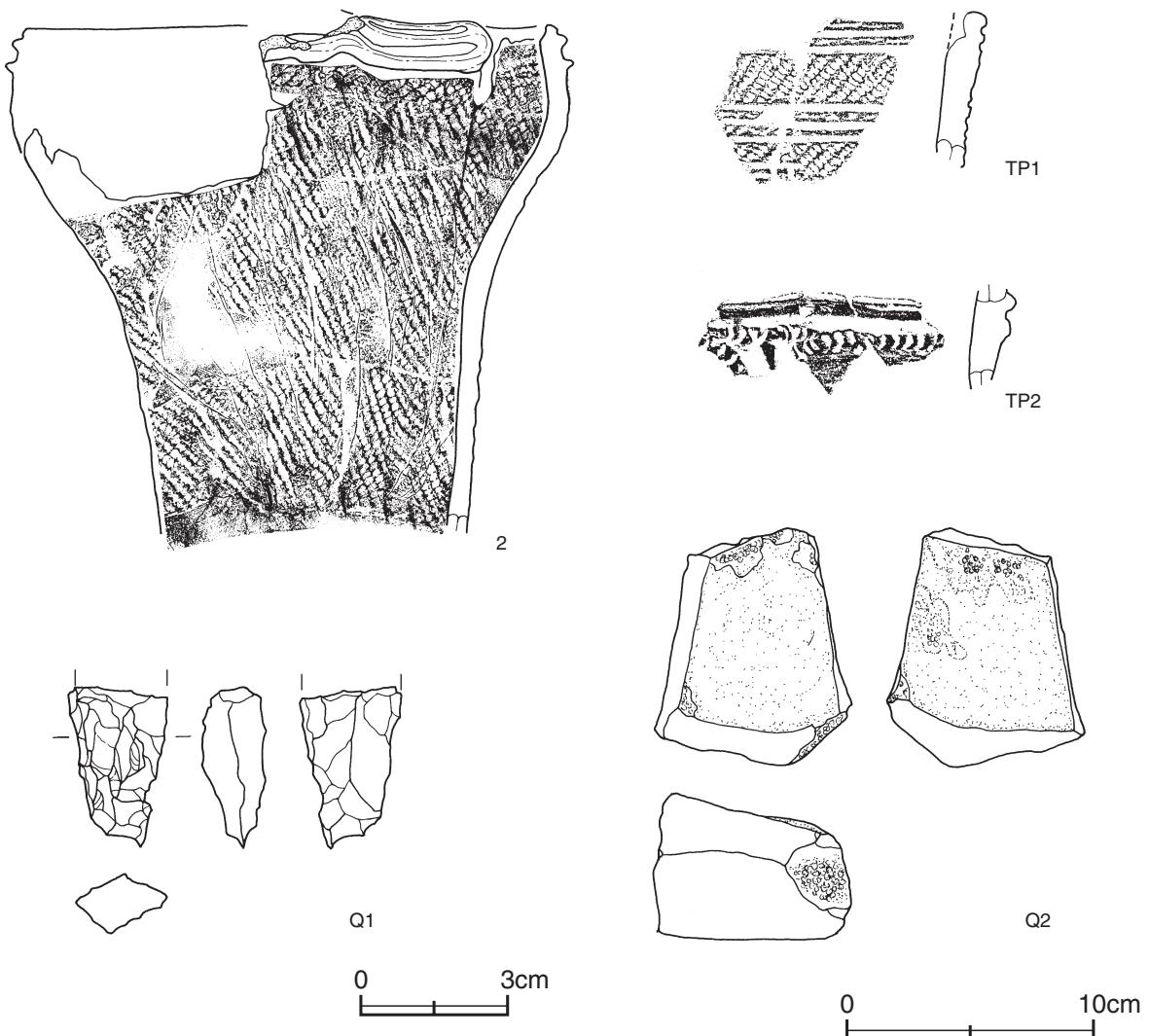
1 暗 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子・白色粒子微量	3 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・白色粒子微量
2 黒 褶 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・白色 粒子微量	4 暗 褶 色 ロームブロック中量、焼土粒子・白色粒子微量
	5 褶 色 ロームブロック多量、白色粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片31点（深鉢）、石器2点（敲石、尖頭器未製品）が出土している。2の深鉢は炉の埋設土器で、中央部の覆土中層から出土した破片と接合したものである。Q1は西部の覆土下層、1は中央部の覆土中層、TP1・TP2は西部の覆土上層、Q2は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利E I式期）に比定できる。



第5図 第7号住居跡出土遺物実測図（1）



第6図 第7号住居跡出土遺物実測図（2）

第7号住居跡出土遺物観察表（第5・6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[28.4]	(30.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部2条の隆帯で区画 内に隆帯の渦巻き文 胴部RLの単節縄文を縦位に施文	覆土中層	30% PL 7
2	縄文土器	深鉢	[21.5]	(21.0)	-	長石・石英	橙	普通	LRの単節縄文を縦位に施文	炉壁	40% PL 7

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	単節縄文 RL 地文に3条の平行沈線	覆土上層	PL 7
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	隆帶に爪形文	覆土上層	PL 7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	尖頭器未製品	(3.3)	2.0	1.3	(6.2)	石英	刃・茎部欠損	覆土下層	PL 7
Q 2	敲石	9.7	8.0	5.9	629.9	安山岩	敲打痕1か所 磨痕2か所	覆土中	PL 7

(2) 土坑

**第33号土坑（第7・8図）**

**位置** 調査区南部のC 2a5区、標高39.3mの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第1号墳に掘り込まれている。

**規模と形状** 開口部は長径1.28m、短径1.17mの円形である。底面はほぼ平坦で、長径1.62m、短径1.12mの橢円形である。深さは95cmで、壁は底面から大きく内傾し、くびれ部から外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの深さは66cmである。

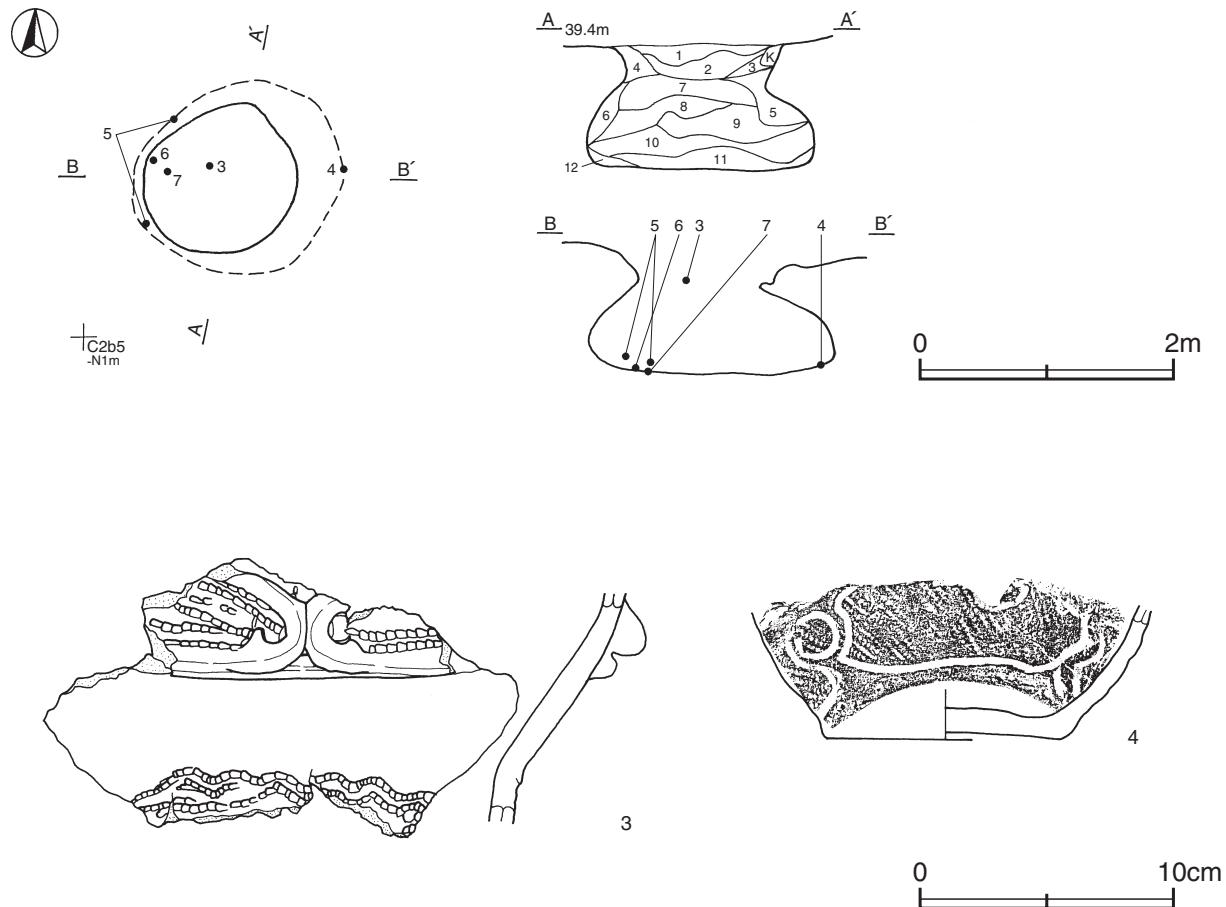
**覆土** 12層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	7 黒 褐 色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
2 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	8 黒 褐 色 ロームブロック多量、炭化物・焼土粒子微量
3 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	9 黒 色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
4 黒 褐 色 ロームブロック中量、白色粒子少量、焼土ブロック微量	10 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物微量
5 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	11 暗 褐 色 ロームブロック多量
6 黒 褐 色 ロームブロック中量、炭化物少量	12 褐 色 ローム粒子多量

**遺物出土状況** 繩文土器片78点（深鉢）、石器1点（剥片）が出土している。6・7は西部の底面、4は東部の覆土下層、3は中央部の覆土上層、TP 3・TP 4・Q 3は覆土中からそれぞれ出土している。5は北西部の覆土下層から横位で出土したものと、南西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡は、形状からフラスコ状土坑である。時期は、出土土器から中期中葉（阿玉台II式期）に比定できる。



**第7図 第33号土坑・出土遺物実測図**



第8図 第33号土坑出土遺物実測図

第33号土坑出土遺物観察表（第7・8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
3	縄文土器	深鉢	-	(9.2)	-	長石・石英・雲母 にぶい赤褐	普通	隆帶による楕円形区画文 2列の角押文	覆土上層	5%	
4	縄文土器	鉢	-	(5.3)	9.4	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通 LR 単節縄文の地文に有節沈線による渦巻き文 ベンガラ付着	覆土下層	10%	
5	縄文土器	深鉢	23.2	30.7	9.4	長石・石英	にぶい橙	普通 口縁部と頸部にLR単節縄文の地文に1条の沈線と 2列の角押文 脇部は隆帶を懸垂させて縦位に4分 割 上下対称の2条の沈線で連結	覆土下層	80% PL 7	
6	縄文土器	深鉢	-	(13.0)	8.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通 RL 単節縄文を縦位に施文	底面	70% PL 7	
7	縄文土器	深鉢	-	(10.2)	9.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通 脇部に2単位の隆帶 2条の沈線	底面	20%	

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	半截竹管による角押文	覆土中	PL 7
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	指頭による押圧された隆帯を懸垂 地文に LR の単節縄文	覆土中	PL 7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	剥片	2.4	1.5	0.6	1.4	瑪瑙	未研磨 板状	覆土中	PL 7

## 2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、古墳3基、竪穴住居跡2軒、土坑1基である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

### (1) 古墳

#### 第1号墳（第9・10図）

**位置** 調査区南東部のC 2a4区を中心に確認され、標高39.5mの台地縁辺部に位置している。

**確認状況** 調査前は平坦な畠地である。これまでに周知されていない古墳で、主体部、墳丘ともに削平されており、周溝のみ確認できた。

**重複関係** 第7号住居跡を掘り込み、第23号土坑、第1号ピット群のP 19・20に掘り込まれている。

**規模と形状** 内径が約16m、周溝外縁径が約21mで、ほぼ正円の古墳である。

**墳丘** 現況でローム漸移層まで削平されており、盛土の構築状況は不明である。

**周溝** 円形で、上幅2.1～2.8m、下幅0.6～1.4m、深さ0.5～0.6mである。緩やかなU字状の断面形である。

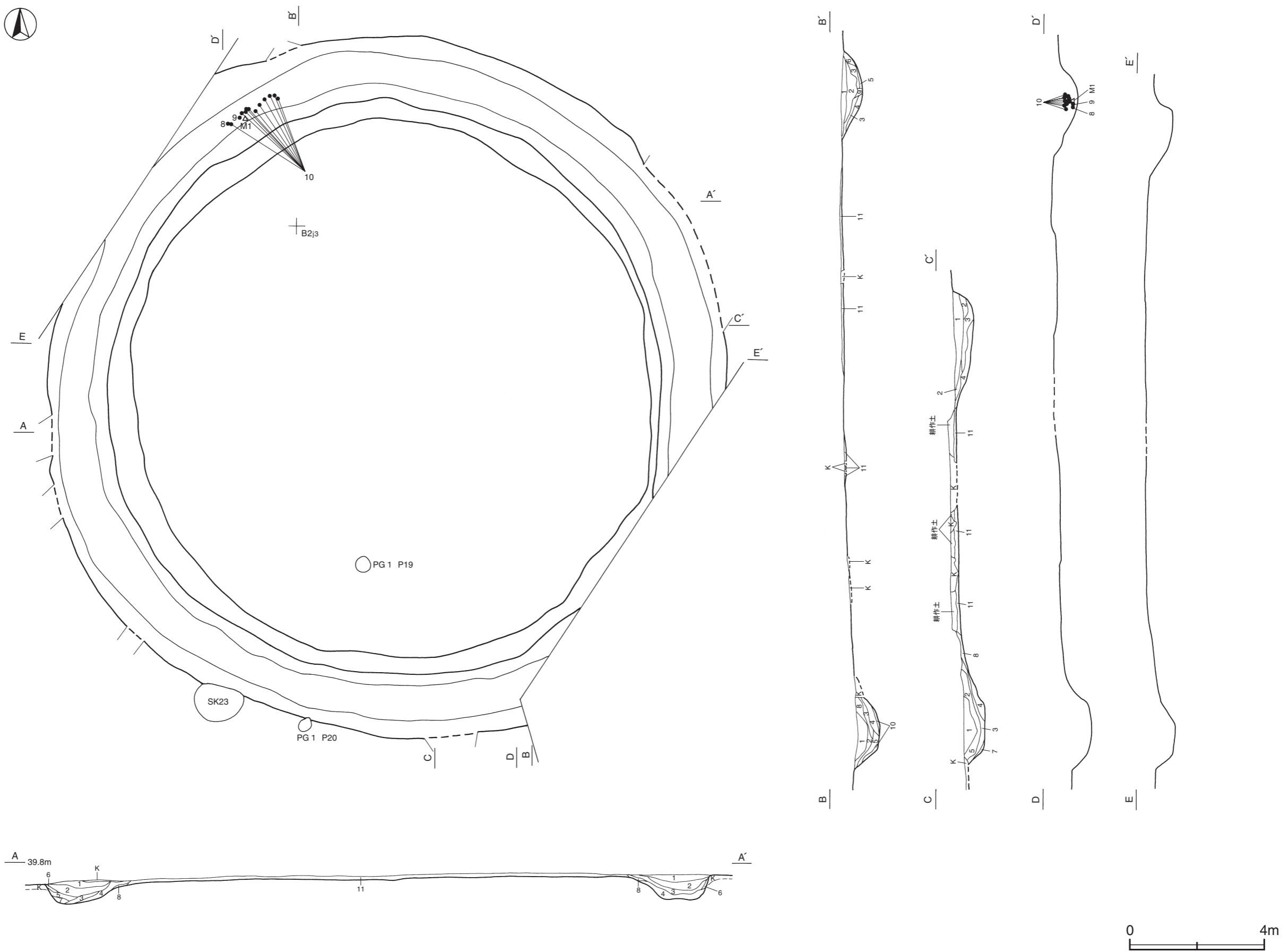
周溝内の堆積土は、ロームブロック及びローム粒子を含む黒褐色土で、自然堆積の様相を示している。

#### 周溝土層解説

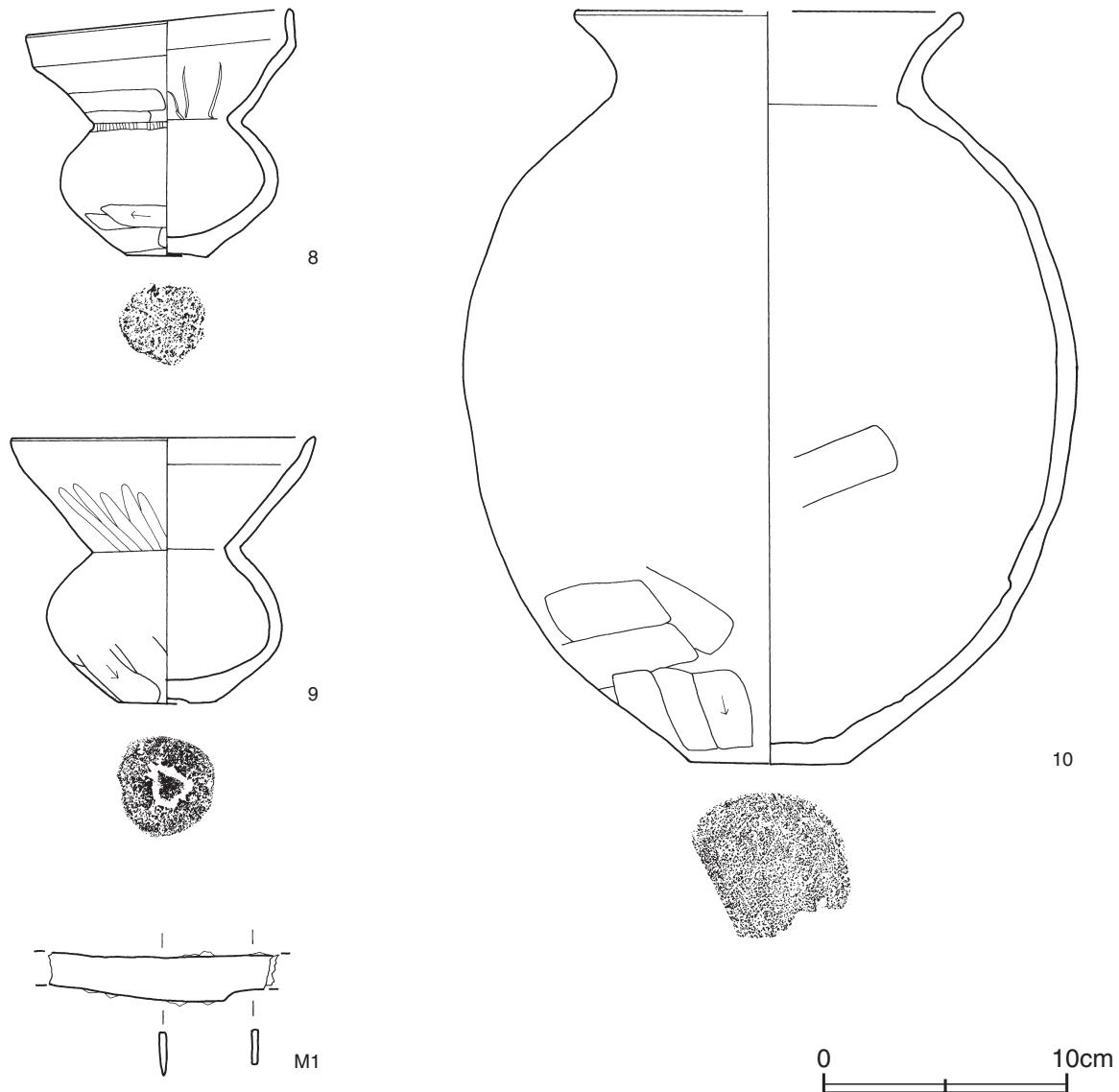
1 黒 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 褐 色 ローム粒子多量
2 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量	8 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 褐 色 ロームブロック多量	9 黒 褐 色 ロームブロック中量
4 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量	10 褐 色 ロームブロック多量
5 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	11 褐 色 ローム粒子中量
6 暗 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	

**遺物出土状況** 周溝から、土師器片224点（壺12、高台付壺1、埴2、椀1、甕類208）、須恵器片2点（壺）、土製品1点（支脚）、鉄製品1点（刀子）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片57点、石器1点（石鏃）も出土している。8・9・M1は、北部の覆土下層から出土している。10は北部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。8・9は、須恵器壺の模倣品と思われる。

**所見** 本墳の築造時期は、出土土器から中期中葉（5世紀第2四半期）に比定できる。出土遺物や規模などから、第3号墳に近い時期に構築されたものと考えられる。



第9図 第1号墳実測図



第10図 第1号墳出土遺物実測図

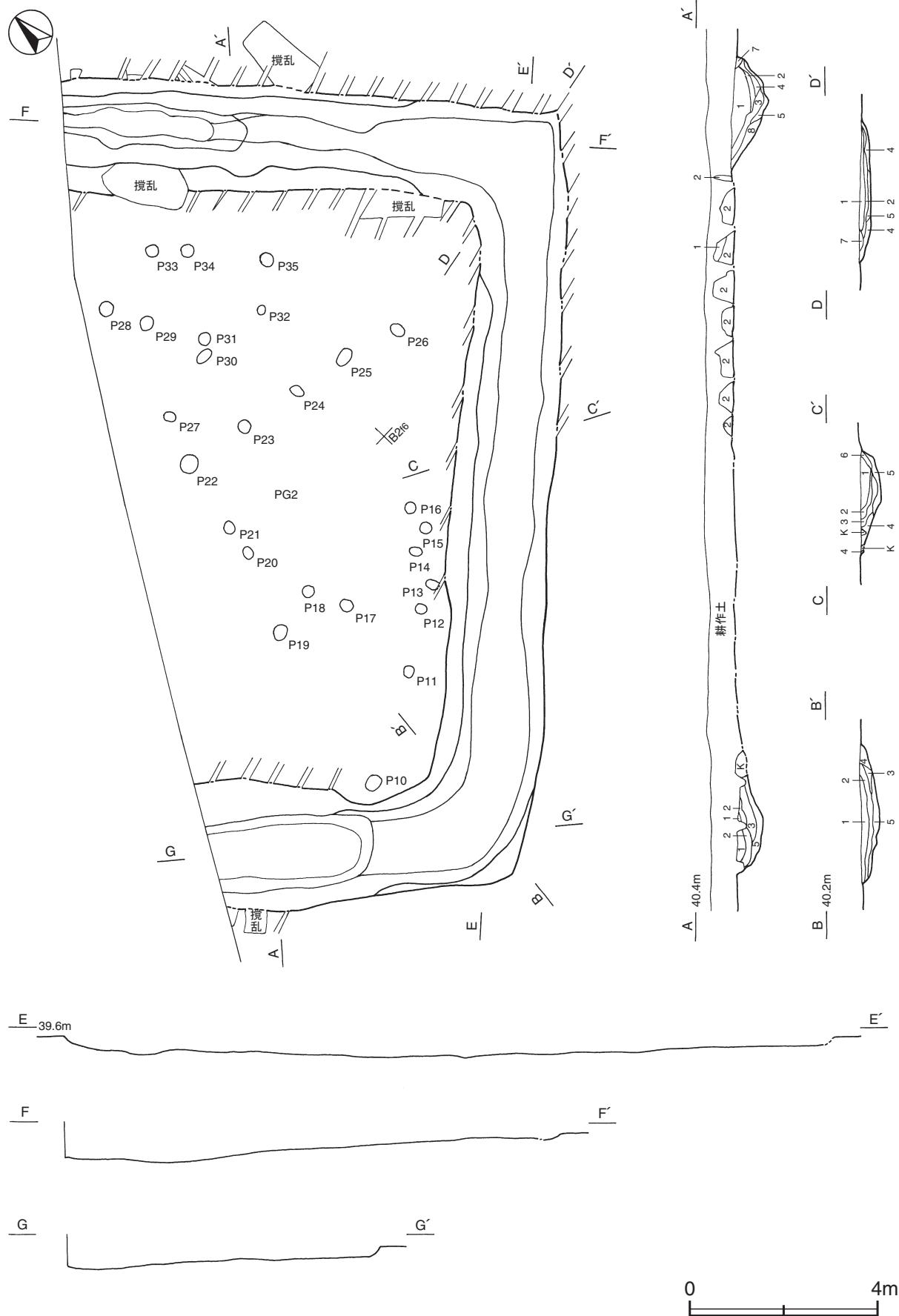
第1号墳出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	土師器	埴	10.9	10.2	3.3	長石・石英・中疊	橙	普通	体部外面上半ハケ目調整後横ナデ 下半ヘラ削り	周溝覆土下層	100% PL 9
9	土師器	埴	12.5	11.0	4.0	長石・石英・中疊	橙	普通	頸部ヘラ磨き 体部上半横ナデ 下半ヘラ削り	周溝覆土下層	85% PL 9
10	土師器	甕	〔15.8〕	31.0	〔6.8〕	長石・石英・赤色粒子・細繖	にぶい赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	周溝覆土中層	40%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M1	刀子	(9.6)	2.1	0.3	(15.1)	鉄	刃部・茎部一部欠損	刃部断面三角形	茎部断面長方形	刃関	周溝覆土下層 PL 9

第2号墳（第11図）

位置 調査区中央部のB 2 e5 区を中心に確認され、標高 39.5 m の台地縁辺部に位置している。

確認状況 調査前は平坦な畠地である。これまでに周知されていない古墳で、主体部、墳丘ともに削平されており、周溝のみ確認できた。



第11図 第2号墳実測図

**重複関係** 第2号ピット群のP 10～35に掘り込まれている。

**規模と形状** 周溝の北部が調査区域外に延びているため規模は明確ではないが、周溝の形状から方墳と推定される。確認できた範囲は、内縁が一辺6.3m、周溝外縁が一辺8.3mである。

**墳丘** 現況でローム漸移層まで削平されており、盛土の構築状況は不明である。

**周溝** 方形で、上幅2.0～2.8m、下幅0.4～1.3m、深さ0.4～0.7mである。東・西側は上幅が広く、V字状の断面形を呈している。南側は緩やかなU字状の断面形状を示しており、周溝底部の高低差が20cmほどみられるなど、掘り込みに違いがみられる。周溝内の堆積土はロームブロック及びローム粒子を含む黒褐色で、自然堆積の様相を示している。

#### 周溝土層解説

1 黒 色 ローム粒子微量	5 褐 色 ローム粒子多量
2 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量	6 黒 褐 色 ロームブロック・白色粒子少量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量	7 黒 褐 色 ロームブロック中量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量、白色粒子微量	8 黒 褶 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 周溝から、土師器片5点（壙1、甕類4）、須恵器片1点（甕類）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片14点（深鉢）、瓦質土器片1点も出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

**所見** 出土遺物が少なく明確な時期を割り出せないが、第1・3号墳と等間隔に位置しており、計画的に築造されたと考えられることから、5世紀代に大別できる。

### 第3号墳（第12・13図）

**位置** 調査区中央部のB 2g7区を中心に確認され、標高39.5mの台地縁辺部に位置している。

**確認状況** 調査前は畠地である。墳丘の残存部が調査区域から南東約6mの調査区域外に確認できた。墳丘は大部分が削平されており、墳丘と周溝の一部が確認できた。

**重複関係** 第24・29～31号土坑、第2号ピット群のP 59、第3号ピット群のP 10～12に掘り込まれている。

**規模と形状** 周溝の東部から南部が調査区域外に延びているため規模は明確ではないが、周溝の形状から円墳と推定される。確認できた範囲から、内径14.4m、周溝外縁径23.2mと推定される。

**墳丘** 表土の下に旧表土を確認したが、盛土の痕跡は確認できなかった。

**周溝** 円形で、上幅3.8～4.4m、下幅1.1～1.7m、深さ0.8～1.4mである。緩やかなU字状の断面形である。

周溝内の堆積土はローム粒子と焼土粒子を含む黒褐色土で、自然堆積の様相を示している。

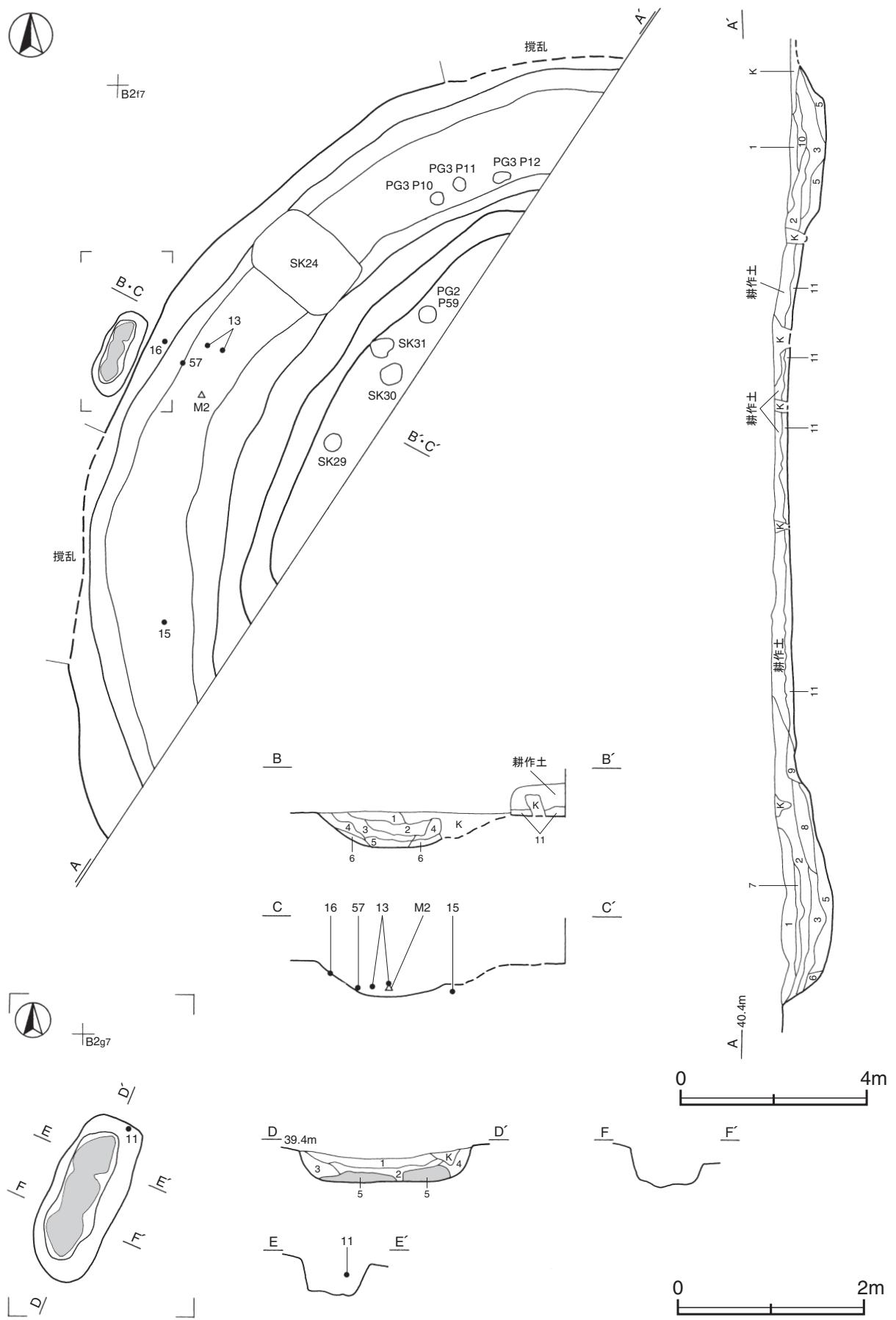
#### 周溝土層解説

1 黒 色 ローム粒子少量	7 黒 色 ローム粒子少量、白色粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量	8 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 黒 色 ローム粒子・焼土粒子微量	9 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子・白色粒子微量
4 黒 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	10 黒 褐 色 ローム粒子中量、白色粒子微量
5 暗 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	11 暗 褶 色 ローム粒子・炭化粒子微量
6 褐 色 ロームブロック中量、白色粒子微量	

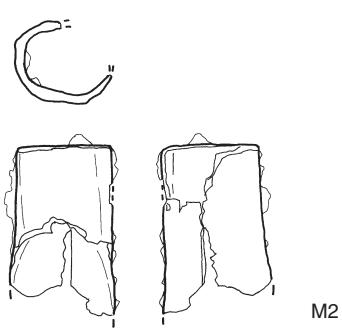
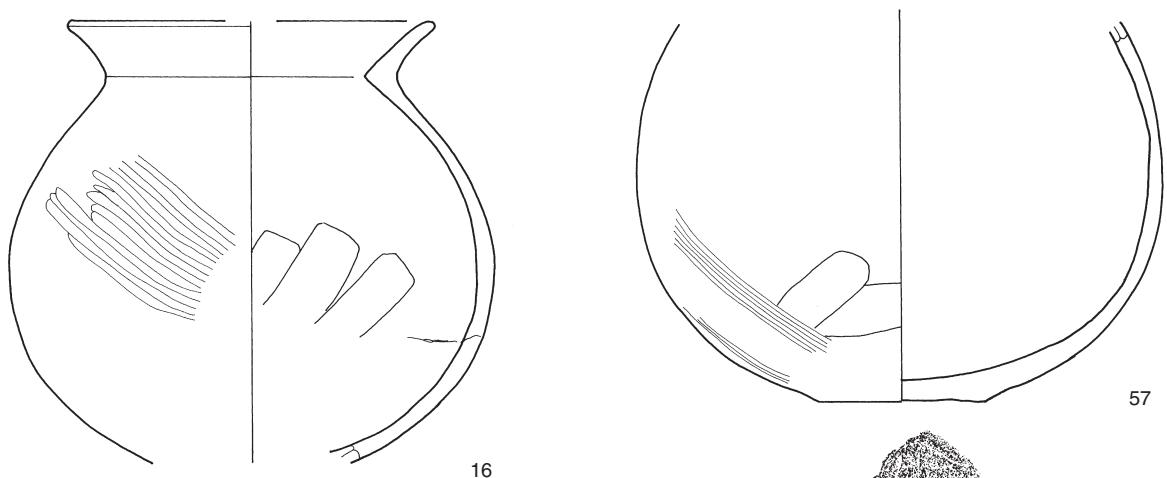
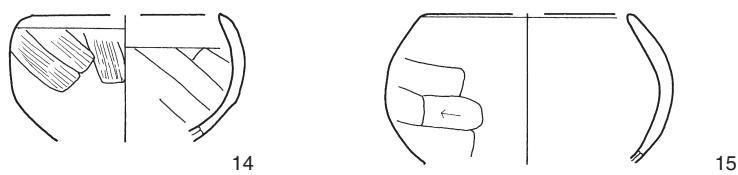
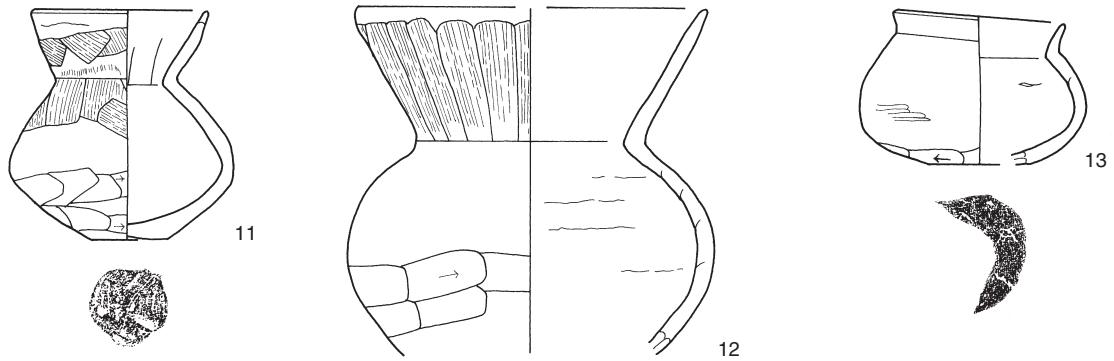
**周溝外埋葬施設** 周溝の北西約1mの位置に隣接している。長径1.87m、短径0.77mの橢円形で、長径方向はN-24°-Eである。深さは15～19cmで、底面は凹凸している。底面には、白色粘土が長軸1.44m、短軸0.23mの範囲で不整形に残存していた。覆土は5層に分層でき、各層にロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。副葬品と考えられる土師器1点（壙）が北東部の覆土下層から出土している。本墳筑造後、まもなく造られた追葬施設と考えられる。

#### 周溝外埋葬施設土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	4 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 褐 色 ロームブロック微量	5 褐 色 粘土ブロック中量
3 褐 色 炭化粒子少量、ローム粒子微量	



第12図 第3号墳実測図



第13図 第3号墳出土遺物実測図

**遺物出土状況** 周溝から、土師器片47点（壺2, 埋15, 壺3, 瓢類27）、須恵器片7点（壺2, 瓢類5）、鉄製品1点（鉄斧）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片19点（深鉢）も出土している。15・M2は覆土下層、12・14は覆土中からそれぞれ出土している。13・16は覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

**所見** 本墳の築造時期は、出土土器から中期中葉（5世紀第2四半期）と考えられる。

第3号墳出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師器	壺	6.9	9.1	2.9	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後ナデ 内面ヘラナデ 体部外面上半ハケ目調整下半ヘラ削り	覆土下層	100% PL 9
12	土師器	壺	[13.8]	(13.7)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面上半ハケ目調整後ナデ、下半ヘラ削り 頸部ハケ目調整 輪積痕	周溝覆土中	40% PL 9
13	土師器	壺	6.8	6.2	[4.0]	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面上半ヘラ磨き 下端ヘラ削り	周溝覆土中層	50% PL 8
14	土師器	壺	[7.5]	(5.0)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外側ハケ目調整 内面ヘラナデ	周溝覆土中	30%
15	土師器	壺	[8.0]	(5.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄澄	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナデ	周溝覆土下層	10%
16	土師器	甕	[14.3]	(17.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外側ヘラ削り後磨き 内面ヘラナデ 輪積痕	周溝覆土中層	20%
57	土師器	甕	—	(15.0)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外側ヘラ削り後磨き	周溝覆土中層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	鉄斧	(7.2)	4.5	0.2~0.5	(57.8)	鉄	刃部欠損 袋部一部欠損	周溝覆土下層	PL 9

表2 古墳一覧表

番号	位置	墳形	墳丘		周溝規模(m)			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考 重複関係(古→新)	
			主軸方向	全長(径)	高さ	最大上幅	最大下幅					
1	C 2 a4	円墳	—	21	—	28	1.4	0.5~0.6	土師器、須恵器、刀子	中期中葉	SI 7→本跡→SK23, PG 1	
2	B 2 e5	[方墳]	N - 48° - E	1.76 × (10.8)	—	28	1.3	0.4~0.7	土師器、須恵器	5世紀代	本跡→ PG 2	
3	B 2 g7	[円墳]	—	—	—	4.4	1.7	0.8~1.4	周溝外堀	土師器、須恵器、鉄斧	中期中葉	本跡→ SK24.29 ~ 31, PG 2・3

## (2) 壺穴住居跡

### 第5号住居跡（第14図）

**位置** 調査区南部のC 2 e3区、標高38.6mの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第1号ピット群P 14・15に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部が調査区域外に延びているため、東西軸は3.46mで、南北軸は2.30mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向はN - 10° - Wである。壁高は13~31cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められているが、南半部の範囲は不明である。東・西壁下の一部には、壁溝が確認できた。長さ45cmほどの炭化材や焼土塊が床面に点在し、中央部の床面の一部が赤変している。

**竈** 北壁中央部よりやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで139cmで、燃焼部幅は39cmである。袖部は床面上にロームブロック、砂質粘土粒子を含んだ第13層を基部とし、砂質粘土粒子を多量に含んだ第12層を積み上げて構築されている。火床部は床面を8cmほど皿状に掘り込み、ロームブロック、焼土ブロックを含んだ第14・15層を埋土して構築されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がり、奥壁ではほぼ直立している。

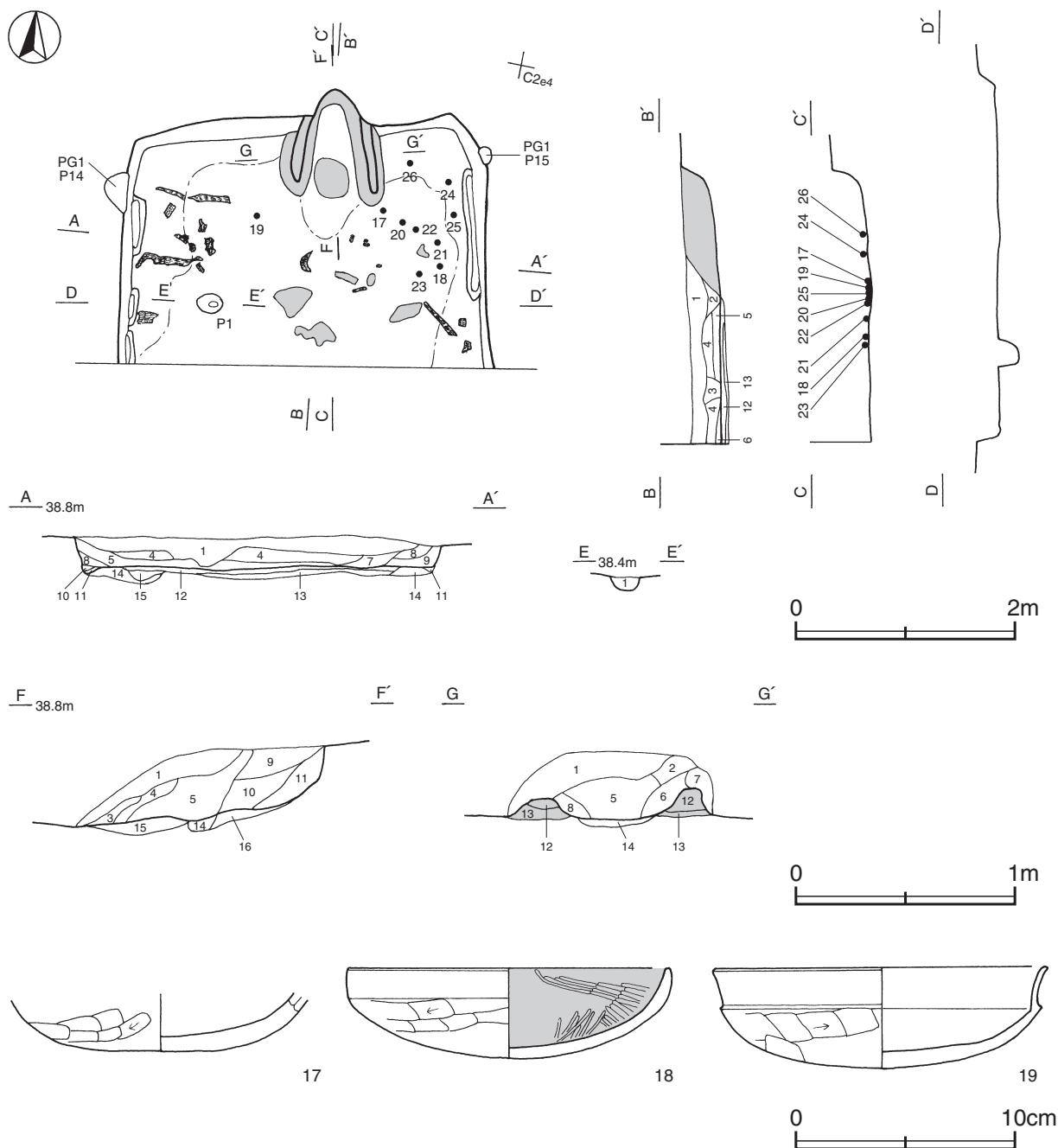
### 竪土層解説

- |          |                             |           |                                  |
|----------|-----------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 にぶい褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子・砂質粘土粒子少量    | 9 にぶい褐色   | ロームブロック・砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 砂質粘土粒子微量 | 10 褐色     | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量         |
| 3 暗褐色    | ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 烧土粒子微量    | 11 にぶい橙色  | ロームブロック中量, 砂質粘土粒子微量              |
| 4 灰褐色    | ローム粒子・焼土粒子少量, 砂質粘土粒子微量      | 12 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子多量                         |
| 5 赤褐色    | 焼土ブロック中量, 砂質粘土粒子少量          | 13 暗褐色    | ロームブロック・砂質粘土粒子少量                 |
| 6 暗褐色    | ロームブロック・砂質粘土ブロック中量          | 14 暗赤褐色   | 焼土ブロック中量, ローム粒子少量                |
| 7 にぶい褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量                | 15 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック中量              |
| 8 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量      | 16 黒褐色    | ロームブロック中量                        |

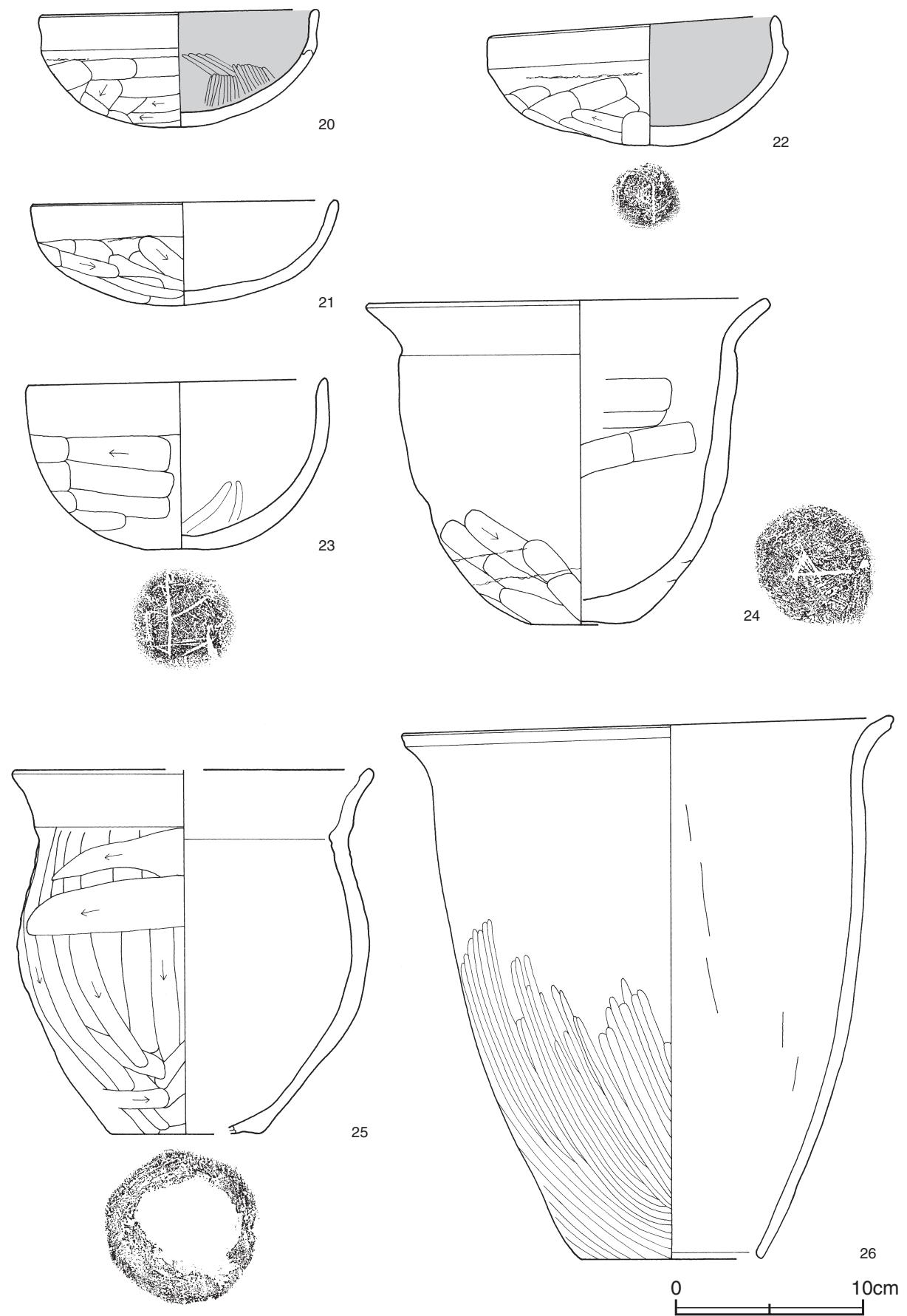
**ピット** P 1 は深さ 14cm で、規模や配置から主柱穴とは考えにくく、性格不明である。

### ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量



第 14 図 第 5 号住居跡・出土遺物実測図



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図

**覆土** 11層に分層できる。ロームブロックを多量に含んでいることから埋め戻されている。第12～15層は貼床の構築土である。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	7 黒褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	9 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、砂質粘土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、砂質粘土粒子微量	11 褐色	ローム粒子多量（しまり普通）
6 黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量	12 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量
		13 褐色	ロームブロック多量（しまり普通）
		14 褐色	ローム粒子多量（しまり強い）
		15 褐色	ロームブロック多量（しまり強い）

**遺物出土状況** 土師器片80点（坏12、鉢1、甕66、瓶1）、須恵器片2点（坏）が北東部を中心に出土している。また、混入した鉄製品1点（錢貨）も出土している。17・20～22・24～26は北東部、18・23は東部、19は竈前面の床面からそれぞれ出土している。17は、須恵器模倣坏の口縁部を破碎して、体部中位を削って皿に転用したと考えられる。また25は、底部から体部上位まで縦位の粗いヘラ削りを行った後に、体部上位に横位のヘラ削りを行っている。底部は焼成後に穿孔されている。

**所見** 時期は、出土土器から7世紀前葉に比定できる。床面が焼けており、炭化材や焼土塊が点在すること、遺物の遺存状況などから、焼失住居と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表（第14・15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
17	土師器	坏	—	(2.7)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ 皿に転用カ	床面	75% PL 8
18	土師器	坏	14.6	4.1	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	床面	90% PL 8
19	土師器	坏	15.2	4.7	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	90% PL 8
20	土師器	坏	14.7	6.2	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き 輪積痕	床面	95% PL 8
21	土師器	坏	16.3	5.5	—	長石・石英	灰褐色	普通	体部外面ヘラ削り 輪積痕	床面	95% PL 8
22	土師器	坏	15.4	7.0	2.8	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 輪積痕 底部木葉痕	床面	95% PL 8
23	土師器	鉢	15.9	9.0	4.1	長石・石英・細繖	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	床面	95% PL 8
24	土師器	甕	21.1	17.4	5.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕 底部木葉痕	床面	95% PL 9
25	土師器	甕	[19.1]	19.4	8.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面縦位のヘラ削り後横位のヘラ削り 内面ヘラナデ 底部内側からの穿孔	床面	80% PL 9
26	土師器	甕	26.2	29.1	9.7	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	90% PL 8

第6号住居跡（第16・17図）

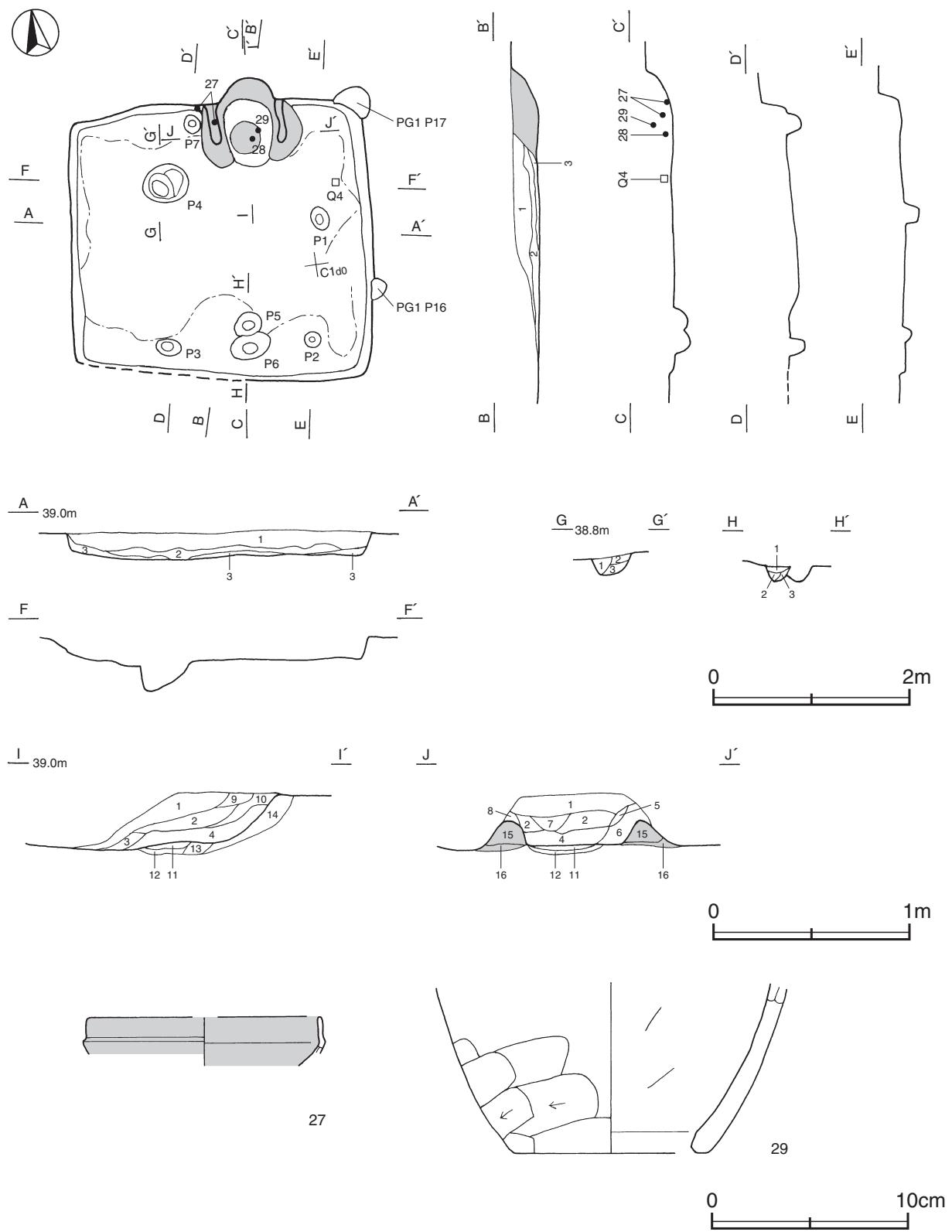
**位置** 調査区南西部のC1c9区、標高38.8mの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第1号ピット群P16・17に掘り込まれている。

**規模と形状** 南壁の西寄り部が削平されているため、壁の立ち上がりを確認することができなかった。長軸3.10m、短軸2.92mの長方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は8～28cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。

**竈** 北壁中央部よりやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで93cmで、燃焼部幅は45cmである。袖部は床面にロームブロックを含んだ第16層を基部とし、砂質粘土ブロックを多量に含んだ第15層を積み上げて構築されている。火床部は床面を5cmほど皿状に掘り込み、ロームブロック、焼土ブロックを含んだ第11・12層を埋めて構築しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に24cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。



第16図 第6号住居跡・出土遺物実測図

#### 竪土層解説

- |          |                               |           |                          |
|----------|-------------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 にぶい褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子・砂質粘土粒子少量      | 8 暗褐色     | ローム粒子少量, 砂質粘土粒子微量        |
| 2 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 9 にぶい褐色   | 焼土ブロック中量, ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色   | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量   | 10 暗褐色    | ロームブロック・砂質粘土ブロック中量       |
| 4 暗赤褐色   | 焼土ブロック少量                      | 11 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子少量          |
| 5 にぶい褐色  | ロームブロック・砂質粘土粒子少量              | 12 褐色     | ローム粒子中量                  |
| 6 褐色     | ローム粒子少量, 砂質粘土粒子微量             | 13 褐色     | ロームブロック中量, 烧土粒子少量        |
| 7 暗褐色    | ロームブロック中量, 烧土粒子・砂質粘土粒子少量      | 14 褐色     | ローム粒子多量, 烧土粒子微量          |
|          |                               | 15 にぶい黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量, ローム粒子中量      |
|          |                               | 16 褐色     | ロームブロック多量                |

**ピット** 7か所。P 1～P 4は深さ10～28cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5・6は深さ17cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 7は深さ17cmで、竪左袖脇に位置しており、性格不明である。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

- |       |           |      |           |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 |      |           |

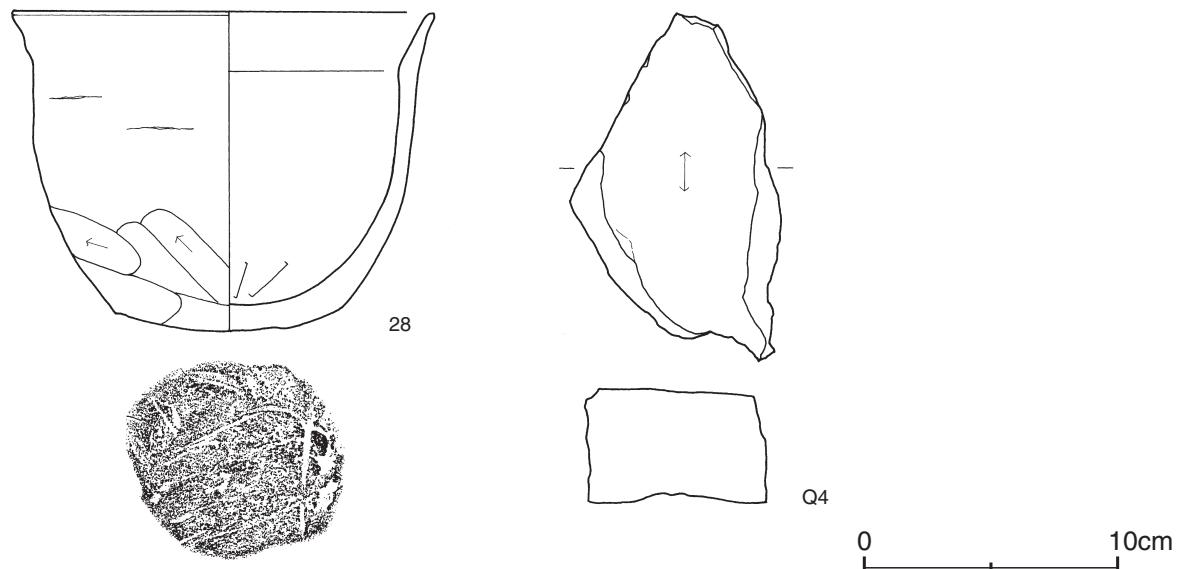
**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを多量に含んでいることから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |                            |      |           |
|-------|----------------------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子・白色粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子微量      |      |           |

**遺物出土状況** 土師器片21点（坏6, 齐13, 瓢2）、石器1点（砥石）が出土している。28は竪の覆土下層から斜位で出土している。Q 4は北東部の覆土下層、29は竪の覆土上層からそれぞれ出土している。27は竪の左袖部内の覆土下層と北部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後の早い段階で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から7世紀前葉に比定できる。



第17図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第16・17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
27	土師器	坏	[11.8]	(2.5)	-	石英・赤色粒子・白色粒子	灰褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	竪覆土下層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
28	土師器	甕	[16.6]	12.6	8.9	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕	竈覆土下層	70% PG 9	
29	土師器	甕	-	(10.7)	[10.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土上層	5%	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴				出土位置	備考
Q 4	砥石	13.8	8.4	4.5	653.3	安山岩	砥面1か所				覆土下層	

表3 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈				
5	C 2e3	[長方形]	N - 10° - W	3.46 × (2.30)	13~31	平坦	一部	-	-	1	竈1	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀前葉 本跡→PG 1
6	C 1c9	長方形	N - 6° - E	3.10 × 2.92	8~28	平坦	-	4	2	1	竈1	-	人為	土師器, 砥石	7世紀前葉 本跡→PG 1

### (3) 土坑

#### 第13号土坑(第18図)

**位置** 調査区南西部のC 1e9 区、標高 38.4 m の台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 南部が搅乱を受けているが、長径 0.56 m、短径 0.45 m の楕円形と考えられる。長径方向はN - 5° - Eである。深さは 26cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

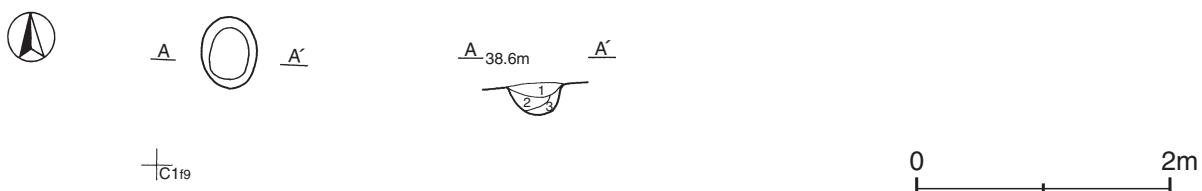
##### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック中量

3 褐色 ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片2点(甕)が出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土土器が少ないとから明確な時期を割り出せないが、古墳時代後期に大別できる。



第18図 第13号土坑実測図

### 3 奈良時代の遺構と遺物

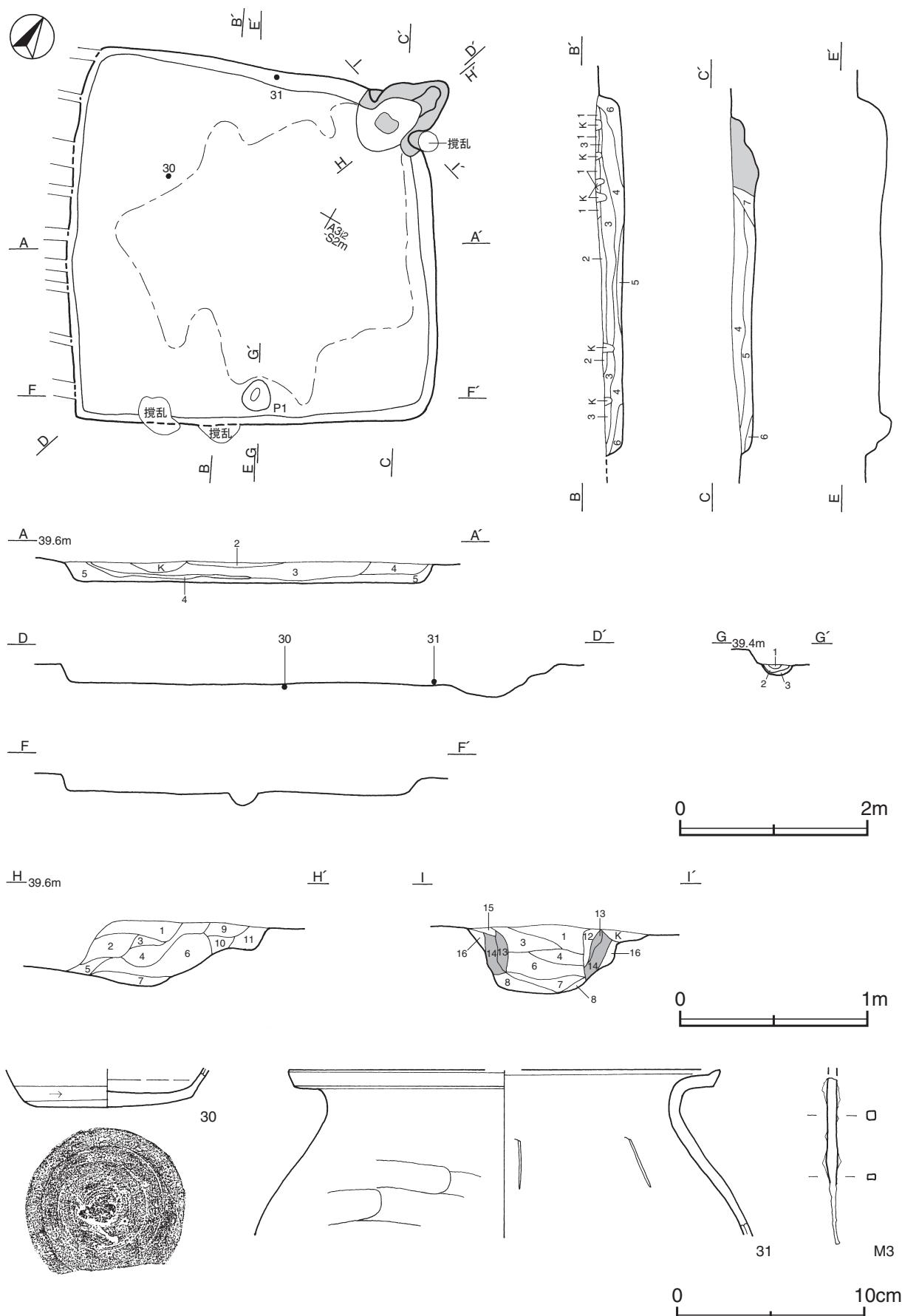
今回の調査で確認した当時代の遺構は、堅穴住居跡4軒である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

#### 堅穴住居跡

#### 第1号住居跡(第19図)

**位置** 調査区北部のA 3i1 区、標高 39.4 m の台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 長軸 4.02 m、短軸 4.00 m の方形で、主軸方向はN - 28° - Wである。壁高は 11 ~ 27 cmで、外傾して立ち上がっている。



第19図 第1号住居跡・出土遺物実測図

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

**竈** 北東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 112cm で、燃焼部幅は 43cm である。袖部は遺存していないが、燃焼部の構築状況から砂質粘土を積み上げて構築されていたものと推測される。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用している。煙道部は壁外に 45cm 堀り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がり、外傾して立ち上がっている。第 1 ~ 4 層は天井部の崩落土層である。

#### 竈土層解説

1 暗 褐 色 焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量	9 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量
2 暗 褐 色 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	10 黒 褐 色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量
3 暗 赤 褐 色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量	11 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
4 暗 赤 褐 色 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子少量	12 暗 赤 褐 色 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
5 極 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量	13 にぶい赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、白色粒子微量
6 極 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量	14 オリーブ褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子微量
7 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量	15 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量
8 暗 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量	16 黒 褐 色 ロームブロック少量

**ピット** P 1 は深さ 10cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口に伴うピットと考えられる。

#### ピット土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック中量	3 褐 色 ロームブロック多量
2 褐 色 ロームブロック中量	

**覆土** 7 層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

#### 土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子少量	5 暗 褐 色 ロームブロック中量
2 黒 褐 色 ローム粒子微量	6 暗 褐 色 ローム粒子中量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量	7 暗 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
4 極 暗 褐 色 ロームブロック中量	

**遺物出土状況** 土師器片 47 点（坏 3, 鑽 44）、須恵器片 4 点（坏）、鉄製品 1 点（鎌）が出土している。30 は中央部の床面、31 は北部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。M 3 は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。

#### 第 1 号住居跡出土遺物観察表（第 19 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
30	須恵器	坏	-	(2.1)	9.1	長石・石英	灰黄	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	床面	20%
31	土師器	甕	[23.0]	(8.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面ヘラナデ	覆土下層	5 %
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
M 3	鎌	(9.0)	0.9	0.5	(7.0)	鉄	鎌身部欠損	茎部断面長方形		覆土中	PL11

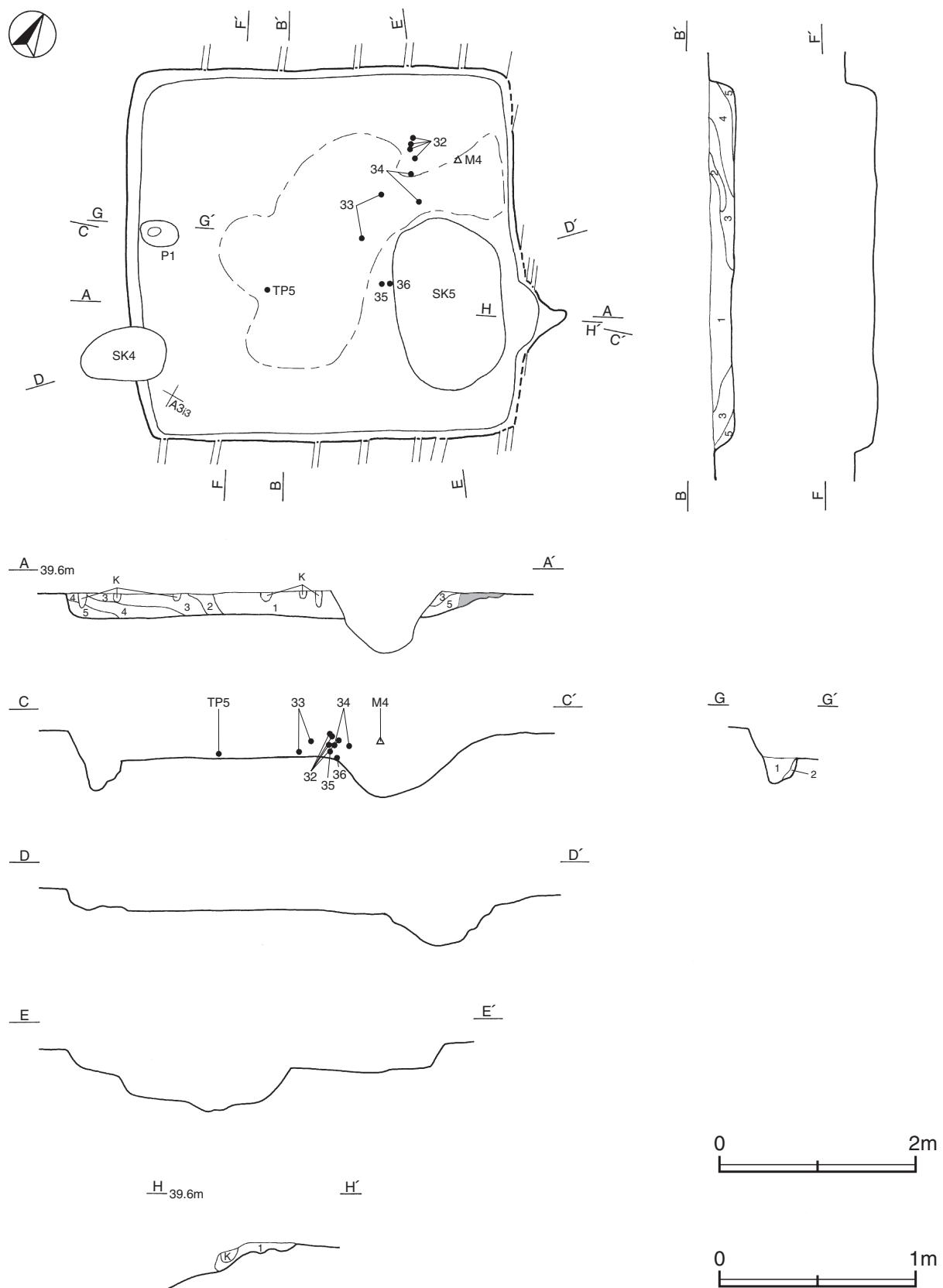
#### 第 2 号住居跡（第 20・21 図）

**位置** 調査区北部の A 3 h3 区、標高 39.4m の台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第 4・5 号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 4.09 m、短軸 3.83 m の方形で、主軸方向は N - 60° - E である。壁高は 17 ~ 29cm で、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。



第20図 第2号住居跡実測図

**竈** 東壁のやや南寄りに付設されている。第5号土坑に掘り込まれているため、遺存状態は悪く、煙道部の掘り込みが確認されただけである。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

**竈土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量

**ピット** P 1 は深さ27cmで、竈と正対する西壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**ピット土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ロームブロック少量

**覆土** 5層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量

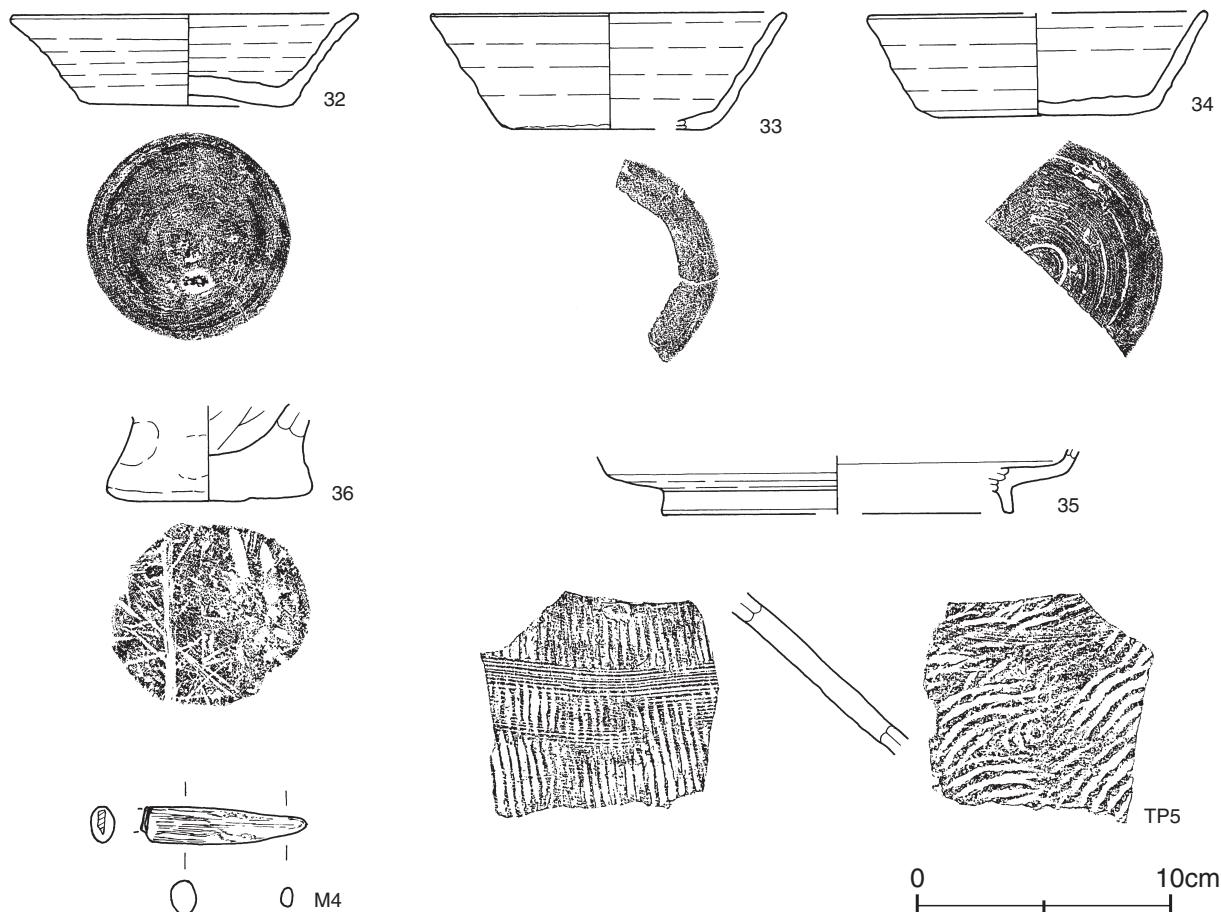
4 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック中量、黒色粒子微量

5 暗褐色 ローム粒子少量

3 極暗褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片98点(壺12, 梶3, 甕類82, 手捏土器1), 須恵器片17点(壺11, 盤1, 甕類3, 長頸瓶2), 鉄製品1点(刀子)が散在した状態で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片4点(深鉢)も出土している。36は中央部の床面, 35・TP5は中央部の覆土下層, M4は北東部の覆土中層からそれぞれ出土している。33は中央部の覆土下層と中層から出土した破片, 32・34は北東部の覆土中層から出土した破片がそれ



第21図 第2号住居跡出土遺物実測図

ぞれ接合したものである。いずれも廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。

### 第2号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
32	須恵器	壺	13.6	3.7	8.4	長石・石英	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	75% PL10
33	須恵器	壺	[13.8]	4.6	[8.0]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ調整	覆土下層	40%
34	須恵器	壺	[13.2]	4.1	[9.6]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	30% PL10
35	須恵器	盤	-	(2.7)	[13.8]	長石・雲母	褐灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土下層	5%
36	土師器	手捏土器	-	(3.9)	8.1	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面指頭痕 内面ヘラナデ 底部木葉痕	床面	70% PL10

番号	種別	器種	胎 土			色 調	手 法 の 特 徴 ほ か			出土位置	備 考
TP 5	須恵器	甕	長石・石英・雲母			黄灰	外面縦位の平行叩き 横位のカキ目 内面同心円文の当て具痕			覆土下層	PL11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備 考
M 4	刀子	(6.6)	1.5	0.3	(9.9)	鉄	刃部欠損 茎部木質残存		覆土中層	PL11

### 第3号住居跡（第22・23図）

**位置** 調査区北部のA 3 g4 区、標高 39.4m の台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 長軸 4.45 m, 短軸 3.94 m の長方形で、主軸方向は N – 65° – E である。壁高は 22 ~ 32cm で、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。北壁から南壁にかけて、一部の壁下には壁溝が確認できた。

**竈** 東壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 99cm で、燃焼部幅は 46cm である。袖部はロームブロックを含んだ第 17 層を基部とし、砂質粘土ブロック、中礫を含んだ第 14 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 5cm 堀り込み、火床面は赤変していない。煙道部は壁外に 37cm 堀り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第 1 ~ 3 層は天井部の崩落土層である。

#### 竈土層解説

1 オリーブ褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
3 暗オリーブ褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
4 極暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	12 極暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量	13 にぶい赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・細礫少量
6 極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量、炭化粒子微量	14 オリーブ褐色	砂質粘土ブロック・中礫少量、ローム粒子微量
7 暗赤褐色	焼土ブロック多量、砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	15 黒褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量
8 黒褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	16 黒褐色	ローム粒子・白色粒子少量
		17 暗褐色	ロームブロック少量、白色粒子微量

**ピット** P 1 は深さ 10cm で、竈と正対する西壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

#### ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	2 暗褐色	ロームブロック中量
-------	-----------	-------	-----------

**覆土** 5層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

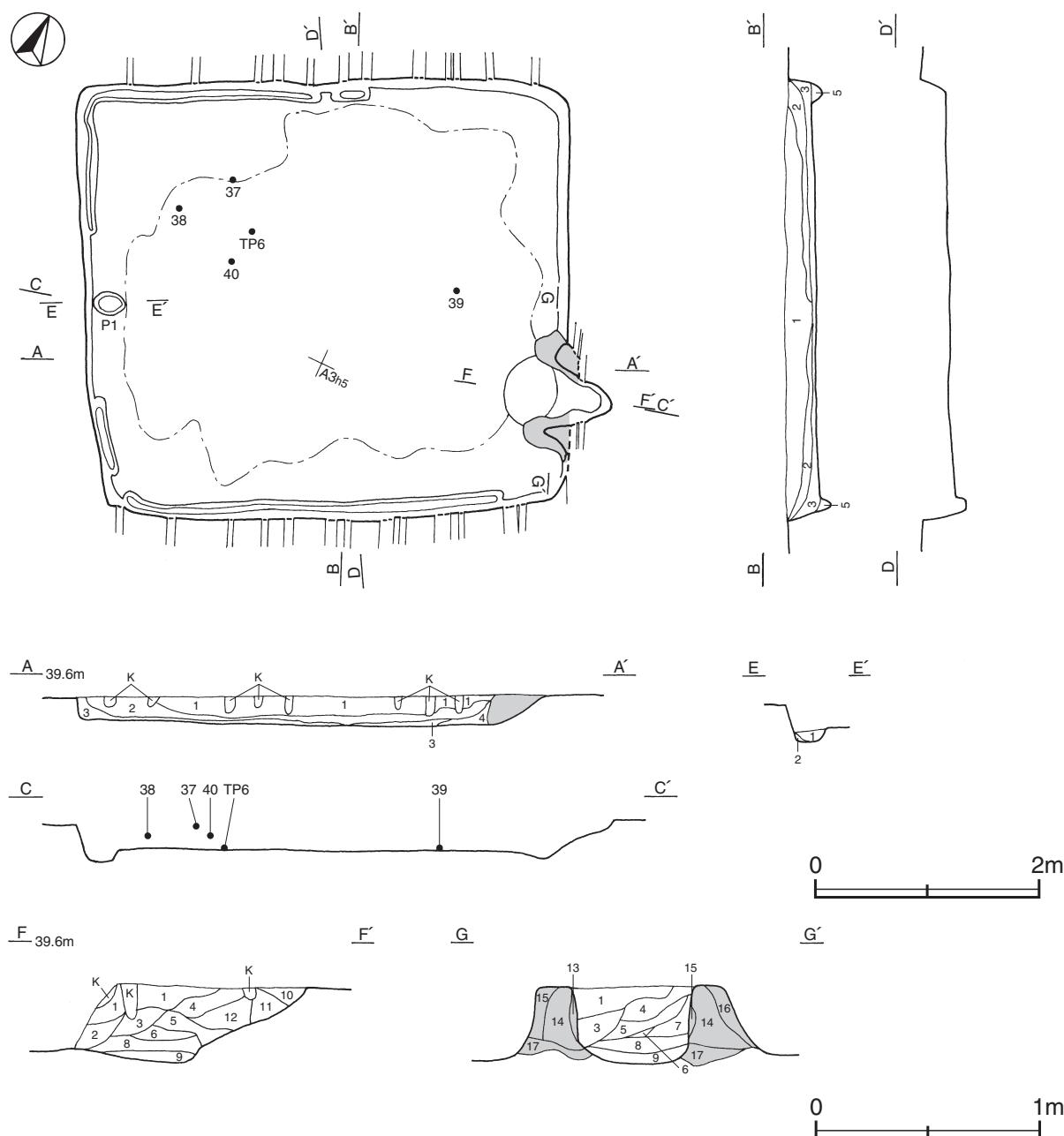
**土層解説**

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量

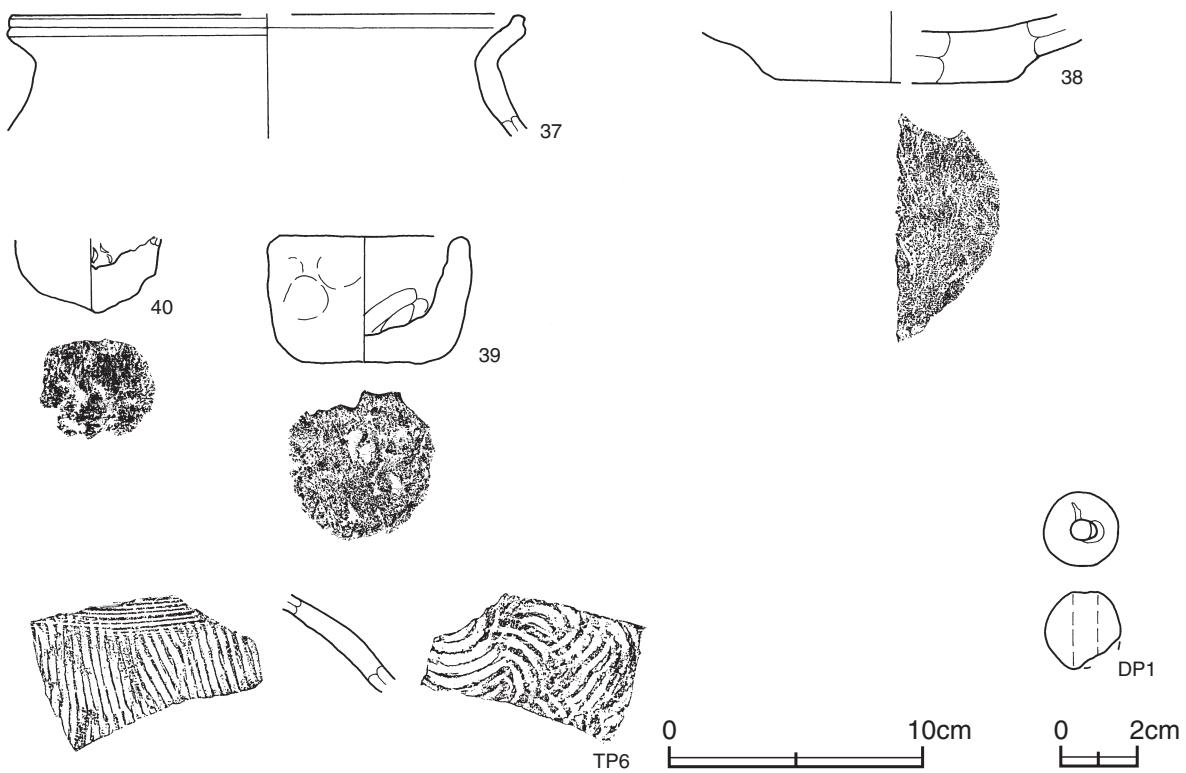
- 4 暗 褐 色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片 118 点（壙 13, 龕類 103, 手捏土器 2）, 須恵器片 12 点（壙 5, 高台付壙 1, 龕類 6）, 土製品 1 点（土玉）, 石器 1 点（磨石）が散在した状態で出土している。また, 流れ込んだ土師器片 1 点（堆）も出土している。39 は東部の床面, TP 6 は中央部の覆土下層, 38・40 は中央部の覆土中層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。37 は北東部の覆土上層, DP 1 は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 22 図 第 3 号住居跡実測図



第23図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
37	土師器	甕	[20.0]	(4.8)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	内・外面ヘラナデ	覆土上層	5%
38	土師器	甕	—	(2.8)	[9.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部多方向のヘラ削り、布圧痕	覆土中層	5%
39	土師器	手捏土器	[7.6]	5.0	5.3	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラナデ 指頭痕	床面	70% PL10
40	土師器	手捏土器	—	(3.0)	—	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外面摩滅により調整痕不明 内面ヘラ当て痕	覆土中層	60% PL10

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 6	須恵器	甕	長石・石英	灰黄	外面縦位の平行叩き 横位のカキ目 内面同心円文の当て具痕	覆土下層	PL11

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	2.0	2.0	0.7	(6.6)	土（長石・石英）	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠損	覆土中	PL11

#### 第4号住居跡（第24・25図）

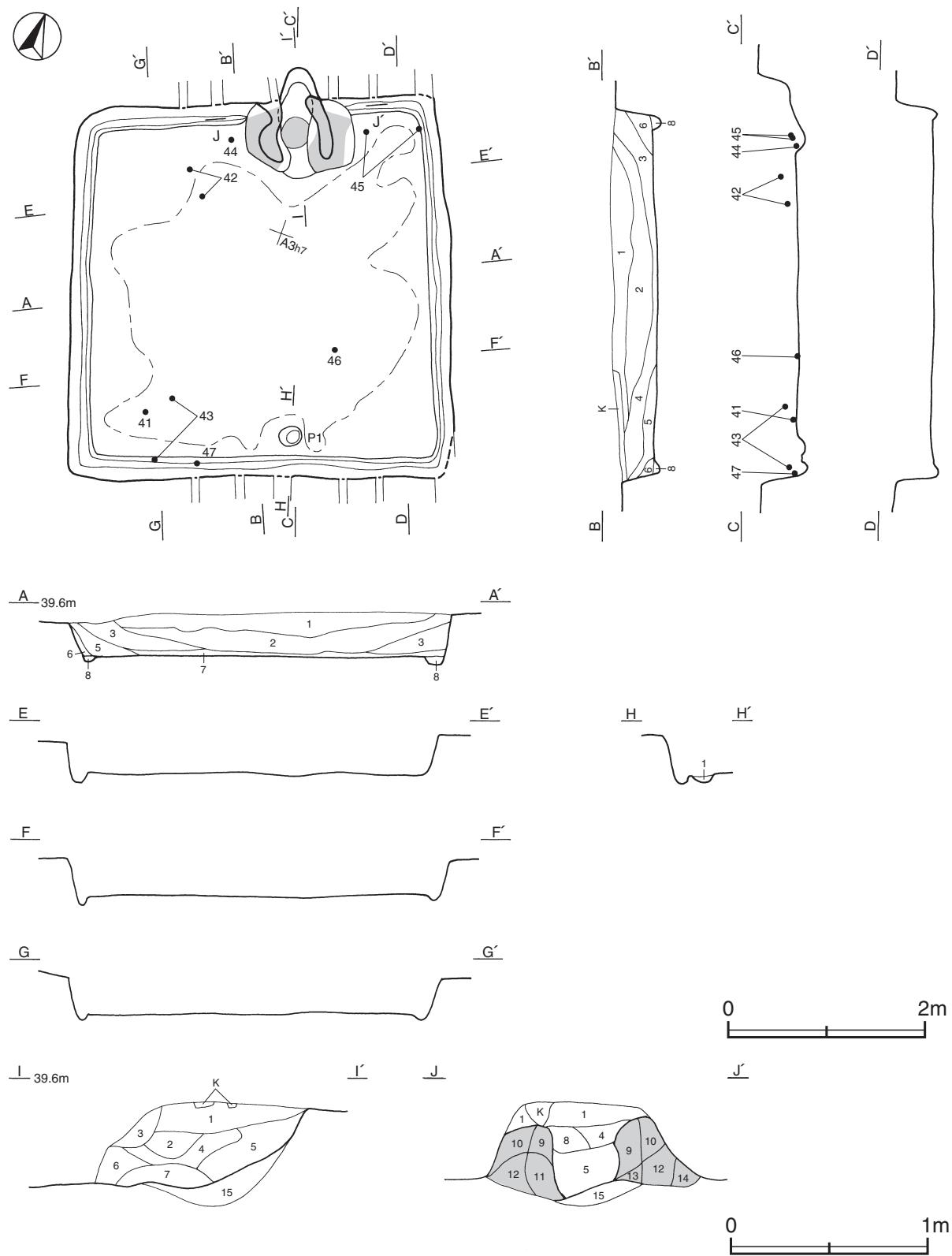
**位置** 調査区北部のA 3 h6 区、標高 39.4m の台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 長軸 3.90 m、短軸 3.80 m の方形で、主軸方向は N - 18° - W である。壁高は 30 ~ 41cm で、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

**竈** 北壁中央部よりやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 111cm で、燃焼部幅は 44cm である。袖部は砂質粘土粒子を含んだ第 11 ~ 13 層を基部とし、砂質粘土ブロックを含んだ第 9 ・ 10 層を積み上げて構築されている。燃焼部の内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面を 11cm 堀り込み、焼土ブロック、砂質粘土ブロックを含んだ第 15 層を埋土して構築されており、火床面は火を受けて赤変硬化

している。煙道部は壁外に 33cm 堀り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。



第 24 図 第 4 号住居跡実測図

#### 竪土層解説

- |          |                               |           |                               |
|----------|-------------------------------|-----------|-------------------------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子微量                  | 9 暗オーブ褐色  | 砂質粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子・白色粒子微量 |
| 2 極暗褐色   | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量           | 10 黒褐色    | 砂質粘土ブロック・白色粒子少量, ローム粒子微量      |
| 3 黒褐色    | 焼土ブロック・ローム粒子微量                | 11 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, 白色粒子少量, 炭化粒子微量      |
| 4 黒褐色    | 焼土粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量        | 12 暗灰黄色   | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 5 暗赤褐色   | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量   | 13 暗赤褐色   | 焼土粒子少量, 炭化粒子・小礫微量             |
| 6 黒褐色    | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量        | 14 オリーブ褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量      |
| 7 暗赤褐色   | 焼土ブロック中量, 砂質粘土粒子少量            | 15 暗赤褐色   | 焼土ブロック中量, 砂質粘土ブロック少量, 炭化粒子微量  |
| 8 にぶい黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子微量 |           |                               |

**ピット** P 1 は深さ 5 cm で, 南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

#### ピット土層解説

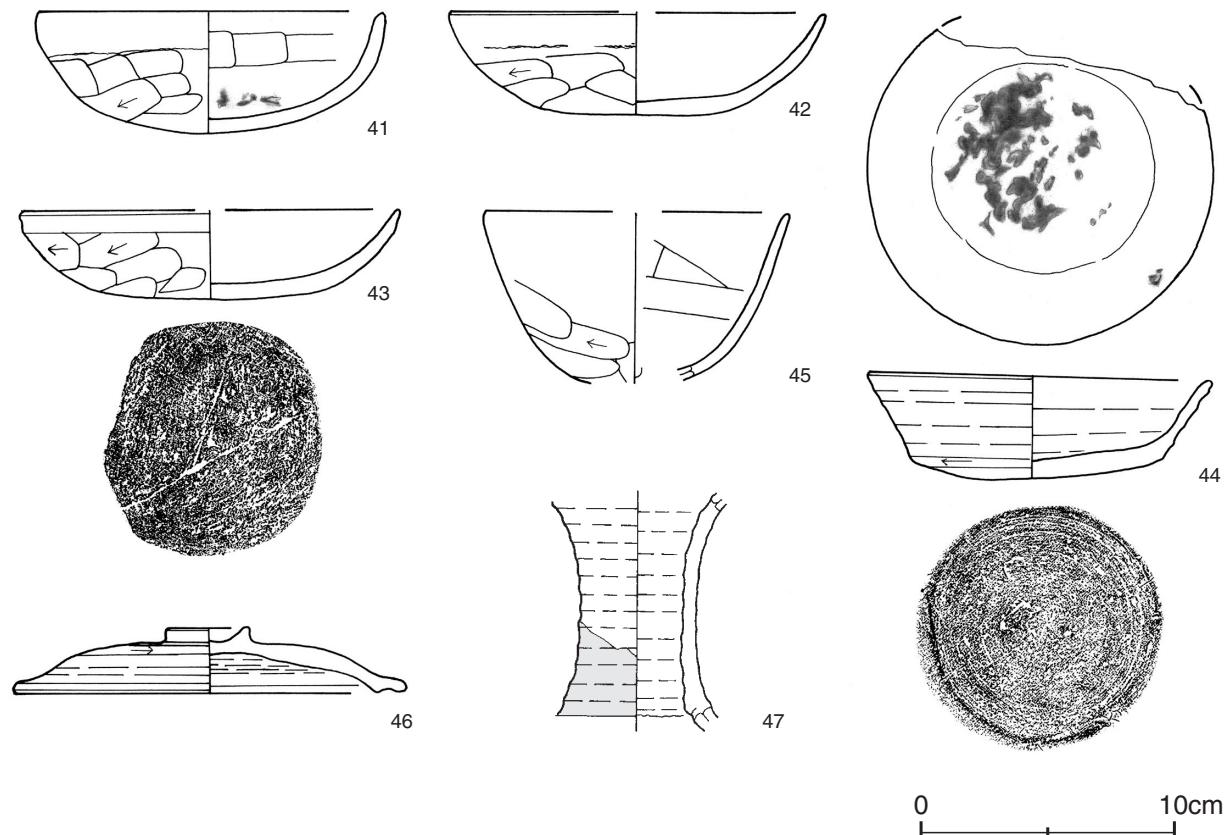
- 1 黒褐色 ロームブロック少量

**覆土** 8 層に分層できる。周囲から流れ込んだ状況を示していることから自然堆積である。

#### 土層解説

- |        |                          |       |           |
|--------|--------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック少量                | 5 黒色  | ローム粒子微量   |
| 2 黒褐色  | ロームブロック微量                | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量   |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量                | 8 褐色  | ローム粒子中量   |

**遺物出土状況** 土師器片 276 点(壺 21, 梶 1, 銚 247, 甌 7), 須恵器片 15 点(壺 8, 高台付壺 1, 盖 2, 盤 2, 長頸瓶 2)が散在した状態で出土している。44 は北部, 41 は南西部, 46 は南東部の床面, 47 は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。45 は北東部の覆土下層, 42 は北部, 43 は南部の覆土中層から出土した破片が接合したもの



第 25 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図

のである。いずれも廃絶後早い段階で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第4号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	壺	13.6	4.8	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕 漆付着	床面	100% PL10
42	土師器	壺	[14.8]	4.0	—	長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土中層	30%
43	土師器	壺	[15.0]	3.5	8.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層	60%
44	須恵器	壺	13.7	4.3	9.6	長石・石英・雲母・細礫	灰白	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り 漆付着	床面	80% PL10
45	土師器	椀	[12.0]	(6.7)	—	赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	20%
46	須恵器	蓋	15.6	2.6	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	床面	95% PL10
47	須恵器	長頸瓶	—	(9.4)	—	石英・黒色粒子	黄灰	緻密	頸部内・外面クロナデ 自然釉付着 接合痕	覆土下層	10% PL10

表4 奈良時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m) (長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
								主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
1	A 3i1	方形	N - 28° - W	4.02 × 4.00	11 ~ 27	平坦	—	—	1	—	北壁	—	自然	土師器、須恵器、刀子	8世紀前葉	
2	A 3h3	方形	N - 60° - E	4.09 × 3.83	17 ~ 29	平坦	—	—	1	—	東壁	—	自然	土師器、須恵器、刀子	8世紀中葉	本跡→SK 4・5
3	A 3g4	長方形	N - 65° - E	4.45 × 3.94	22 ~ 32	平坦	一部	—	1	—	東壁	—	自然	土師器、須恵器、土玉	8世紀中葉	
4	A 3h6	方形	N - 18° - W	3.90 × 3.80	30 ~ 41	平坦	全周	—	1	—	北壁	—	自然	土師器、須恵器	8世紀前葉	

#### 4 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、土坑1基である。以下、遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

#### 土坑

##### 第24号土坑（第26図）

**位置** 調査区中央部のB 2f7 区、標高 38.8 m の台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第3号墳の周溝を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸 2.16 m、短軸 1.65 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 45° - W である。深さは 47 cm で、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

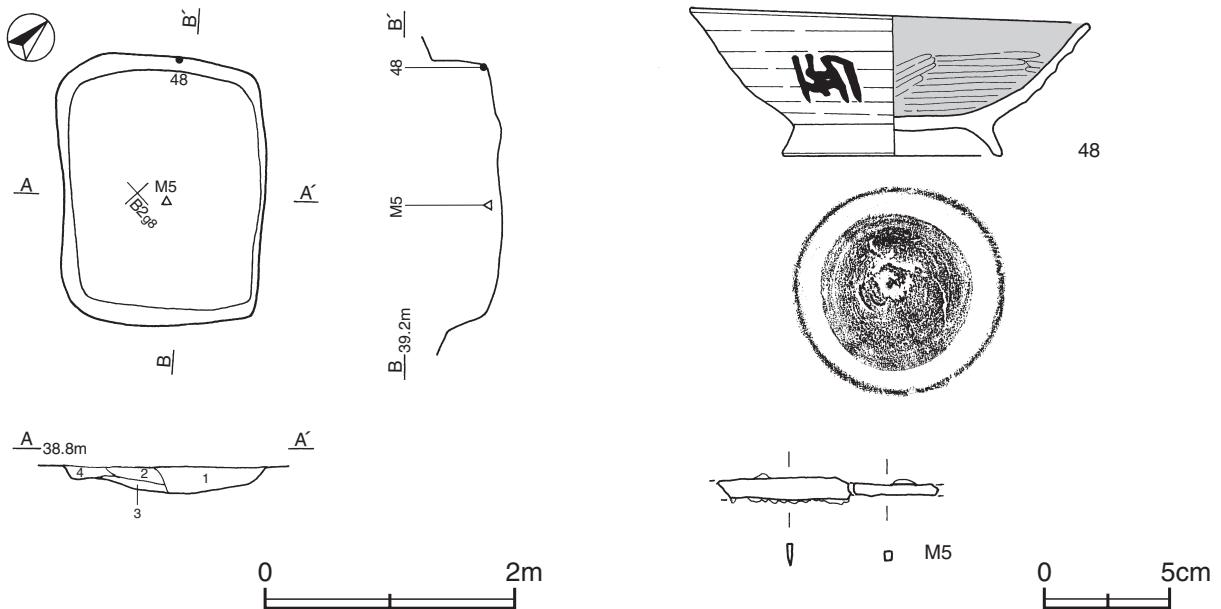
#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量  
2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

3 褐色 ロームブロック中量  
4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器1点（高台付壺）、須恵器片2点（壺）、鉄製品1点（刀子）が出土している。48は北部の底面、M5は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、重複関係や出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第26図 第24号土坑・出土遺物実測図

第24号土坑出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
48	土師器	高台付壺	15.4	5.8	8.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面横位のヘラ磨き 墨書「開」	底面	100% PL11
<hr/>											
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M5	刀子	(8.8)	(1.0)	(0.3)	(4.3)	鉄	刃部・茎部一部欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形		覆土下層	PL11	

## 5 その他の遺構と遺物

今回の調査で、伴う遺物が出土していないことから、時期が明らかでない円形周溝状遺構1基、道路跡1条、土坑29基、ピット群3か所を確認した。以下、遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

### (1) 円形周溝状遺構

第1号円形周溝状遺構（第27図）

**位置** 調査区北部のB 3a4区、標高39.4mの台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 調査区域外に延びているため規模は明確ではないが、平面形は北西部が途切れた円形と推定される。確認できた範囲から、内径7.2m、周溝外縁径8.5mと推定され、周溝幅は、上幅0.5~0.7m、下幅0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。断面形はU字状を呈し、底面は平坦である。

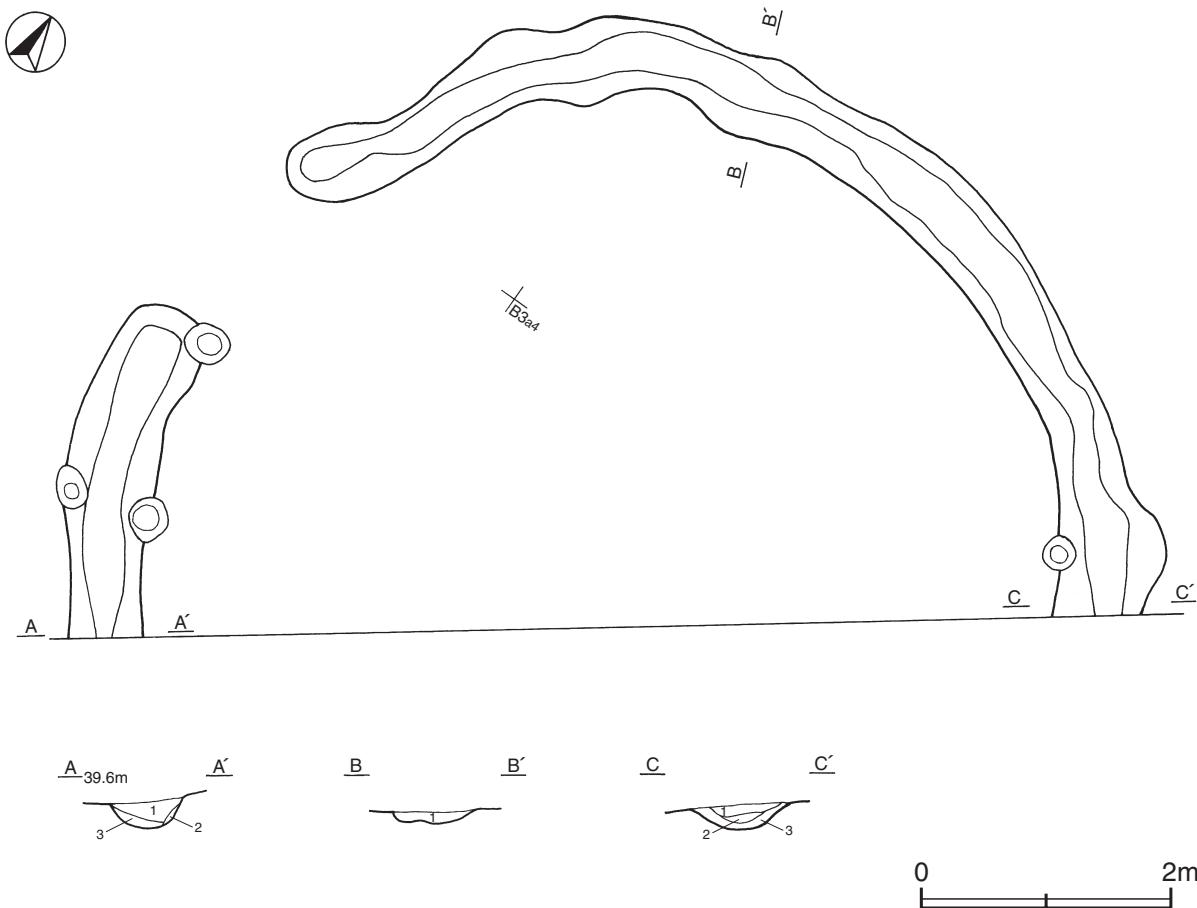
**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況から埋め戻されている。

#### 土層解説

1 黒褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量  
2 黒褐 色 ローム粒子微量

3 暗褐 色 ロームブロック中量

**所見** 形状から円墳の周溝の可能性も考えられるが、TM 1・3に比べ、掘り込みや規模が小さく、また墳丘や遺物も確認できないことから、古墳の周溝と判断できない。時期は、出土土器がないため不明である。



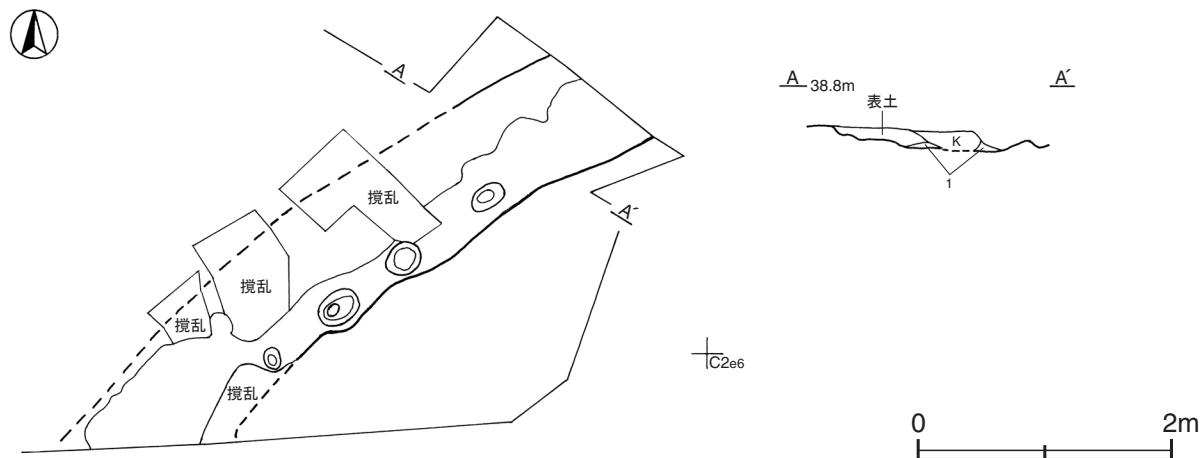
第27図 第1号円形周溝状遺構実測図

## (2) 道路跡

### 第1号道路跡（第28図）

**位置** 調査区中央部のC 2d5区、標高38.6mの台地縁辺部に位置している。

**規模と構造** C 2e5区付近から北東方向(N - 53° - E)へ直線的に伸びている。確認できた長さは4.70mで、幅0.31～1.30m、硬化面の厚さは4cmである。ほぼ同じ幅で連続する円形状の掘り込みが4か所確認できた。



第28図 第1号道路跡実測図

**覆土** 単一層である。第1層上面が路面として機能していたと考えられる。

**土層解説**

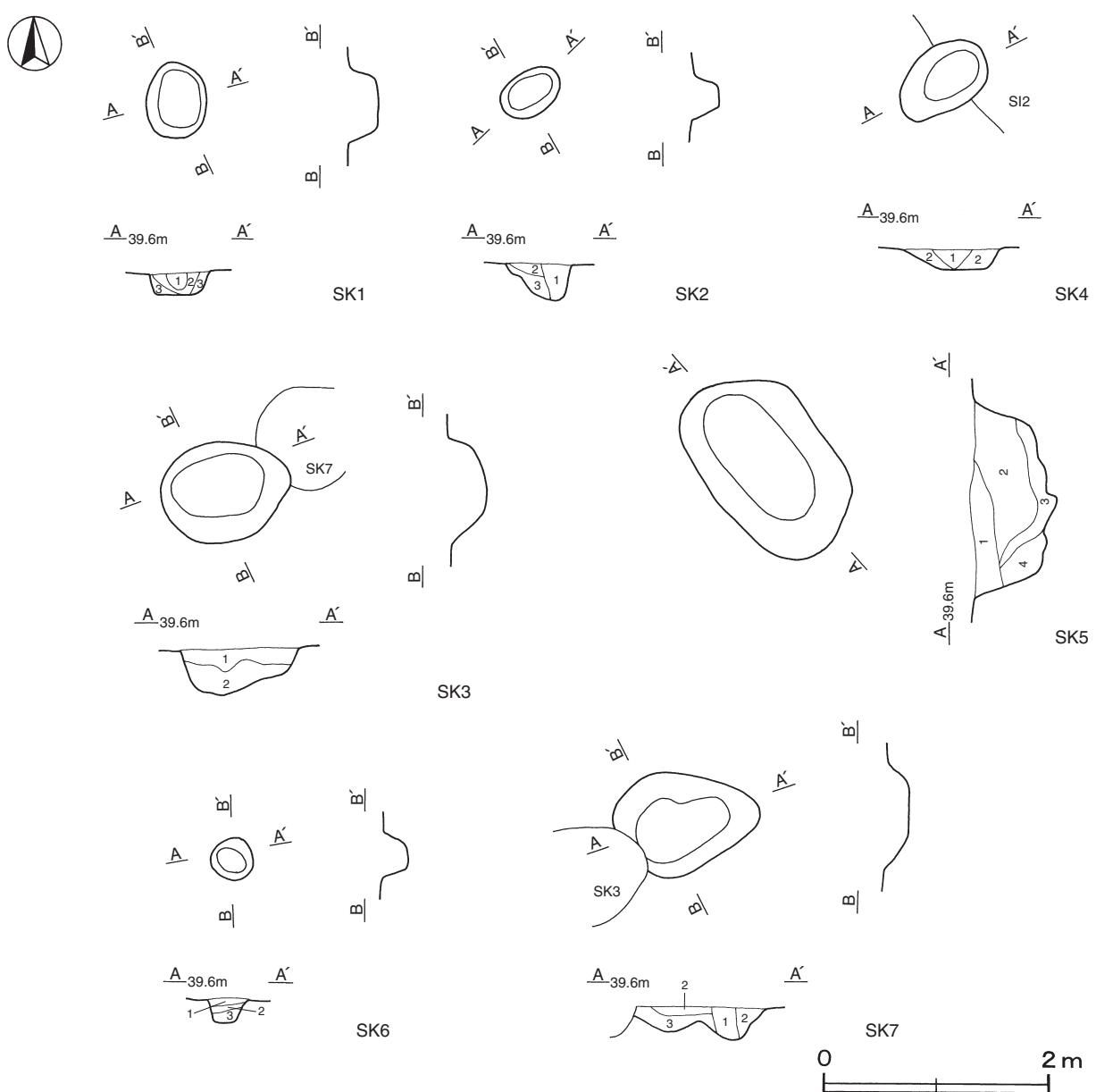
1 暗褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片2点(甕)が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。また、流れ込んだ石器1点(磨製石斧)が出土している。

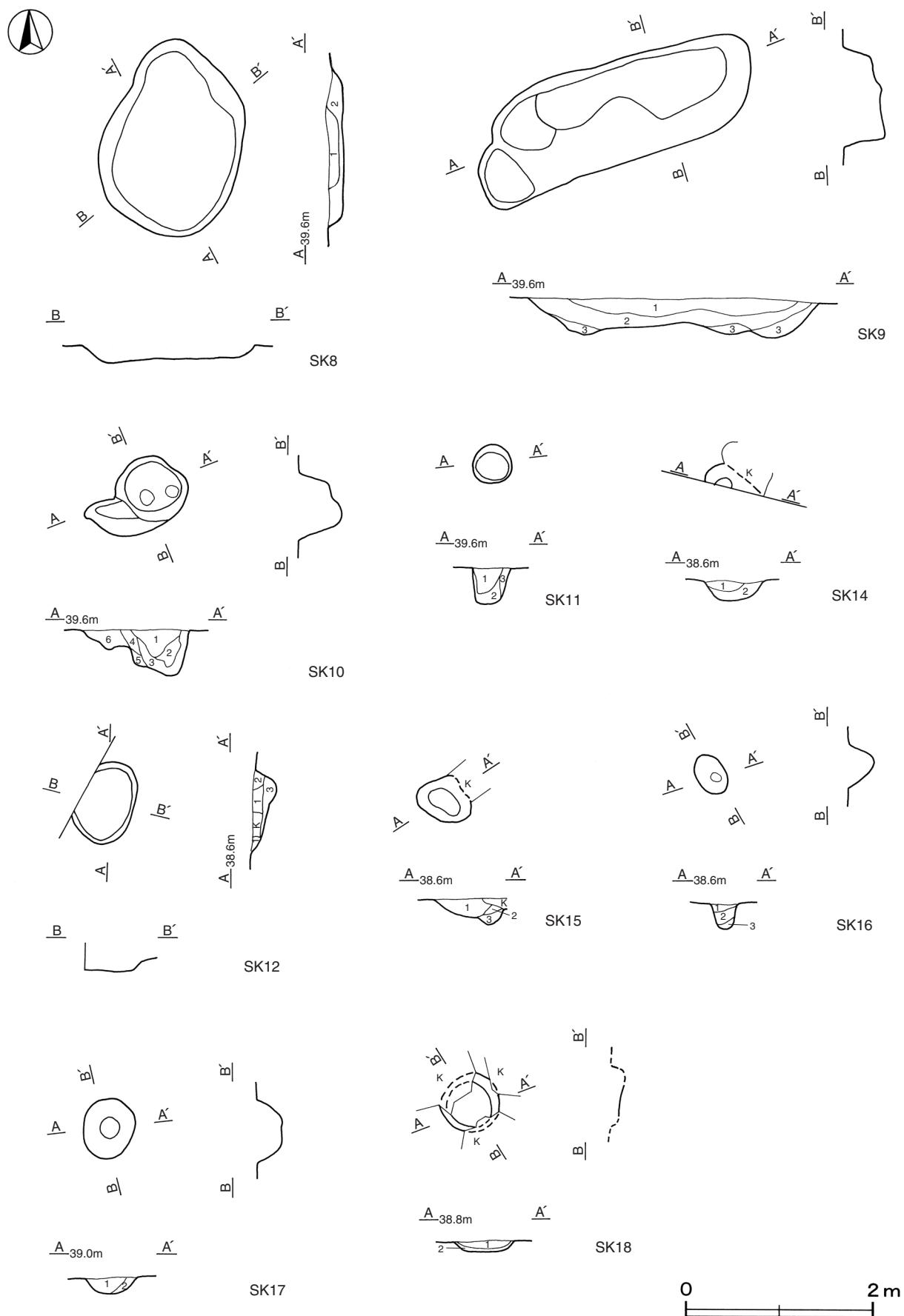
**所見** 時期は、出土土器が少なく細片であることから不明である。

(3) 土坑(第29~31図)

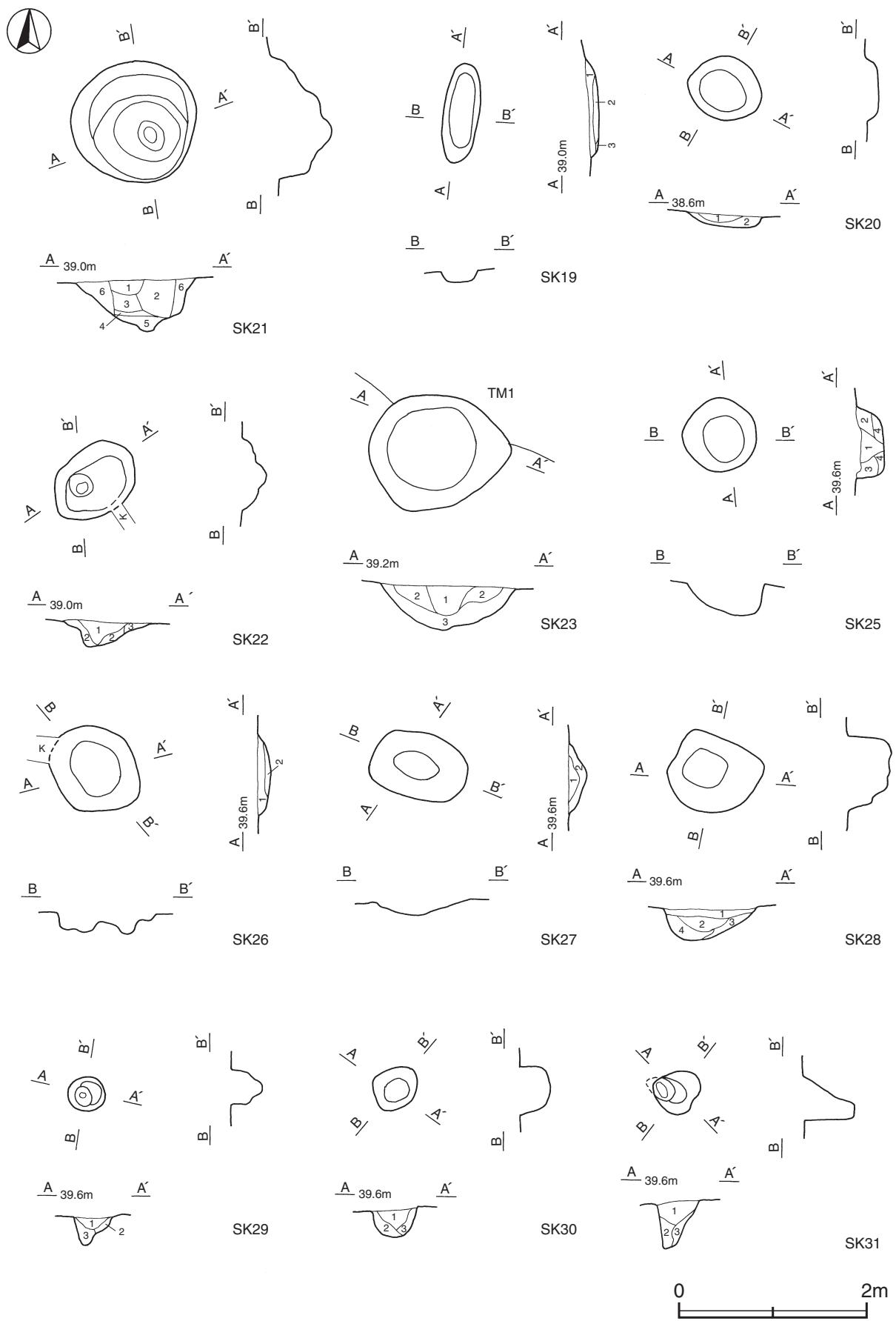
今回の調査で、性格や時期ともに不明な土坑29基が確認されている。これらの土坑については、その他の規模・形状等について一覧表と実測図を掲載するにとどめる。



第29図 その他の土坑実測図(1)



第30図 その他の土坑実測図（2）



第31図 その他の土坑実測図（3）

#### 第1号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 極 暗 褐 色 ローム粒子少量

#### 第2号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 極 暗 褐 色 ローム粒子少量

#### 第3号土坑土層解説

- 1 極 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

#### 第4号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 極 暗 褐 色 ロームブロック微量

#### 第5号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 極 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量

#### 第6号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子少量

#### 第7号土坑土層解説

- 1 極 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ロームブロック多量

#### 第8号土坑土層解説

- 1 極 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

#### 第9号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ロームブロック多量

#### 第10号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 4 褐 色 ローム粒子中量
- 5 褐 色 ローム粒子微量
- 6 褐 色 ロームブロック少量

#### 第11号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量

#### 第12号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

#### 第14号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量, 烧土粒子・炭化粒子微量

#### 第15号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 烧土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黑 褐 色 ロームブロック中量

#### 第16号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黑 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ロームブロック多量

#### 第17号土坑土層解説

- 1 褐 色 炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量

#### 第18号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック中量
- 2 褐 色 ローム粒子微量

#### 第19号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子微量

#### 第20号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 2 褐 色 ロームブロック少量

#### 第21号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 黑 褐 色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 5 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 6 褐 色 ロームブロック中量

#### 第22号土坑土層解説

- 1 灰 褐 色 ロームブロック中量
- 2 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

#### 第23号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 褐 色 ローム粒子中量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

#### 第25号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・白色粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 4 褐 色 ロームブロック少量

#### 第26号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック少量, 白色粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量

#### 第27号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 烧土粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

#### 第28号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック・白色粒子微量
- 4 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

#### 第29号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 烧土粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量

#### 第30号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 烧土粒子・白色粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 烧土粒子少量

#### 第31号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 烧土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量

表5 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B 3 b2	N - 7° - W	楕円形	0.66 × 0.58	26	人為	平坦	外傾	-	
2	B 3 a3	N - 65° - E	楕円形	0.58 × 0.38	26	人為	平坦	外傾	-	
3	B 3 a2	N - 77° - E	楕円形	1.14 × 0.92	30	自然	皿状	緩斜	-	SK 7 → 本跡
4	A 3 h2	N - 51° - E	楕円形	0.88 × 0.57	18	人為	平坦	緩斜	-	SI 2 → 本跡
5	A 3 h3	N - 37° - W	楕円形	1.78 × 1.11	38	人為	凹凸	緩斜	-	SI 2 → 本跡
6	A 3 g7	-	円 形	0.36 × 0.36	22	自然	皿状	外傾	-	
7	B 3 a3	N - 82° - E	楕円形	1.30 × 0.95	22	人為	皿状	緩斜	-	本跡 → SK 3
8	A 3 j3	N - 24° - E	楕円形	2.11 × 1.48	16	人為	平坦	緩斜	-	
9	B 1 j0	N - 67° - E	楕円形	3.14 × 1.12	30 ~ 42	自然	凹凸	外傾	-	
10	B 3 a1	N - 70° - E	不整形	1.12 × 0.75	47	人為	皿状	外傾	-	
11	A 3 g3	-	円 形	0.42 × 0.42	38	人為	平坦	外傾	-	
12	C 1 e8	N - 26° - E	[ 楕円形 ]	0.87 × 0.68	16	自然	平坦	緩斜	-	
14	C 1 e9	N - 76° - W	[ 楕円形 ]	0.65 × (0.23)	20	自然	皿状	緩斜	-	
15	C 1 e9	N - 63° - W	不整形	0.60 × 0.50	20 ~ 28	人為	皿状	緩斜	-	
16	C 1 f9	N - 34° - W	楕円形	0.47 × 0.31	28	自然	U字状	外傾	-	
17	C 2 d1	N - 6° - E	楕円形	0.67 × 0.55	28	自然	皿状	緩斜	-	
18	C 2 e1	-	[ 円 形 ]	0.64 × [0.60]	16	自然	皿状	緩斜	-	
19	C 2 d2	N - 6° - E	楕円形	1.06 × 0.35	14	自然	平坦	外傾	-	
20	C 2 e2	N - 64° - W	楕円形	0.80 × 0.69	14	自然	皿状	緩斜	-	
21	C 2 c2	-	円 形	1.37 × 1.31	60	人為	皿状	緩斜	-	
22	C 1 c0	N - 51° - E	楕円形	0.99 × 0.70	48	人為	皿状	緩斜	-	
23	C 2 c2	N - 90° - W	[ 楕円形 ]	1.52 × [1.24]	48	人為	皿状	緩斜	-	TM 1 → 本跡
25	B 2 g6	-	円 形	0.78 × 0.77	32	人為	皿状	緩斜	-	
26	B 2 f6	N - 51° - W	楕円形	1.06 × 0.91	22	自然	凹凸	外傾	-	
27	B 2 h4	N - 69° - W	楕円形	1.04 × 0.73	16	自然	皿状	緩斜	-	
28	B 2 h3	N - 61° - W	不整形	0.92 × 0.84	46	人為	皿状	緩斜	-	
29	B 2 g8	-	円 形	0.41 × 0.38	34	人為	U字状	直立	-	TM 3 → 本跡
30	B 2 g8	N - 35° - E	楕円形	0.53 × 0.47	34	自然	平坦	外傾	-	TM 3 → 本跡
31	B 2 g8	N - 41° - E	不整形	0.49 × 0.46	54	人為	U字状	外傾	-	TM 3 → 本跡

#### (4) ピット群 (第32~34図)

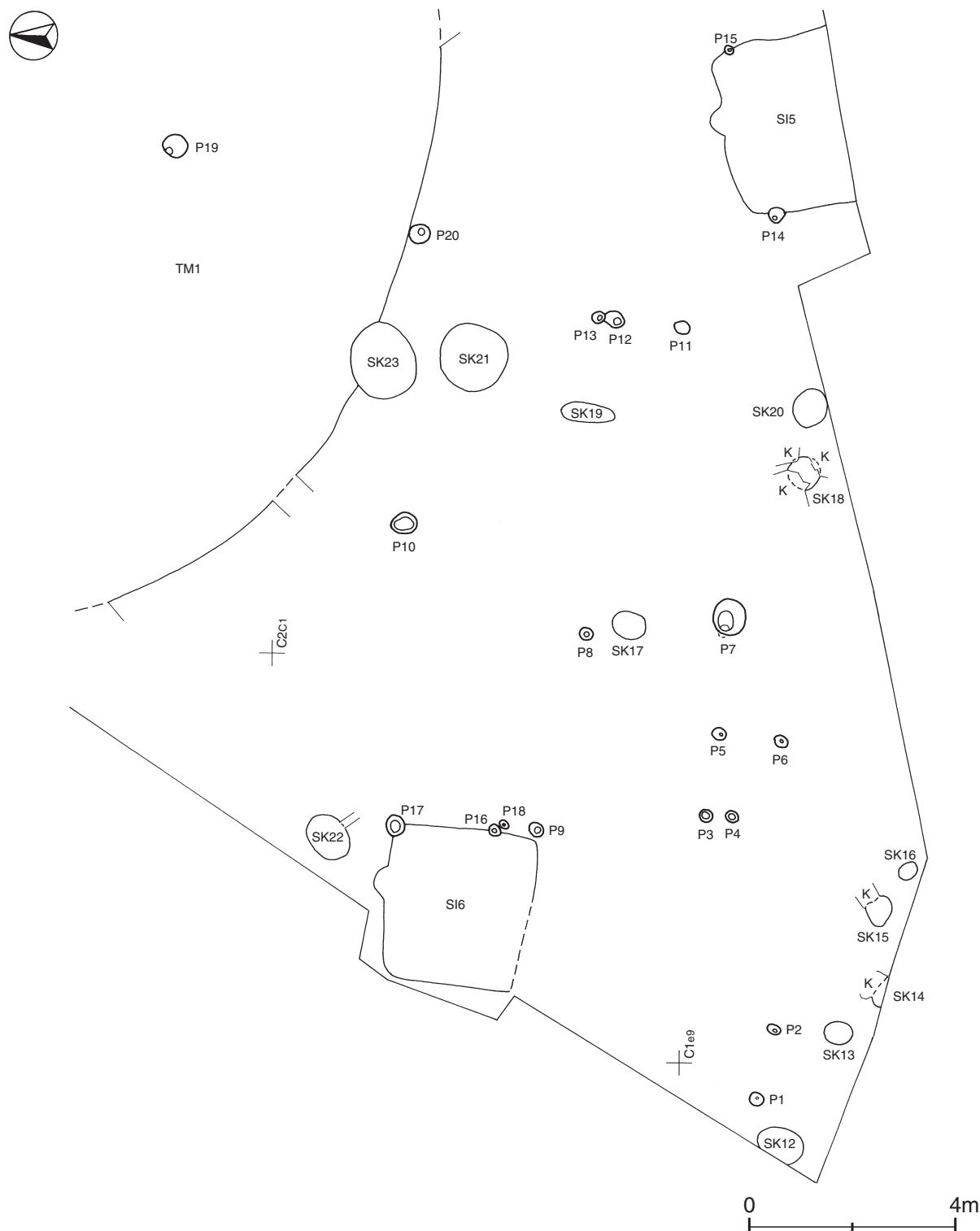
今回の調査で、3か所のピット群が確認された。いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期も不明である。ここでは、ピット群ごとに計測表と平面図を掲載する。

#### 第1号ピット群 (第32図)

**位置** 調査区南部のC 1 e8 ~ C 2 b3 区にかけての東西25m, 南北16mの範囲から、柱穴状のピット20か所が確認された。

**規模** 平面形は長径16~70m, 短径15~63mの円形あるいは楕円形で、深さは7~44cmである。

**所見** 分布状況から建物は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。



第32図 第1号ピット群実測図

表6 第1号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)		深さ
1	C 1 e8	楕円形	27 × 24		15
2	C 1 e9	楕円形	23 × 16		9
3	C 1 e0	円 形	25 × 24		17

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)		深さ
4	C 1 e0	円 形	23 × 23		29
5	C 1 e0	円 形	24 × 22		13
6	C 1 e0	楕円形	22 × 20		12

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(径)	×	短軸(径)
7	C 2 e1	楕円形	70	×	63
8	C 2 d1	円 形	27	×	25
9	C 1 d0	楕円形	29	×	26
10	C 2 c1	楕円形	53	×	40
11	C 2 d2	楕円形	28	×	24
12	C 2 d2	[ 楕円形 ]	(38)	×	34
13	C 2 d2	楕円形	27	×	24
					7

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(径)	×	短軸(径)
14	C 2 e3	楕円形	31	×	20
15	C 2 e3	楕円形	18	×	16
16	C 1 d0	楕円形	24	×	20
17	C 1 c0	円 形	39	×	36
18	C 1 d0	円 形	16	×	15
19	C 2 b3	円 形	44	×	44
20	C 2 c3	楕円形	41	×	36
					22

## 第2号ピット群（第33図）

**位置** 調査区中央部のB 2 h3～B 2 g8区にかけての東西24m, 南北25mの範囲から, 柱穴状のピット58か所が確認された。

**規模** 平面形は長径20～51m, 短径19～38mの円形あるいは楕円形で, 深さは10～63cmである。

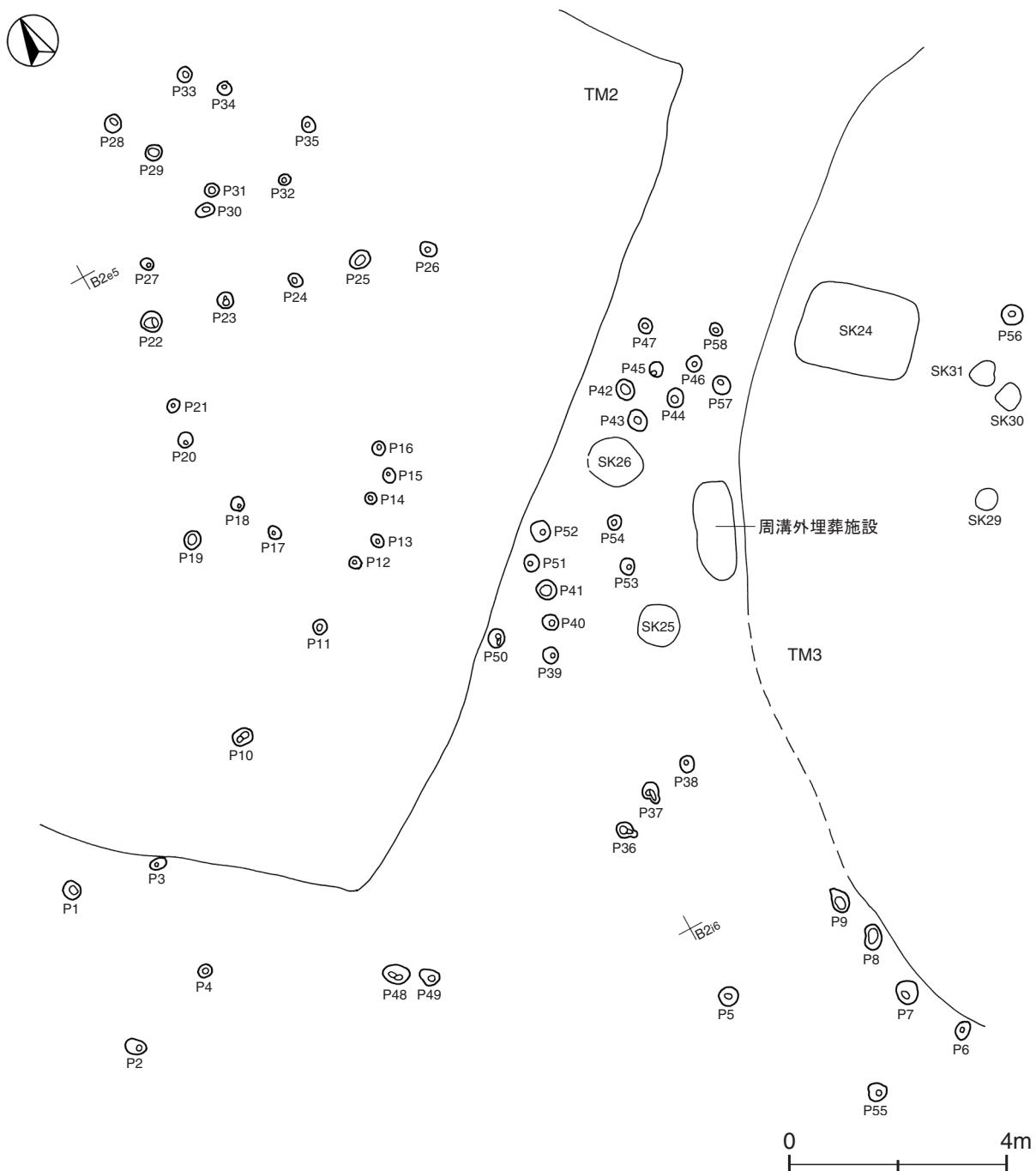
**所見** 分布状況から建物は想定できない。出土遺物がなく, 時期・性格ともに不明である。

表7 第2号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(径)	×	短軸(径)
1	B 2 g3	円 形	31	×	29
2	B 2 h3	楕円形	39	×	27
3	B 2 g3	楕円形	29	×	22
4	B 2 h3	円 形	24	×	22
5	B 2 i6	楕円形	37	×	33
6	B 2 j6	楕円形	36	×	25
7	B 2 i6	楕円形	42	×	37
8	B 2 i6	楕円形	44	×	31
9	B 2 i6	楕円形	51	×	30
10	B 2 g4	楕円形	36	×	29
11	B 2 f5	楕円形	26	×	22
12	B 2 f5	円 形	22	×	22
13	B 2 f5	楕円形	30	×	20
14	B 2 f5	楕円形	25	×	20
15	B 2 f5	円 形	27	×	26
16	B 2 f5	円 形	25	×	23
17	B 2 f5	円 形	27	×	26
18	B 2 f5	円 形	25	×	25
19	B 2 f4	楕円形	33	×	26
20	B 2 e5	楕円形	27	×	23
21	B 2 e5	楕円形	28	×	23
22	B 2 e5	円 形	40	×	38
23	B 2 e5	楕円形	29	×	26
24	B 2 e5	楕円形	27	×	20
25	B 2 e6	楕円形	41	×	29
26	B 2 e6	楕円形	32	×	25
27	B 2 e5	楕円形	24	×	20
28	B 2 d5	円 形	34	×	31
29	B 2 d5	楕円形	30	×	27
					10

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(径)	×	短軸(径)
30	B 2 e5	楕円形	36	×	22
31	B 2 d5	円 形	27	×	25
32	B 2 e6	円 形	20	×	19
33	B 2 d5	円 形	29	×	28
34	B 2 d5	円 形	29	×	27
35	B 2 d6	楕円形	31	×	25
36	B 2 h5	楕円形	41	×	26
37	B 2 h6	楕円形	40	×	30
38	B 2 h6	円 形	28	×	28
39	B 2 g6	円 形	31	×	30
40	B 2 g6	楕円形	30	×	26
41	B 2 g6	楕円形	38	×	33
42	B 2 f6	楕円形	40	×	31
43	B 2 f6	楕円形	39	×	34
44	B 2 f7	楕円形	34	×	30
45	B 2 f7	楕円形	29	×	26
46	B 2 f7	楕円形	30	×	26
47	B 2 f7	円 形	30	×	28
48	B 2 h4	楕円形	45	×	33
49	B 2 h4	楕円形	38	×	26
50	B 2 g5	楕円形	33	×	28
51	B 2 g6	円 形	30	×	30
52	B 2 g6	円 形	36	×	35
53	B 2 g6	円 形	28	×	28
54	B 2 g6	楕円形	28	×	25
55	B 2 j6	楕円形	37	×	33
56	B 2 g8	円 形	38	×	37
57	B 2 f7	楕円形	36	×	30
58	B 2 f7	楕円形	29	×	25
					21



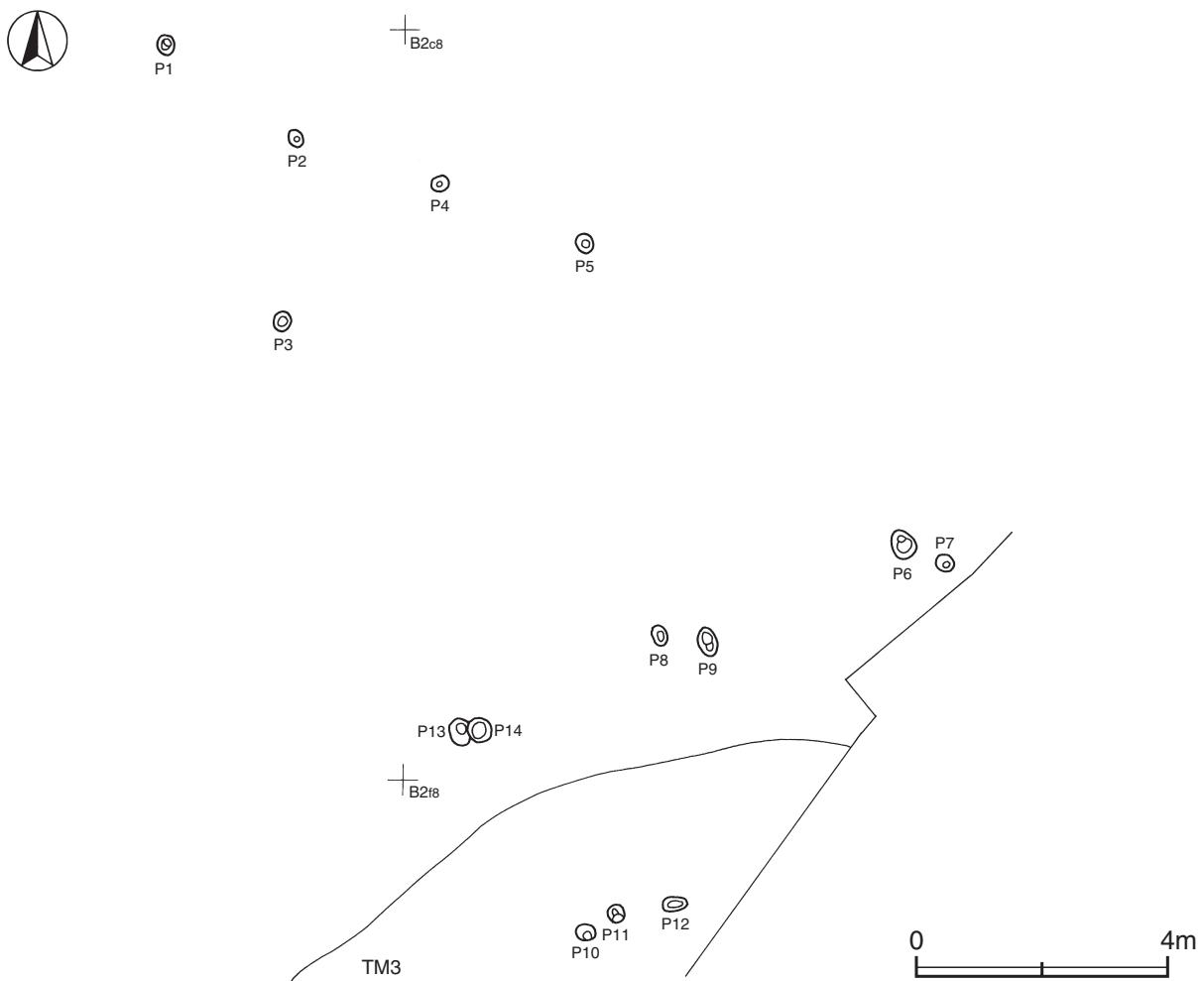
第33図 第2号ピット群実測図

### 第3号ピット群（第34図）

**位置** 調査区中央部のB 2c7～B 2f9区にかけての東西13m、南北16mの範囲から、柱穴状のピット14か所が確認された。

**規模** 平面形は長径25～43m、短径20～38mの円形あるいは橢円形で、深さは10～40cmである。

**所見** 分布状況から建物は想定できない。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。



第34図 第3号ピット群実測図

表8 第3号ピット群ピット計測表

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(径)	×	短軸(径)
1	B 2 c7	楕円形	30	×	24
2	B 2 c7	楕円形	26	×	23
3	B 2 d7	楕円形	30	×	25
4	B 2 c8	円 形	25	×	24
5	B 2 c8	楕円形	30	×	25
6	B 2 e9	楕円形	40	×	34
7	B 2 e0	楕円形	28	×	25

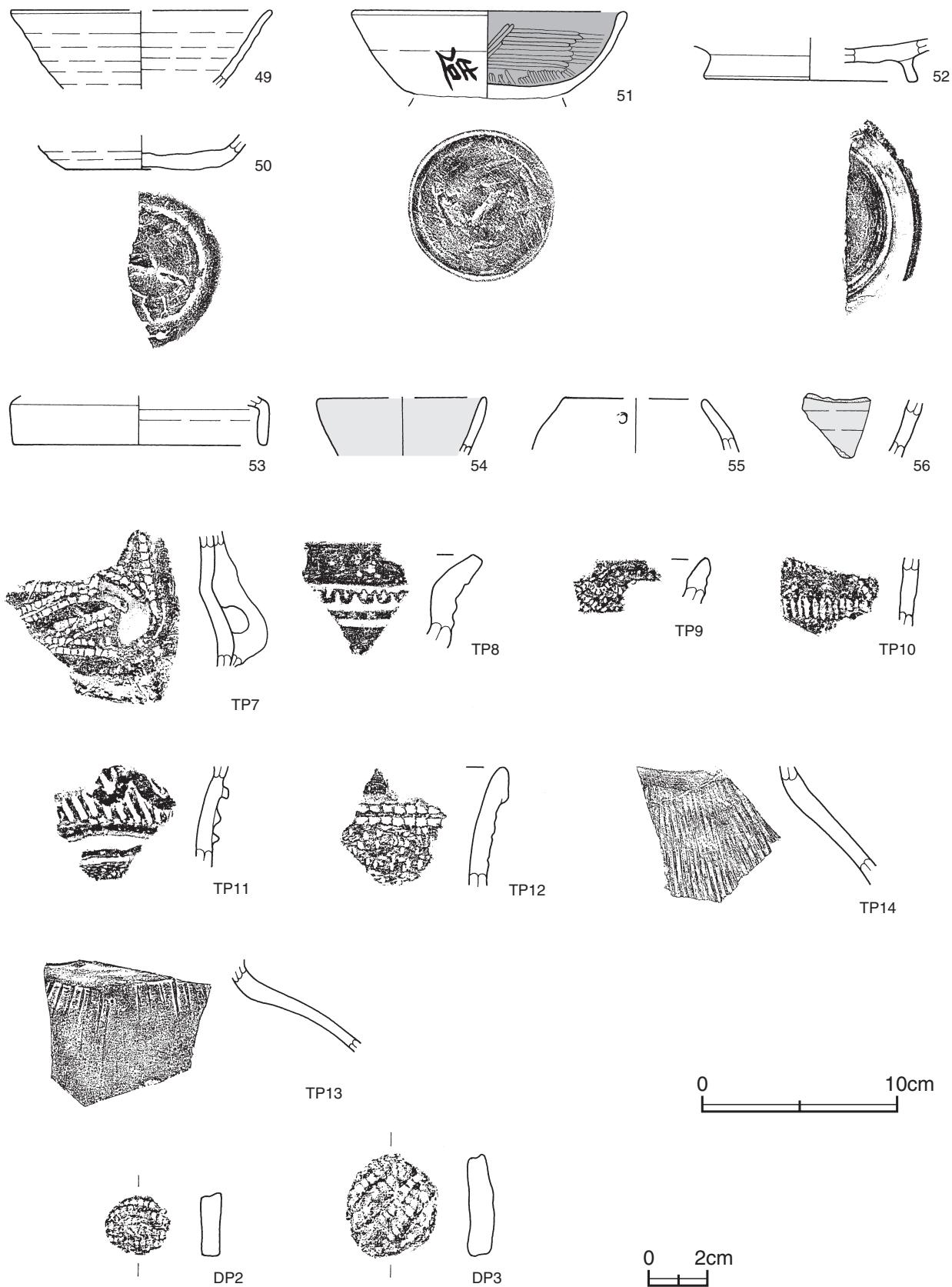
ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸(径)	×	短軸(径)
8	B 2 e9	楕円形	30	×	20
9	B 2 e9	楕円形	43	×	38
10	B 2 f8	円 形	28	×	27
11	B 2 f8	楕円形	30	×	27
12	B 2 f9	楕円形	38	×	24
13	B 2 e8	[ 楕円形 ]	41	×	(27)
14	B 2 e8	楕円形	41	×	38

表9 ピット群一覧表

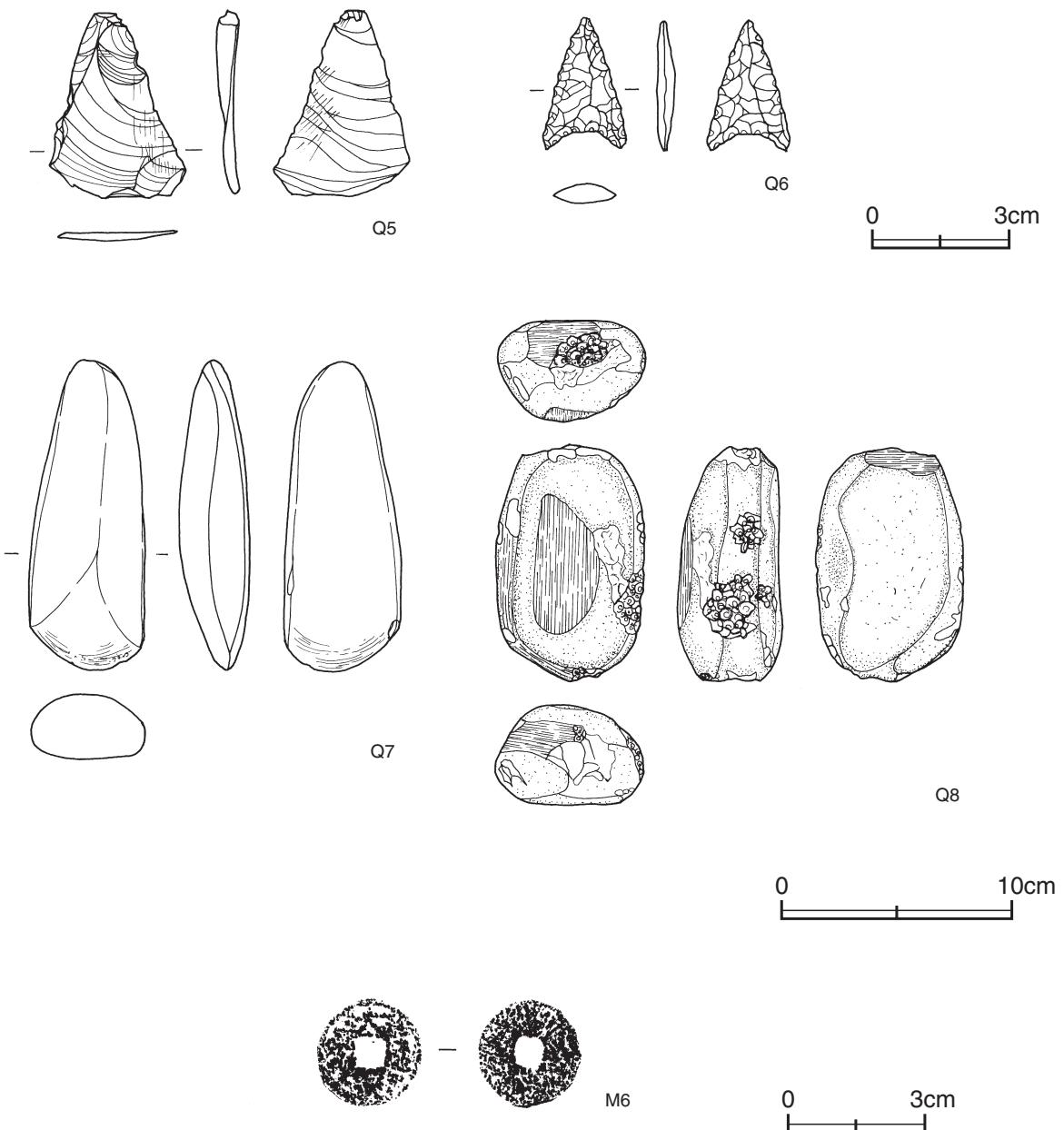
番号	位置	柱穴 (長さの単位はすべてcm)					出土遺物	時 期	備 考 (重複関係 古→新)
		柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ			
1	C 1 e8 ~ C 2 b3	20	円形・楕円形	16 ~ 70	15 ~ 63	7 ~ 44	-	-	TM 1, SI 5 ~ 6 → 本跡
2	B 2 h3 ~ B 2 g8	58	円形・楕円形	20 ~ 51	19 ~ 38	10 ~ 63	-	-	TM 2 → 本跡
3	B 2 c7 ~ B 2 f9	14	円形・楕円形	25 ~ 43	20 ~ 38	10 ~ 40	-	-	TM 2 ~ 3 → 本跡

(5) 遺構外出土遺物 (第35・36図)

遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び観察表で掲載する。



第35図 遺構外出土遺物実測図(1)



第36図 遺構外出土遺物実測図（2）

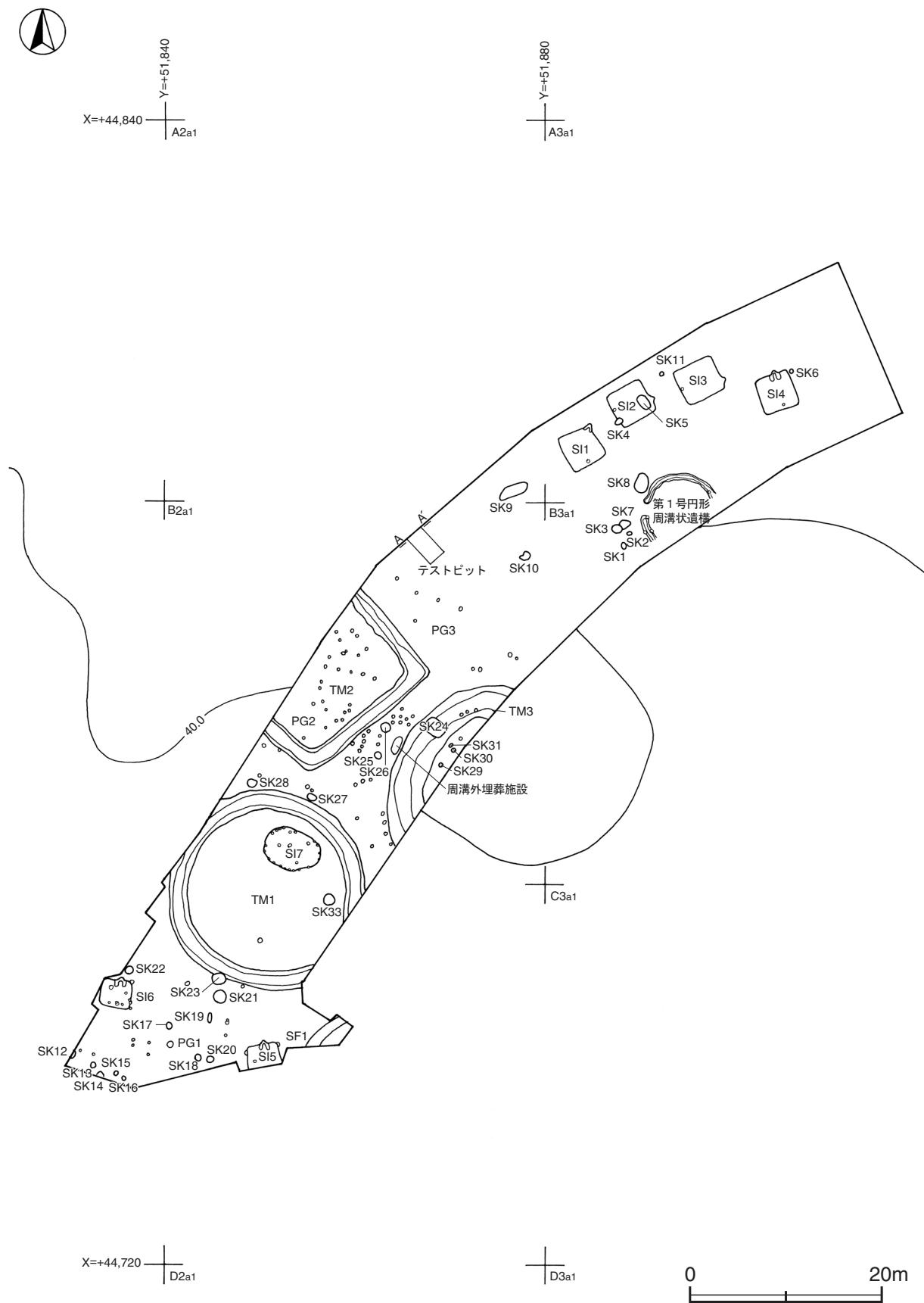
遺構外出土遺物観察表（第35・36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
49	須恵器	坏	[13.4]	(4.0)	—	長石・石英	黄灰	普通	ロクロ整形	TM 3 覆土中	5%
50	須恵器	坏	—	(1.8)	[8.0]	長石・石英	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り 不調整	TM 3 覆土中	20%
51	土師器	高台付坏	13.5	(4.5)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り 墨書「造」	TM 1 覆土中	80% PL11
52	須恵器	高台付坏	—	(2.2)	[11.0]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	表土	20%
53	須恵器	蓋	—	(2.5)	[13.0]	長石・石英・黒色粒子	灰黄褐	普通	内・外面ロクロ整形	表土	10%
54	土師器	埴	[8.6]	(3.0)	—	長石	明赤褐	普通	内面ヘラナデ 内・外面赤彩 外面摩滅により調整痕不明	SI 3 覆土中	5%
55	土師器	鉢	[7.0]	(2.8)	—	長石	にぶい黄橙	普通	内面ヘラナデ 補修孔有 外面摩滅により調整痕不明	表土	5%
56	陶器	碗	—	(3.0)	—	細砂・黒色粒子	黄灰	緻密	内・外面施釉	表土	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	隆帯脇複列の押引文	表土	PL12
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	交互刺突による連続コの字文	TM 3 覆土中	PL12
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	LR の縄文地文上に押引文 有節沈線による波状文	表土	PL12
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	縦位の刻み目文	TM 1 覆土中	PL12
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	棒状工具による沈線 波状の隆帯貼付	表土	PL12
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	刺突文 2 条の押引文	TM 1 覆土中	PL12
TP13	須恵器	甕	長石・石英・雲母	灰	体部外面縦位の平行叩き	TM 3 覆土中	PL12
TP14	須恵器	甕	長石・雲母	灰	体部外面縦位の平行叩き	表土	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 2	土器円盤	2.1	2.3	0.7	4.8	長石・石英	周縁一部研磨調整	表土	PL12
DP 3	土器片錘	3.6	3.2	0.9	12.1	長石・石英	周縁研磨調整 一方向の切り込み	表土	PL12
Q 5	剥片	4.0	2.9	0.5	2.48	チャート	未研磨	表土	PL12
Q 6	石鎌	2.9	1.8	0.4	1.36	チャート	両面押圧剥離 基部に抉り有り	TM 1 覆土中	PL12
Q 7	磨製石斧	13.3	4.9	3.0	303.1	粘板岩	定角式磨製石斧 基部一部欠損	表土	PL12
Q 8	磨石	10.1	6.3	4.4	381.5	安山岩	長軸方向の両端に敲打痕	SI 3 覆土中	PL12

番号	種別	銭名	径	孔幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	銭貨	大觀通寶カ	2.4	0.6	2.3	銅	無背	SI 5 覆土中	PL12



第37図 堀町西古墳遺構全体図

## 第4節　まとめ

### 1 はじめに

調査の結果、縄文時代の住居跡1軒、土坑1基、古墳時代の古墳3基、住居跡2軒、土坑1基、奈良時代の住居跡4軒、平安時代の土坑1基などを確認し、当遺跡は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることがわかった。ここでは、確認できた遺構と遺物について時代ごとに概観し、若干の考察を加えてまとめとしたい。

### 2 縄文時代

縄文時代中期の水戸地方は、前期末からの海退により遺跡の数が増え、集落の規模も広まった。渡里町から飯富町にかけての台地や那珂川に南面する台地の他に、備前町や栄町など台地に深く入り込んだ地域にも遺跡が確認されている<sup>1)</sup>。

当遺跡の第7号住居跡は、平面形が橜円形で、4か所の主柱穴と23か所の壁柱穴を確認した。また、加曾利E I式期に比定できる<sup>2)</sup>深鉢が埋設されていた。単純形態の土器埋設炉は、土器を据え置いて使用した煮沸調理施設と推定することは難しいと考えられており<sup>3)</sup>、本跡の埋設土器の覆土中でも炉床を確認できなかった。しかし、埋設土器の南西部が赤変硬化しており、土器に近接して炉床があったと想定され、埋設土器と地床炉がセットになる可能性がある。茨城町の宮後遺跡でも同様の形態をもつ住居跡が4軒確認されており、埋設土器が煮沸用の深鉢等の支えとして利用されたもの<sup>4)</sup>と推測されている。

第33号土坑は、中期前葉の所産と考えられる<sup>5)</sup> フラスコ状土坑である。底面から完形に近い深鉢などが出土しており、中には、ベンガラの付着した鉢形土器もある。また、出土土器には無文地に隆帯による橜円区画や複列の角押文を施す阿玉台II式土器と地文に縄文を有し胴部を垂下する隆帯間に上下対向弧線文を施す大木7b式土器<sup>6)</sup>「七郎内C群土器」の2つの様式がある。阿玉台式は東関東に広く分布しており、七郎内C群土器は、福島県、栃木県、茨城県北部など東北南部から関東北部に分布する地域性の強い土器群である。当遺跡は両土器文化圏が交錯した地域に位置しており、特に七郎内C群土器については分布の南限域にあたることから、これらの土器が茨城県北部あるいは那珂川上流域の栃木県との交流の中でもたらされたものなのか縄文時代中期前葉の交流の実態を考察する上で貴重な資料である。

### 3 古墳時代

古墳時代前期になると、県内の首長者たちは生産基盤である水田経営をもとに、その勢力を拡大していく。さらに中期になると、文化や流通の中心となる津の管理を行い、その周辺に古墳を築造するようになった。水戸地方では4世紀代に上市台地から西へやや奥まった十万原台地の縁辺部に安戸星古墳が造られるが、それ以降は那珂川流域の台地上を中心に古墳群が広がっていく。当古墳が形成された古墳時代中期の水戸地方は、大和王権が地方に存在した部落的小国家を編成しながら支配を強化し、那珂国造を成立させている。当古墳の南東約3kmに位置する水戸市愛宕山古墳は、中期前葉（5世紀第1四半期）に築造されたと考えられており<sup>7)</sup>、那珂国造の初祖建借間命の墓と目されている。その規模からも那珂国造の勢力の程が伺え、首長墓と考えられる愛宕山古墳を中心に、その配下の中・小豪族の奥津城がつくられていったものと考えられる。水戸市の分布調査で堀町西古墳では単独の小円墳と捉えられていたが、今回の調査の結果によって、新

たに円墳1基と方墳1基が確認され、那珂川に面する上市台地から縁辺部にかけて、古墳群が形成されていることが判明した。

### (1) 古墳の形態と埋葬施設

調査区内で確認した3基の古墳のうち2基の円墳（第1・3号墳）は、周溝から出土している須恵器壺の模倣品や小形平底壙などから、中期中葉（5世紀第2四半期）に築造されたものと考えられる<sup>8)</sup>。方墳（第2号墳）は、出土遺物からの時期判断はできないが、2基の円墳とほぼ等間隔で、計画的に築造されたと考えられることや円墳の周溝の覆土と類似した堆積土から、これらの古墳と比較的近い時期に築造されたものと推測される。また、第3号墳の北西約1mの位置に、周溝外埋葬施設を確認した。底面に白色粘土が長軸1.44m、短軸0.77mの不整形な形で残存しており、粘土壺の一部の可能性もある。副葬品と考えられる小形平底壙は、北東部の覆土下層から出土している。類例としては、桜川市の加茂B古墳群<sup>9)</sup>と美浦村の沢田古墳群<sup>10)</sup>があげられる。加茂B古墳群では、5世紀中葉に比定される方墳を中心に5世紀後葉の円墳の築造が確認されている。また沢田古墳群の2基の円墳からは、土坑状の埋葬施設が確認されている。更に、加茂B古墳群と沢田古墳群からも周溝外埋葬施設が確認されており、加茂B古墳群では個別的な埋葬施設<sup>12)</sup>、沢田古墳群では主軸方向や配置から追葬的な墓坑<sup>11)</sup>と考えられている。本跡は、第3号墳とほぼ同時期と考えられる遺物が出土していることや遺構の配置から、第3号墳の築造後まもなく造られた追葬的な埋葬施設であると考えている。

以上のことから当古墳群は、二者と規模や形状、築造時期が類似しており、これらの古墳の被葬者は、首長層から新たに統治機構の一環として古墳の造営が許可された首長層の配下の中小豪族の墳墓群と推測できる。

### (2) 住居跡

第1号墳の南西約5mの位置から2軒の住居跡を確認した。2軒の住居跡は規模や形状、主軸方向がほぼ等しく、鬼高期の須恵器模倣壺や常総型の甌などを出土していることから7世紀前葉に比定できる<sup>13)</sup>。第1号墳に非常に近い位置に立地しており、墓守など古墳との関係が深い住居とも考えられるが、出土遺物に祭祀的意味合いの強いものがないことから、その関連性は薄いと思われる。古墳と集落が同一台地に共存する場合、穢の場との境を明確にするために溝などで境界がなされているが、それが認められないことは逆に古墳との関係がない氏族が住みついたとも考えられる。

## 4 奈良時代

奈良時代の水戸地方においても、中央集権的な律令体制下に入り、中央政府の権威と支配が国郡の行政組織を通じて直接及ぶようになった。当遺跡は、那賀郡全隈郷内に所在していたと考えられ、今回の調査で確認された8世紀前葉の2軒の住居跡、8世紀中葉の2軒の住居跡の配置は、約3mの間隔で扇状に位置している。また、この時期の住居としては構造も特異で、一辺が約4mの方・長方形で、柱穴がなく出入り口ピットのみである。さらに竈の位置は不規則で、北東コーナー部、東壁南寄り、北壁東寄りと統一性が見られない。

## 5 平安時代

今回の調査で、1基の土坑が確認された。第3号墳の周溝を掘り込み、平面形は隅丸長方形を呈している。北部底面から、体部外面に「開」と墨書された土師器の高台付壺が出土している。当遺跡が所在する堀町は、近世において堀村と開江村から成り立っている。「開」は、『開江』の地名を示した可能性が考えられ、律令期に「開江」の地名があった可能性もある。この他、第1号墳の周溝から「造」と書かれた墨書土器が出土している。

## 6 おわりに

以上、述べてきたように、当遺跡は古墳時代中期に古墳群が形成されていることが判明した。また、縄文時代中期、古墳時代後期、奈良時代と断続的に集落が営まれていることも確認できた。当遺跡は北東部に延びており、古墳群、集落は更なる広がりをもっていることが想定される。

### 註

- 1) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- 2) 大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣 1996年12月
- 3) 鈴木素行・中村哲也・小松崎恵子・色川順子「茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会 2005年10月
- 4) 荒蒔克一郎「茨城町宮後遺跡における縄文中期竪穴住居跡の形態について－炉跡の形態を中心として－」『研究ノート』第11号 財団法人茨城県教育財団 2002年3月
- 5) 註1) と同じ
- 6) 鈴木裕芳『諫訪遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会 1980年3月
- 7) 石野博信『全国古墳編年集成』雄山閣 1995年11月
- 8) 横村宣行「和泉式土器編年考－茨城県を中心として－」『研究ノート』第5号 財団法人茨城県教育財団 1996年3月
- 9) 川井伸也「加茂B古墳群 金谷遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書XV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第304集 2008年3月
- 10) 本橋弘巳「沢田古墳群 国道125号バイパス建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第276集 2007年3月
- 11) 註10) と同じ
- 12) 註9) と同じ
- 13) 横村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』第2号 財団法人茨城県教育財団 1993年3月

### 参考文献

- ・茨城県史編さん原始古代史部会『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年2月
- ・水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- ・石野博信他『古墳時代の研究 第11巻 地域の古墳II 東日本』 1990年9月
- ・茨城大学人文学部考古学研究室『常陸の前方後円墳(2)』 2005年3月
- ・茨城地方史研究会『茨城の歴史 県北編』 2002年5月
- ・塙本師也「茨城県北部における大木7b式期の土器－特に七郎内Ⅱ群土器と所謂スワタイプについて－」『常総台地』16 常総台地研究会 2009年12月



# 写 真 図 版



第5号住居跡出土遺物



北 完 剥 状 態



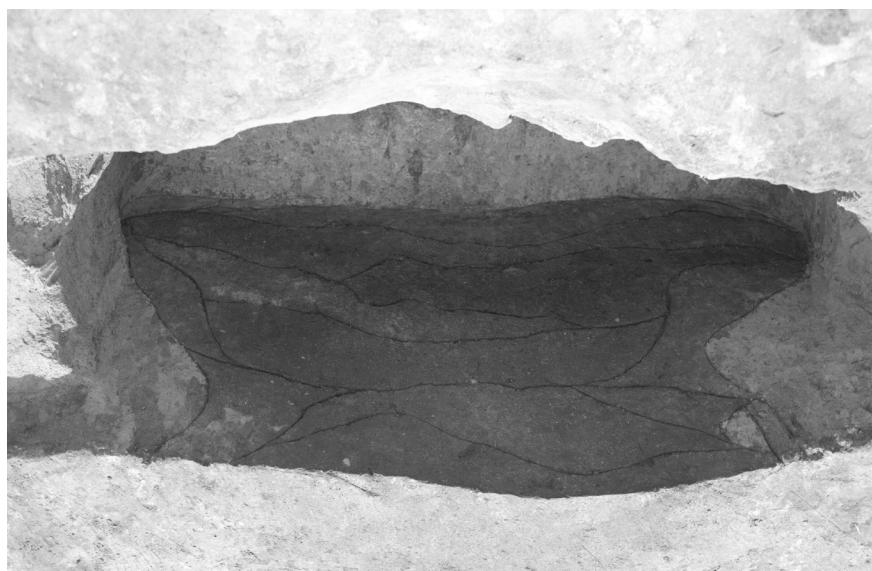
南 完 剥 状 態



第 7 号 住 居 跡  
完 剥 状 態



PL 2



第33号土坑  
土層断面



第33号土坑  
遺物出土状況



第1号墳  
完掘状況

第 1 号 墳  
遺 物 出 土 状 況



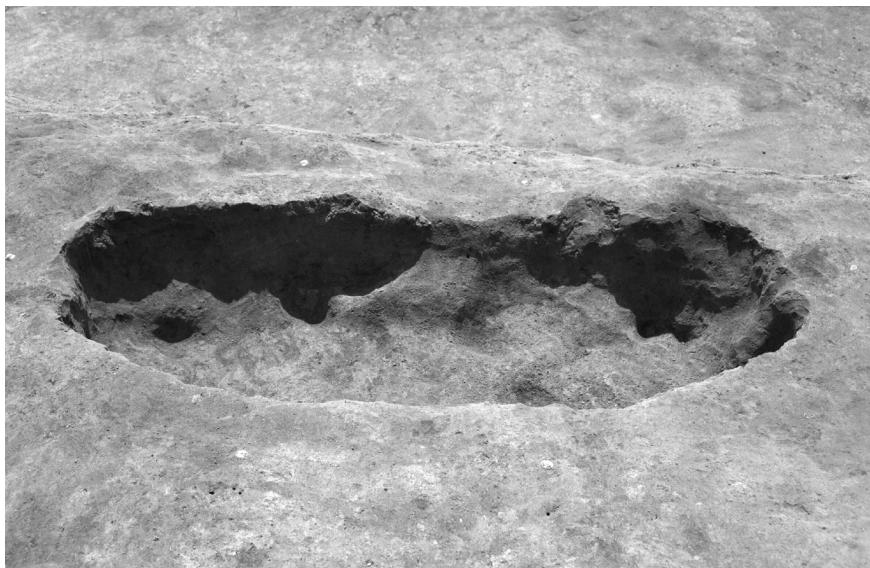
第 2 号 墳  
完 挖 状 況



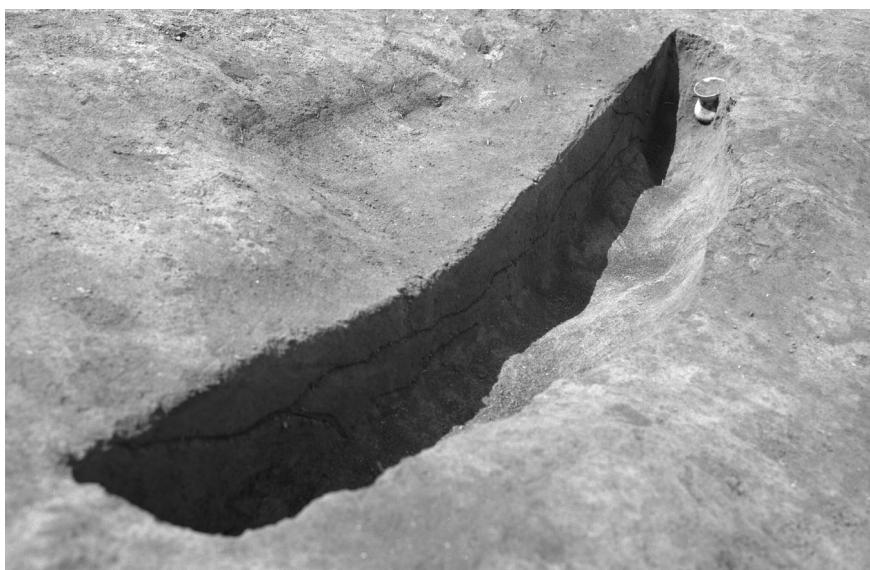
第 3 号 墳  
完 挖 状 況



PL 4



第3号墳  
周溝外埋葬施設  
完掘状況



第3号墳  
周溝外埋葬施設  
遺物出土状況



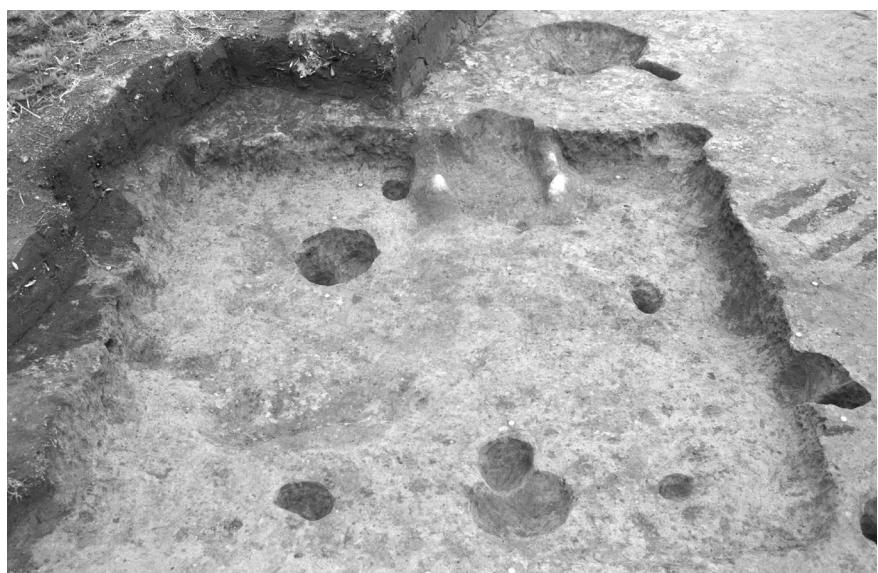
第5号住居跡  
完掘状況



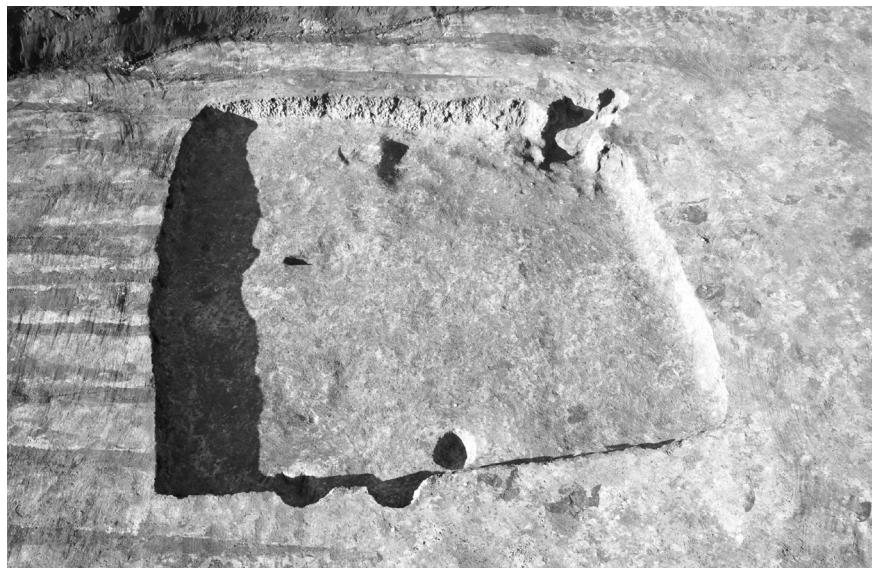
第5号住居跡  
遺物出土状況①



第5号住居跡  
遺物出土状況②



第6号住居跡  
完掘状況



第1号住居跡  
完掘状況



第4号住居跡  
完掘状況



第1号円形周溝状遺構  
完掘状況

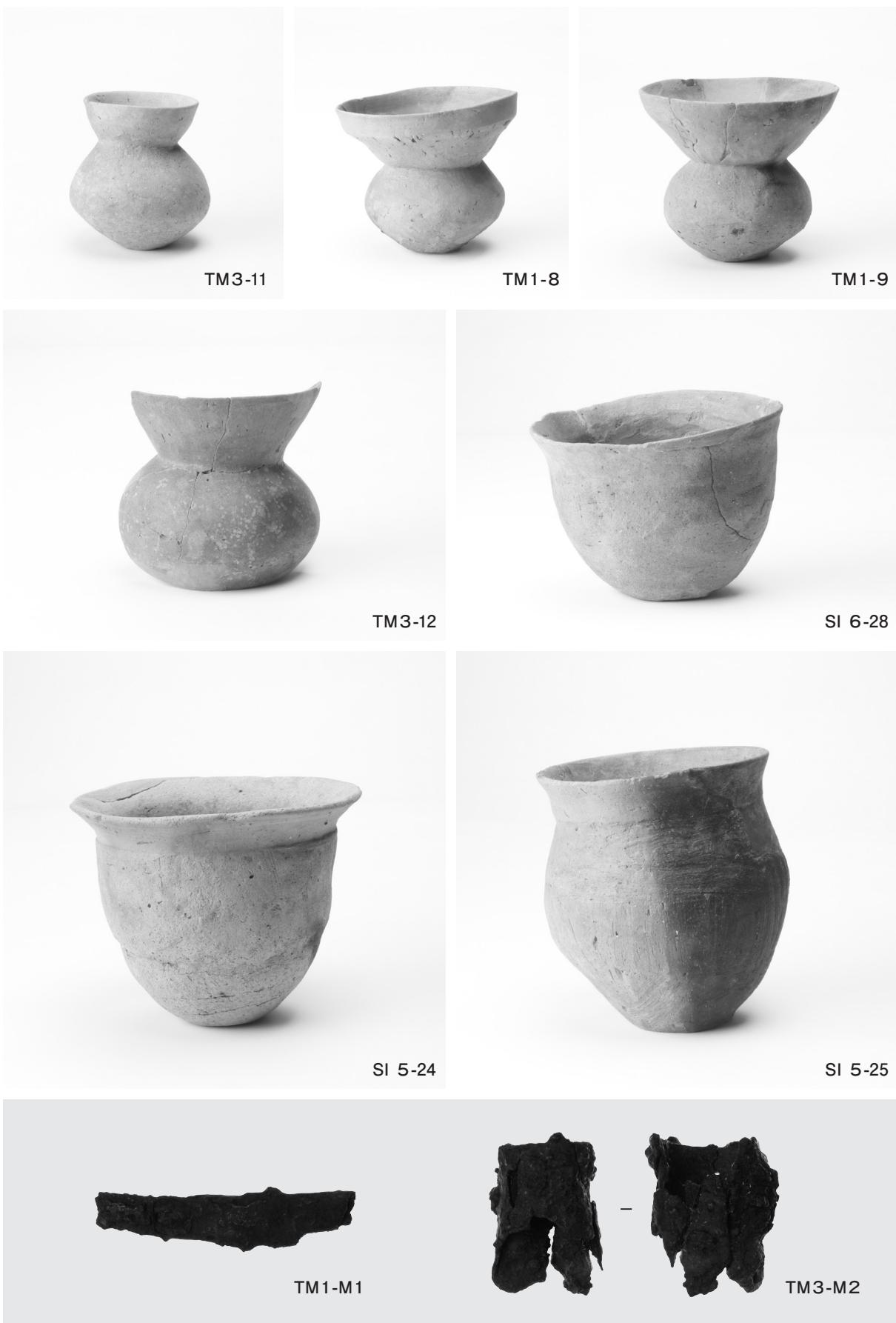


第7号住居跡、第33号土坑出土遺物

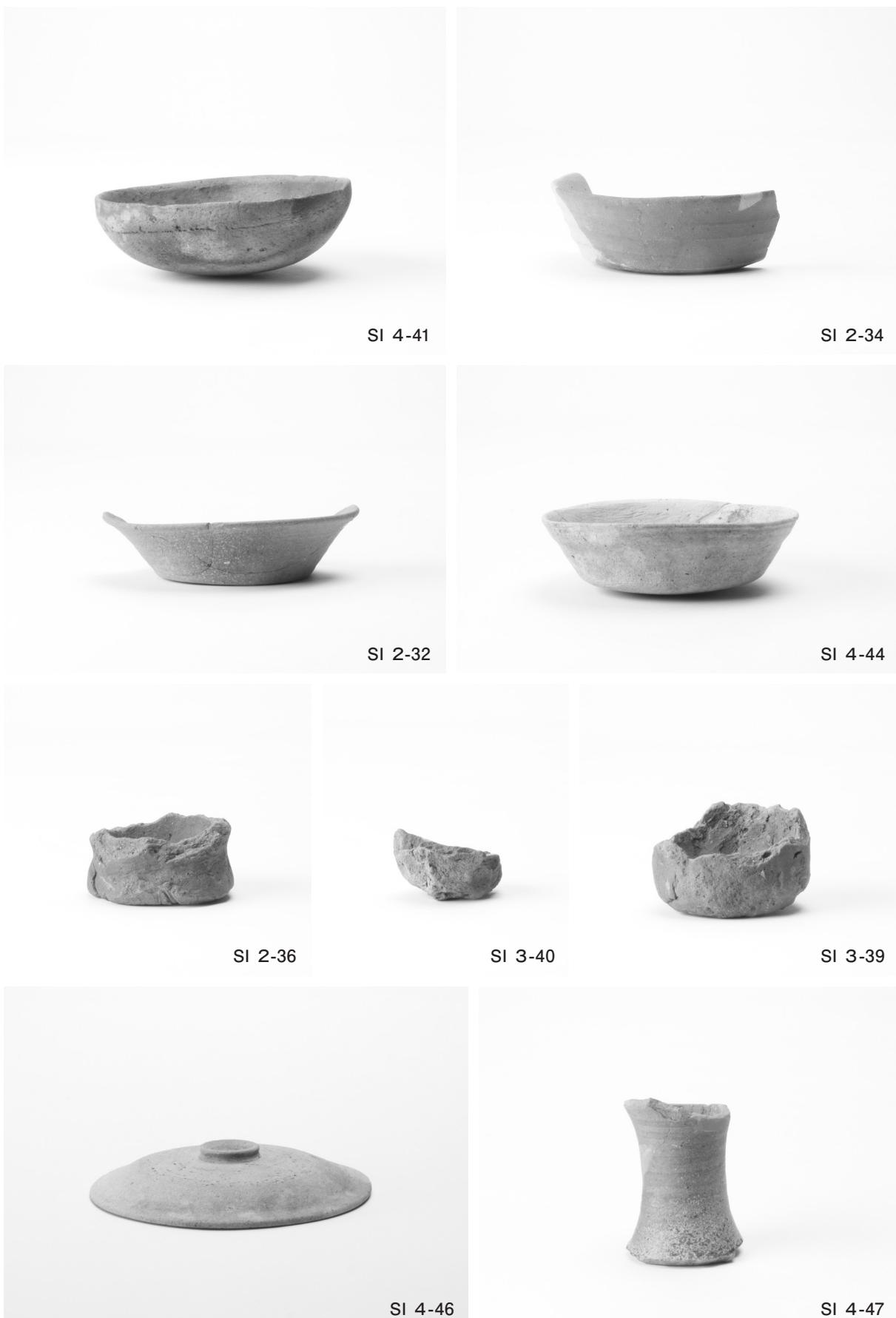
PL 8



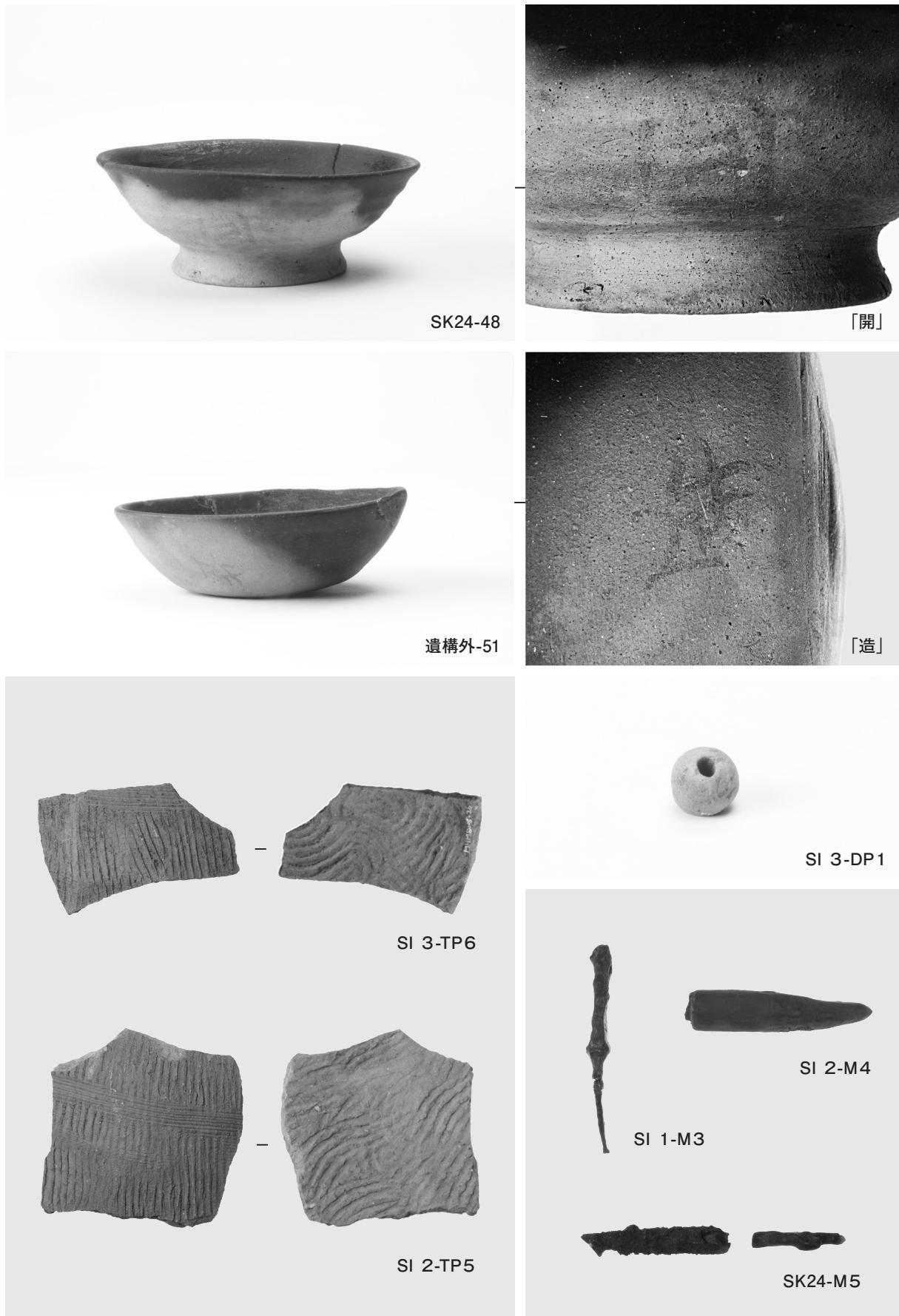
第3号墳、第5号住居跡出土遺物



第1・3号墳、第5・6号住居跡出土遺物

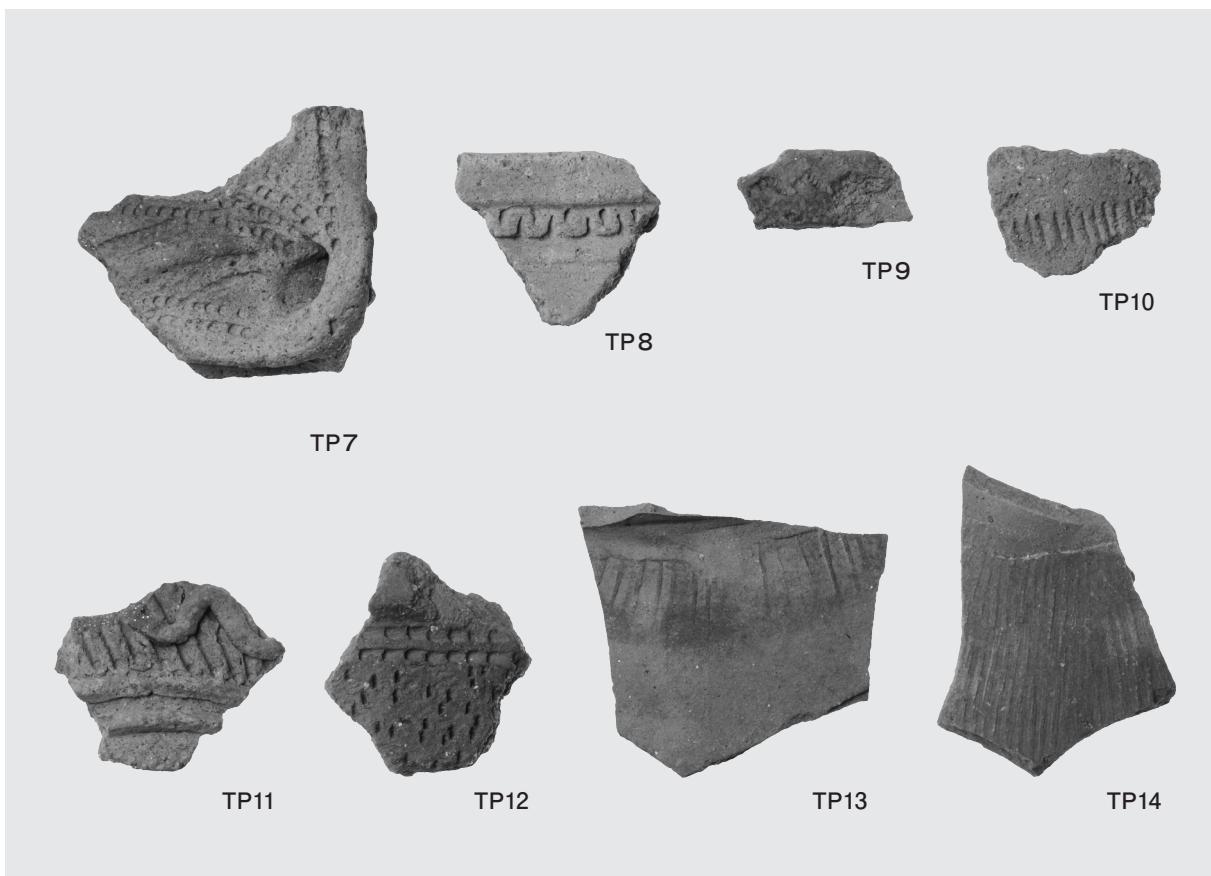


第2・3・4号住居跡出土遺物



第1・2・3号住居跡、第24号土坑、遺構外出土遺物

PL 12



遺構外出土遺物

## 抄 錄

ふりがな	ほりまちにしこふん							
書名	堀町西古墳							
副書名	一般県道真端水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第341集							
著者名	斎藤和浩							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2011(平成23)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
堀町西古墳	茨城県水戸市 堀町的場 639番地の2ほか	08201 + 081	36度 24分 11秒	140度 24分 48秒	38 ~ 40m	20080101 ~ 20080131 20090401 ~ 20090531	1,005m <sup>2</sup>  1,156m <sup>2</sup>	一般県道真端 水戸線道路改 良事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
堀町西古墳	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑	1軒 1基	縄文土器(深鉢・鉢) 石器(敲石)			
		古墳時代	竪穴住居跡 土坑	2軒 1基	土師器(坏・鉢・甕・甑)			
		奈良時代	竪穴住居跡	4軒	土師器(坏・椀・甕・手捏) 須恵器(坏・蓋・盤・長頸瓶・甕) 土製品(土玉) 金属製品(刀子)			
		平安時代	土坑	1基	土師器(高台付坏) 金属製品(刀子)			
	古墳群	古墳時代	円墳 方墳	2基 1基	土師器(埴・壺・甕) 金属製品(刀子・鉄斧)			
要約	その他	時期不明	円形周溝状遺構 土坑 道路跡 ピット群	1基 29基 1条 3か所	石器(石鎚・磨製石斧) 土製品(土器円盤・土器片錘) 金属製品(錢貨)			
			当遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡で、集落が営まれた時期は、縄文時代中期と古墳時代後期、奈良時代前期である。古墳3基(円墳2基、方墳1基)の周溝が確認され、出土遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。埋葬施設は削平された墳丘上に構築されていたものと思われる。					

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows XP  
Professional Version2002.ServicePack3  
編集 Adobe Indesign CS4  
図版作成 Adobe Illustorator CS4  
写真調整 Adobe Photoshop CS4  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
図面類 EPSON GT-X750  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第341集

## 堀 町 西 古 墳

一般県道真端水戸線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23（2011）年 3月17日 印刷  
平成23（2011）年 3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 いばらき印刷株式会社  
〒319-1112 那珂郡東海村村松3115-3  
TEL 029-282-0370